# 聖痕のクェイサー×真剣で私に恋しなさい！

マイシャッフルのクェイサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖痕のクェイサー×真剣で私に恋しなさい！

【Ｎコード】
Ｎ２０９７Ｗ

【作者名】
マイシャッフルのクェイサー

【あらすじ】
クェイサー。
それは、女性の聖乳＜ソーマ＞を吸う事によって、特定元素を自在に操る事が出来る特殊能力者。私立・翠玲学園潜入捜査、メテオラとの対峙から１年が過ぎ、鉄のクェイサー・サーシャに新たな任務が下される。舞台は、関東の南に位置する政令指定都市――川神市。川神市に流出する正体不明の元素回路を根絶するため、サーシャ、織部まふゆ、カーチャ、桂木華は川神学園へ潜入する。
そして、大和たち風間ファミリーとの出会い。交わるはずのない２

つの物語が今、交差する！

# プロローグ　―クェイサーｓｉｄｅ―

――アトス総本山本部。

天井から降り注ぐ、眩しく神々しい光が巨大な聖堂内を包んでいた。

聖堂の奥には大きな教壇。その教壇の前に立つ右目に眼帯を着けた男―ユーリ＝野田はいる。

そしてユーリの前には銀髪の少年―致命者サーシャ。

隣にはサーシャのパートナー“剣の生神女”織部まふゆ。

赤銅の人形遣い―エカテリーナ＝クラエと、パートナー“雷の携香女”桂木華。

彼らはこのアトスの総本部に招集をかけられていた。

「今日お集まり頂いた理由は他でもありません」

ユーリの声が聖堂内に響く。

「任務だな」

サーシャの問いに、ユーリはええと頷いた。

「川神市に詳細不明の元素回路（エレメンタル・サーキット）が流出し、被害が出ているとの情報が入りました」

元素回路（エレメンタル・サーキット）。

元素番号０の「賢者の石」を使って編み出され、身に着ければ様々な力を得ることができる代物である。

その元素回路が川神市内でばら撒かれ、所有した人間が悪事に利用し、暴行や窃盗が頻繁に行われているという。

「調査の結果、元素回路の流出先が川神学園周辺にある可能性が極めて高いと判断しました」

川神学園―川神市内を代表する大規模な学校で、特徴的な行事・授業が行われている有名校である。

アトスの調査部隊の報告によると、元素回路の流出が学園周辺に集中していることが判明したが、出所は一切不明。

川神院の人間や学園関係者にも協力を依頼しているが、危険な代物であるため、知っている人間は一部のみ。調査は難航していた。

「あなた方は川神学園に生徒として潜入し、元素回路の調査に当たってもらいます」

なるべく大事にならないよう速やかに処理をする…それがアトスの決定だった。

「致命者サーシャ、織部まふゆ。エカテリーナ＝クラエ、桂木華。川神学園に潜入し、元素回路の流出先を捜索、回収及び破壊するのです」

サーシャ達の、新たな任務が始まる。

## プロローグ　－クェイサーｓｉｄｅ－（後書き）

初投稿です。今後も頑張って更新していきたいと思うので、宜しくお願いします！

# プロローグ　―まじこいｓｉｄｅ―

――関東の南に位置する政令指定都市、川神市。季節は夏。

江戸時代から栄えていて、武士の屋敷等、歴史的建造物が多い。

そんな歴史ある街の中に、川神学園はある。

その川神学園を繋ぐ、大きな橋が多馬大橋。橋の下には多馬川が流れ、喉かな風景が続いている。

また、個性豊かな生徒が多いことから、通称「変態の橋」と呼ばれていた。

その橋を渡り、川神学園へと向かう生徒たち一行―風間ファミリー。

ファミリーのリーダー風間翔一ことキャップ。参謀役・直江大和。

島津岳人、師岡卓也。川神一子、川神百代、椎名京に黛由紀江。そして、クリスティアーネ・フリードリヒ。

仲の良いグループで、何をするにも一緒。新しく参入したクリスもすっかり溶け込んでいた。

「ああ、突然空から美少女でも降ってこないだろうか」

と、唐突に空を仰ぎながら幻想を抱く百代。向かう所敵なし。百戦錬磨の武神。

「何言ってんだよモモ先輩は。美少女なんて周りにいくらでもいるじゃねーか。俺にも分けてほしいくらいだぜ…」

恨めしそうに溜息をつく岳人。現在告白連敗中である。

「ダメだ、やらんぞ。あれは全部私のものだ。悔しかったら奪い取ってみろ。はっはっは」

勝ち誇ったように、高らかに笑う百代。当然それは自殺行為なので手は出せない。

「くっそ～……ああ、突然可憐な美少女（年上限定）が告白してこねぇかな～」

「大丈夫。それは天と地が引っくり返ってもあり得ない」

岳人にとどめの一言を入れる京。岳人はしゅんと肩を落としたのだった。

何気ない会話に花を咲かせる風間ファミリー一行。いつもの光景。いつもの日常。

そして――――。

「……あれ？みんな、前見て」

師岡―あだ名はモロ。モロが指差した先に、奴らはいた。

風間ファミリーに立ちはだかる、柄の悪い、黒の革ジャンとジーパンに身を包んだ輩が４人。

そう。百代に挑む挑戦者達だ。この橋では、百代に挑む者達が後を絶たない。

「川神百代。俺たちに出会った不幸を嘆くがいい」

不気味に笑う、スキンヘッドにサングラスをかけた男。その背後に、金髪に染めた不良が３人いた。

「何だお前。ハゲの兄弟か？道理で似てると思った」

「それ、似てる所は頭だけだからね」

すかさず突っ込みを入れるモロ。ちなみにハゲというのは２－Ｓの井上準のことである。

「呑気な顔をしているのも今のうちだぜ。俺たちはそこいらの人間とは訳が違う！」

不良Ｂが気味の悪い笑みを浮かべる。

「俺たちはクェイサー。元素を操る力を持つ能力者だ。俺は元素番号１１３番、俺の元素はウンウントリウム！」

不良Ａがダガーを手に構える。

「俺は元素番号１１４番。俺の元素はウンウンクアジウム！」

不良Ｂがメリケンサックをはめた拳を振るう。

「俺は元素番号１１５番、俺の元素はウンウンペンチウム！」

不良Ｃが鉈を振りかざす。

「「「俺たち、化学のイケメン貴公子“ウンウン☆マイスリー”！！」」」

不良Ａ・Ｂ・Ｃがそれぞれポーズを取って、呼び名を叫んだ。

「そして俺はヘリウム三兄弟、５番目の弟！」

脇にいたスキンヘッドが、おまけのように自己紹介する。

……。

風間ファミリー全員、沈黙していた。

「おおっ！何かかっけえな！」

ただ一人、キャップを除いて。キャップは目を輝かせながら感動していた。

「どうした。恐怖で何も言えなくなったか？それは当――」

「いや知らん」

不良3人組＋スキンヘッドの渾身の自己紹介も虚しく、百代はあっさりとそう言い切ったのだった。

「な、何だと！？俺たちクェイサーを前にして驚きもしないとは…貴様、何者！？」

「知らんものは知らん。そもそもなんだ“くぇいさー”って。新しい芸人グループか何かか？おい大和、知ってるか？」

百代の側にいた大和に尋ねる。

「いや、全然。聞いたこともないね。みんなは知ってる？」

後ろにいるメンバーに聞いてみるも、全員首を横に振るだけだった。

「みんな知らないそうです。それと、もう少しセンスのいい芸人名にしたほうがいいですよ。ウンウンなんとかはちょっとね…」

と、大和。その返答にウンウン☆マイスリー一同の表情が歪む。

「何か一発屋芸人にいそうだよね。それに、三兄弟なのに5番目の弟って……」

「それにイケメンってほど美系でもねぇよな。ちなみに、イケメンってのは俺様みたいな人間の事を言うんだぜ」

「ガクトに言われたらおしまいだね」

モロ・岳人・京の連携突っ込みが炸裂する。スキンヘッドの頭に血管が浮き上がった。

「貴様ら、さっきから聞いていればごちゃごちゃと！……まあいい、俺たちの力を見れば、そんな口は叩けなくなるだろうからな！」

スキンヘッドがファイティングポーズを取った。

「ここをお前の墓場にしてやるぜ、川神百代！」

「貴様を倒した後は、まずはそのけしからんおっぱいを晒してもらおう！」

「そして聖乳（ソーマ）をたっぷりと吸わせてもらうぜ！」

不良3人組＋スキンヘッドが一斉に飛びかかり、百代に向かって突進する。

「“そーま”？何だそりゃ……まあいいか、軽く遊んでやろう」

彼らの挑戦を受ける百代。だが百代は構えない。ただ向かってくる敵を待つのみ。

「「「「「沈めぇーーーーーーーーーーー！！！！！」」」」」

挑戦者達は勝利を確信していた。勝てる、と。だが彼らは知らない。百代の圧倒的な強さを。

そして次の瞬間。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――。

戦いは、あっという間に終わっていた。

スキンヘッドと不良3人組は、ボロ雑巾のように転がっている。百代は傷一つ負っていない。

勝負は、百代の圧勝で終わった。

「ば…バカな……俺たちが、負けるはず……」

スキンヘッドが朦朧とする意識の中、今起きた現実を受け入れられずにいた。たった一人の小娘相手に、一瞬にして全滅するなど、信じられるはずがない。

「意外だ。私の攻撃を受けたヤツは大抵意識を失うんだが…お前、結構タフだな」

感心する百代だったが、突然ニヤッと笑みを浮かべた。スキンヘッ

ドの背筋が凍りつく。本能が逃げろと警告しているが、戦闘によるダメージで体が動かない。

「褒美だ。眺めのいい場所に連れて行ってやる」

百代がニヤニヤしながら手をボキボキと鳴らし、スキンヘッドの胸倉を掴んだ。

「ひっ……ま、待て悪かった。今日の所は見逃しておいてやる。だから……」

「ん～、聞こえないなぁ」

「だ、だから悪か――」

「あ、そういや私のおっぱいがどうとかって言ってたよな」

「え、それは俺じゃ――」

「問答無用！そーれーら、飛んでいけ！」

命乞いも虚しく、百代はそのままスキンヘッドを空に向かって投げ飛ばした。スキンヘッドは断末魔と共に、空の彼方へと消えた。

「ほら、お前たちも置いていかれるぞ。そーーーれ！」

続いて不良3人組も投げ飛ばした。3人とも星になった。

「こうして、もも先輩に挑んだ芸人たちは、空へ旅立ちましたとさ」

しめくくる京。しかも彼らは最後まで芸人扱いだった。

「このやり取りもすっかり見慣れてしまったな」

「そうですね……」

『いやあ、慣れってのはコワいぜー』

クリスと黛由紀江ことまゆっち、そしてまゆっちの掌にいる馬のストラップ・松風。

最初は驚いていたが、今となっては日常の光景の一つとなっていた。

百代に挑戦しては敗れ、空を飛ぶ者もいれば、川へ落ちる者もいる。

正式な試合であれば川神院へ運ばれ手当てを受けるのだが、最近は非公式で挑む者たちが多かった。

「流石はお姉さま！あたしも頑張らなくちゃ！」

熱心にダンベルでトレーニングをしているのは一子ことワン子。百代を目標に日々鍛錬に明け暮れている。

「そうかそうか。可愛いやつだな、お前は。なでなでしてやろう」

百代はワン子を抱き締め、頭を撫でる。ワン子は気持ちよさそうに甘えていた。

「それにしても、ここ最近変な人増えてない？」

この橋には変な人間、もとい格闘家等が多いのは元々だが、日に日に増えている気がする、とモロ。メンバー全員も薄々と感じていた。

「しかも、姉さんを倒そうとする輩ばかり。命知らずだね、可哀想に」

大和はやれやれと肩を落とす。

「おまけにどいつもこいつも弱過ぎて退屈凌ぎにもならないから困る。今日の連中も“くぇいさー”だの“そーま”だの訳が分からん」

百代は自分と対等に戦える人間と出会えず、満たされないでいた。

「こんな時は、弟を弄るに限るな♪」

咄嗟に大和を捕獲し、大和の頭を自分の胸に埋めさせる百代。

「ね、ねえさん苦しい……」

「ほ～ら大和。私の“そーま”を吸え。なーんてな。はっはっは」

百代と大和はいつもこんな感じでじゃれ合っていた。一方的に弄られているのは大和なのだが。

「……おっ、そろそろ急がねぇと遅刻するぜ？みんな」

キャップが腕時計を見ながらメンバー全員に伝える。

「珍しいね。いつもならそんなこと言わないのに」

いつもは時間を気にせず、常にフリーダムなキャップには珍しい発言だ、と大和。

「なんか今日は、すっげぇ面白い事が起きそうな気がしてウズウズしてるんだよな！」

キャップはもう居ても立っても居られないくらい、テンションが高かった。

当然根拠はないが、こういう時のキャップの勘は良く当たる。というより外れた試しがない。

本人曰く、風の知らせだとか何とか。

「こうしちゃいられねぇぜ！早速教室までダッシュだ！ひゃっほーーー！」

言って、キャップは風のように走り出した。こうなるとキャップは誰にも止められない。

「あ、待てキャップ！」

クリスが続いてキャップを追いかける。

「む、クリに先を越されるわ！クリ、どっちが先に着くか勝負～！」

ワン子が勝負勝負と連呼しながら走りだす。

「なんだかよく分かんねぇけど、俺たちも行こうぜ！」

「あ、待ってよ岳人！」

「皆さん、待ってください～！」

『オラもいくぜ～！』

岳人、モロ、まゆっち、松風も後に続く。

「はっはっは。キャップは相変わらずだな～、私も混ぜろ～！」

百代もキャップ達を追いかけていく。

「みんな子供みたいに……しょーもない」

京はキャップ達には着いていかず、あくまでマイペースだった。

「私たちは大人だから、こうしてイチャイチャしながら愛を育む…
…大和、好き」

そしてあくまで大和に一途だった。大和の腕に絡み、身体を密着さ
せてセックスアピール。

「おっと、遅刻したらやばいから俺も行かないと」

大和は京から逃げるように走り去って行く。

「ち、逃げられた。照れなくてもいいのに～、もう、大和ったら可
愛い♪」

京も大和の後を着いていく。どこまでも一途だった。

こうして、彼ら風間ファミリーのいつも通りの日常は、穏やかに始まりを告げた。

しかし、彼らはまだ知らない。これから起こる数多の出会いと、決して忘れることのできない、サーシャ達との物語を。

## プロローグ　－まじこいｓｉｄｅ－（後書き）

次回、サーシャたちが２－Ｆに転入します！そしてバトル発生・・・には少し時間がかかりそうです。ボンボります、はい。

# 1話　川神学園、潜入

川神学園、応接室。

サーシャ、まふゆ、華はＨＲの時間が来るまで待機していた。

一方カーチャは別行動のため、まだ合流していない。

アトス本部でユーリから任務を受けた数日後、サーシャ達は川神市へ移動し、現在に至る。

任務遂行中の間は川神院へ滞在し、表向きは学園で通常の学園生活を送り、裏で元素回路の捜索にあたる。それが任務の内容だった。

「うちの制服もいいけど、ここの制服も結構可愛いわね」

白で統一されたデザインの川神学園の制服に、まふゆはすっかり気に入っていた。

「市を代表するってくらいだから凝ったもん想像してたけど、割とシンプルだよなー」

華の満更ではない様子。

「はしゃぐのは勝手だが、忘れるなよ。俺たちは遊びに来ているわけじゃない」

まふゆと華に忠告するサーシャ。サーシャはいつも通り私服姿でソファに座り、読書に耽っていた。

「そんな事分かってるわよ……それよりサーシャ。どう、似合う？」

まふゆが制服の感想を求めてくる。

いつもとは違う、まふゆの制服姿。妙に意識してしまい、サーシャの顔が僅かに赤く染まった。

「……し、知るかそんな事」

照れ隠ししているのか、サーシャはまふゆから目を逸らし、ボソッと呟くのだった。可愛くないんだから～と、思わず苦笑いするまふゆと華。

「しっかし、よかったよな～サーシャ。ここが“女子高”じゃなくてさ」

華がソファに寄り掛かりながら、嫌味ったらしく、そして“女子高”を強調しつつサーシャに言った。読書をしていたサーシャの身体がビクッと震える。

私立翠玲学園―1年前、サーシャが女装して任務を遂行していた自分を思い出してしまい、とうとう顔を真っ赤にしながら華を睨み付けた。

「華、お前……嫌な事を思い出させるな！」

「まあまあそう怒るなよ。アレはアレで結構似合ってたんだぜ？」

華に太鼓判を押されて、サーシャは更に顔を真っ赤にさせるのだった。

ちなみに任務の前日――。

『そう言えば、言い忘れていました。サーシャ君』

本部を立ち去る時、ユーリに呼び止められる。

『何だ？』

『潜入先の川神学園についてですが……』

『ああ』

『男女共学です』

『それがどうした？』

『翠玲学園の時と同様、女装しても構いませんよ？』

『……ふざけるな』

『私としては、是非ともそちらを希望したいのですが――』

『するかっ！！！！！！！！』

こんなやり取りがあった。サーシャは全力で拒否した。ユーリ曰く「非常に残念です。」との事。

（サーシャが女装ねぇ……）

まふゆは女子制服姿のサーシャを思い浮かべてみる。

銀色に輝く、サラサラとした長髪。碧色の瞳。川神学園の制服に身を包み、凛としていて、それでいて優雅で美しい。

『初めまして。私、聖ミハイロフ学園から転入してきました、アレクサンドル＝ヘルといいます。宜しくお願いしますわ。皆さま』

まふゆ達が女性としての自信を失くしそうな程、恐ろしく似合っていた。

「……結構、アリかも」

ぽか～んとした表情で、まふゆは思わず声を漏らす。

「だろ？ほら、織部もああ言ってる事だし、今からでも遅くねーから、女子制服に着替えてこいって。メイクは任せとけ！」

華はノリノリでサーシャに絡んでくる。

「誰がするか！考えただけでも身の毛がよだつ！！」

サーシャは本気で嫌がっていた。翠玲学園の一件から、もう二度と女装はごめんだと心に決めている。

と、二人がそんなやり取りをしている内に、ようやく応接室に教師が一人やってきた。

―２－Ｆの教師こと、小島梅子。

梅子も今回の一件を知っている数少ない人間の一人である。

サーシャ達はソファに座り、梅子と向き合った。

「待たせてすまないな、君たち。話は学長とユーリ殿から聞いてい

る。それと、学長なんだが…生憎と立て込んでいてな。また後程挨拶に来られるそうだ」

話を進めながら、資料をサーシャ達に配る梅子。資料の内容はユーリから説明を受けているので、大方サーシャ達は把握している。

「学園の校則・行事についてはその資料に全て記載されている。目を通しておいてくれ」

梅子は一通り話を終えると、間を置いて話題を切り換えた。任務についてだ。

「早速本題なんだが……元素回路（エレメンタル・サーキット）、だったか。残念ながら報告の通り進展はない」

申し訳なさそうに、梅子は話を切り出した。

元素回路は麻薬のように販売目的で出回っているわけではないようだった。そのため、実際に物自体を見たという目撃情報はなく、被害者、または加害者が気絶した状態で発見されるケースが殆どだった。

さらに被害者および加害者はその時の記憶を一切失っていて、手掛

かりが全く掴めずにいるのが現状だと、調査にあたった関係者は全員手を焼いているという。

「私たちだけでは解決できない状態にある。もはや君たちだけが頼りだ。私たちも出来る限り助力を尽くそう」

力を貸してほしいと、梅子はサーシャ達に頭を下げる。解決の糸口が見つからない今、皆縋る思いだった。

「無論だ。必ず見つけ出す」

「私たちも全力で解決致します」

「任せてください」

必ず解決する…そう受け答えるサーシャ、まふゆ、華。梅子は3人を見て安堵したように笑うが、すぐに表情を引き締めた。

「しかし任務とはいえ、この学園に転入した以上はしっかりと勉学に励んでもらうからな。特別扱いはしないと思え。もし怠けようものなら……」

ジャケットの懐から鞭を取り出し、強烈な鞭裁きを披露する梅子。

「教育的指導だ」

威圧的な態度で、梅子は宣告した。思わず、サーシャとまふゆの腰が退ける。

（む、鞭……あれで叩かれたら、はぁ…はぁ）

華は逆に興奮していた。気まずい空気になってしまったので、鞭をしまい、コホンと咳払いをする梅子。

「それで君たちのクラスなんだが……」

ユーリ経由で、聖ミハイロフ学園からサーシャ達の成績データを受け取っていた。

梅子はそれぞれのクラスをサーシャ達に言い渡す。

「まずは、桂木華。君はFクラスだ。ミハイロフ学園での成績はあまり宜しくないようだな。ちなみにFクラスの担任は私だ。みっちり扱いてやるから覚悟しておけよ」

ニヤリと笑いながら、梅子は華に言った。

「は、はいぃ……！」

華は非常に悦んでいた。

「この変態が」

サーシャが侮蔑の意味を込めて呟く。

「次、アレクサンドル＝ニコラエビッチ＝ヘル。織部まふゆ」

次にサーシャ、まふゆのクラスが言い渡される。

「アレクサンドル。君は飛び級しただけあって、成績は申し分ないな。素晴らしい」

思わず梅子が賞賛する程、サーシャの成績が良かったらしい。

「当然だ。どこかの馬鹿とは違う」

サーシャは華に対して言うように吐き捨てた。

「う、うるせーよ」

と、華。否定はしない分、馬鹿である事は自覚しているらしい。

「織部、君の成績もアレクサンドルに劣らず優秀だな。君たちは二人ともSクラスに入る権利がある」

Sクラスは中でも特別なクラスであり、優秀な生徒、また名声ある家柄の生徒がいると梅子は話す。ただし編入は任意であり、優秀かつ志願した者だけしか入れないという特進クラスだった。

「もちろん希望するのは君たちの自由だ。どうする、志願してみるか？」

特進クラスを進める梅子だったが、サーシャは迷うことなく、

「いや、俺は華と同じクラスでいい」

華と同じFクラスを志願したのだった。

「特進クラスだとかえって目立つ。できるなら、問題児の多いクラスに紛れたほうが動きやすい」

サーシャはあくまで任務を優先した。Fクラスは問題の多いクラスだと、学園の生徒が話していた事を耳にしている。

Fクラスの担任の梅子にとっては、耳の痛い話なのだが。

「私もサーシャの意見に賛成です。折角のご厚意ですが……今回は辞退させていただきます」

まふゆも同意見だった。

梅子は少し考え込んだが、サーシャ達がFクラスに入る事で、生徒たちにとって良い刺激になるかもしれない。そう思った。

「ふむ……そうか。君たちがそう言うのなら、是非とも私のクラスに歓迎しよう。それに、君たちのような生徒を受け持つ私としても鼻が高い」

これで、サーシャ達のクラスは梅子が担当する２－Ｆに決定した。
後はＨＲの時間が来るのを待つばかりだった。

## 1話　川神学園、潜入（後書き）

次でようやく２－Ｆの生徒たちと接触します。しかし、我ながら長いです……。

## 2話　波乱の幕開け

その頃、２－Ｆ。

Ｆクラスの生徒達は、ＨＲまでそれぞれ雑談しながら過ごしていた。

「でさ、チカリン。そいつがあの女と付き合ってた系で……」

「うんうん、それでそれで？」

チカリンこと小笠原千花と、羽黒黒子は恋愛絡みの話題で持ちきりだった。

「ねぇ、スグル。○○の新作どうだった？」

「地雷確定。あんなものはクソゲー以外の何物でもない。ストーリーも演出も××のパクリ。新作が聞いて呆れる」

オタクの大串スグルとモロはＰＣゲームの話で討論中。

「さっきの競争はあたしの勝ちだわ！負けを認めなさいよクリ！」

「いいや、僅かに自分の方が早かったぞ。負けを認めるのはお前だろう、犬！」

ワン子とクリスは登校途中での競争で、勝ち負けを言い争っていた。

皆それぞれ、他愛のない話に花を咲かせていた。変わらない、いつも通りのＦクラスの日常である。

しばらくして、ＨＲを知らせる予鈴のチャイムが鳴る。

「おーい、もうすぐウメ先生が来るぞー！」

Ｆクラスの生徒の一人が全員に告げる。すると今まで雑談していた生徒達は自分の席に戻り、何事もなかったかのように静まり返った。

梅子は厳しい。もしお喋りをしようものなら、鞭による教育的指導が待っている。

廊下からカツカツと厳めしい音が聞こえ、梅子が教室に入ってきた。

「起立！礼！」

委員長である甘粕真与の号令と共に、クラスの生徒達が元気よく挨拶をする。

「おはよう！着席して良し」

全員が着席すると、梅子は早速話を切り出した。

「朝のＨＲを始める」

いつものように、梅子のＨＲが始まった。

「突然だが、今日付けでこのクラスに転入する事になった生徒達がいる」

梅子の突然の朗報に、クラス全員がざわめき始めた。

「静粛に！」

梅子の鞭が床を叩き、ざわめきが一気に？き消える。梅子は続けた。

「これから諸君に紹介しよう。よし、入っていいぞ」

梅子が教室の扉に向かって声をかけた。クラス全員の視線が扉に集中する。

「「し、失礼します！」」

扉がゆっくりと開く。最初に入ってきたのはまふゆと華。二人は緊張しながら、黒板に自分達の名前を書き、これからクラスメイトとなる生徒達に振り返った。

「あの…聖ミハイロフ学園から転校してきました、織部まふゆです。よ、よろしくお願いします！」

「お、同じく桂木華です。よろしくお願いします！」

まふゆと華が自己紹介を終えると、クラス中の生徒―特に男子が騒ぎ立て始めた。

「うおおっ、マジ可愛くね！？」

岳人が鼻の下を伸ばしながら、まふゆたちを見て興奮している。

「こりゃ嬉しいサプライズだぜ！あ、やべぇ、勃ってきた…」

福本育郎―通称ヨンパチは遠い目をしながら、はぁ、はぁと妄想に耽っていた。

「ふん、また女子が増えたか……」

不機嫌そうにまふゆ達を一瞥するスグル。反応は皆様々だったが、とりあえず歓迎はされていた。

「こら、静かしろ貴様らっ！」

また鞭を床に叩きつけ、ざわめきを鎮める梅子。このやり取りに馴染めるのだろうか…まふゆは少し不安になった。

「実はな、もう一人いる。織部と桂木と同じく、聖ミハイロフ学園からの転入生だ。アレクサンドル、入れ」

梅子がもう一度、教室の扉に向かって声を出す。

「……」

サーシャは無言で教室に入ってきた。クラス全員がサーシャを見て目を丸くする。

黒板に自分の名前を書き、緊張していないのか、表情を変えずに淡々と自分の名前を告げた。

「アレクサンドル＝ニコラエビッチ＝ヘルだ」

自己紹介を終えるサーシャ。変わって、梅子が代弁してサーシャの説明を始める。

「彼はロシアから飛び級で留学してきた実力のある生徒だ。勉強で分からない事があれば、彼に教えてもらうといい」

サーシャがよほど珍しいのか、クラス全員がサーシャに釘付けだった。

「急な話だが、みんな仲良くしてやってくれ。三人の席は先程伝えた場所の通りだ。以上、朝のＨＲを終了する」

HRが終わり、梅子がサーシャ達が席に座ったのを確認すると、教室を出て行った。

それと同時に、

「お・・・・・・男の子キターーーーーーーーーー!!!!!!!!!」

千花を筆頭に、一部の女子（殆ど）が歓声を上げた。一斉にクラス中の生徒達がサーシャ達によってたかる。

「ねぇねぇ、アレクサンドル君だっけ？あたしは千花。小笠原千花よ。チカリンって呼んでね♪」

「あたいは黒子。ってかアレクサンドル君、マジ美形～。あ～、ちょ～抱かれてぇ」

「まふゆちゃん、彼氏は!?彼氏はいるの!?」

「桂木さん、よかったら川神市内を案内しようか!?」

Fクラスの生徒達に囲まれ、怒涛の質問攻めが始まり、戸惑うサーシャ達。

「こ、こら～。3人とも困ってるじゃないですか！ここは順番に……」

真与が生徒達をまとめようと試みる。しかし誰もがサーシャ達に夢中で、その声は届かなかった。

その一方で、彼らを観察する大和とキャップ。

「な？だから言ったろ？面白い事が起きるってよ！」

キャップの勘は当たっていたが、今日まで転入生が来るという情報は一切なかった。大和はそれがそれが気がかりになっていた。

（……まあ、いいか。こういう事もたまにはあるさ）

深く詮索しても仕方がないので、大和はあまり気にしない事にした。

「まふゆちゃんは……80・56・84。華ちゃんは……79・54・79って所だな。なるほどなるほど……」

ヨンパチは距離を置いてまふゆと華の体型を観察し、スリーサイズを一瞬にして見抜いた。彼は女性の事になると、力を発揮する。

（（うわ、何か寒気が……））

まふゆと華は悪寒を感じ取っていた。

その後もクラスメイトの質問攻めは1時限目の授業が始まるまで続き、初日早々、大変な思いをしたサーシャ達なのだった。

1時限目の授業終了のチャイムが鳴り、サーシャはすぐに教室から出ようと席を立ち上がる。これ以上質問攻めに合わないためだ。

「あ、待ってよアレクサンドル君！もっとお話し聞かせてよ～！」

千花や他の女子達を無視し、サーシャは教室を後にした。

「……」

教室を出たサーシャは壁にもたれかかり、疲れを吐き出すかのようにふぅと溜息を洩らす。

（……騒がしいクラスだ）

元々賑やかな雰囲気が嫌いなサーシャだが、ミハイロフに転入してからは徐々に慣れつつあった。

しかし、このクラスはそれ以上に賑やか過ぎる。任務が終わるまでの間、このクラスの生徒と付き合うのだと思うと先が思いやられる…と、サーシャは肩を落とす。

しばらく壁にもたれかかって休んでいると、生徒が数人、サーシャに近づいてきた。

「――お前が例の転入生か？」

話しかけてきたのは、着物を着た女子生徒―不死川心。その隣には葵冬馬、井上準、榊原小雪と他数名。

全員、２－Ｓの生徒達である。次から次へと…サーシャはうんざり

した。

「何の用だ」

「２－Ｆに転入してきた生徒がいると聞いたので、どんな方なのか気になりましてね……ああ、私は葵冬馬。２－Ｓ所属です」

冬馬が自己紹介を始める。１時限目の授業で、既に噂は流れていた。

「わ～、銀髪だ。銀髪だ～！」

まるで珍しい物でも見るかのように、小雪がサーシャをジロジロと観察し始めた。サーシャはあからさまに鬱陶しいという表情をする。

「こら、ユキ。困ってるからやめなさい……悪いな。こいつ、留学生があんまり珍しいもんだからはしゃいでんだよ」

準は詫びを入れながら、うーうー言いながら駄々を捏ねる小雪を連れ戻した。

「それにしてもお前、変わった奴じゃのう。飛び級で留学してきたと聞いたが、何故Ｆクラスなのじゃ？」

心の質問に対してサーシャは、

「俺がどこに行こうが俺の勝手だ。お前には関係ない」

心には目もくれず、淡々と答えた。そんなサーシャの態度が気に食わなかったのか、心は食ってかかる。

「生意気な奴じゃ。高貴な此方がわざわざ足を運んでやったというのに、随分と偉そうな態度じゃのう」

「お前を呼んだ覚えはない」

「ぐっ……お前、此方が誰だか分かっておるのか？」

「知ったことか。お前が誰だろうと興味はない」

「い、イラつくのじゃ～！」

サーシャと心が言い争い（心が一方的に振った上、サーシャは全く

相手にしていない）をしていると、戻ってこないサーシャが気になったまふゆと華が教室から出てくる。

「サーシャ、どうかしたの？」

「別にどうもしない」

と、サーシャ。まふゆと華は周囲の状況を確認する。どう見ても、何もないわけがなかった。

「なんじゃ、お前たちも転入生か。ふん、見るからに野蛮な顔立ちをしておるのう」

サーシャでは相手にされないと分かると、今度はまふゆと華に因縁を付け始めた。華は舌打ちをすると、心を睨み付ける。

「何だお前、やんのかよ？」

「おお～。怖い怖い。これだから２－Ｆは野蛮な山猿が多くて困るのじゃ」

扇子を広げ、口元を隠しながら嘲笑う心。冬馬と準、小雪以外のＳ

クラスの生徒達も小馬鹿にするように笑う。

（うわぁ、感じ悪……）

まふゆは嫌悪感を覚えた。するとまふゆ達に続いて、Ｆクラスの生徒達もぞろぞろと見物しにやってくる。

「関わらない方がいいよ、まふゆっち。あいつは２－Ｓの不死川心。学園中の嫌われ者よ」

心は名家に生まれたＳクラスの生徒の一人。名家に生まれたが故、偏った選民思想を持ち、周囲の人間を庶民として見下す嫌な奴だと千花が話す。

もちろん心だけではない。２－Ｓの生徒達は皆２－Ｆを見下していて、Ｆクラスの殆どがよく思っていなかった。どうやら２－Ｓと２－Ｆは対立関係にあるらしい。

まふゆは、２－Ｓに志願しなくてよかったとホッと胸を撫で下ろした。

「２－Ｆの山猿どもがゾロゾロと……あ～、嫌じゃ嫌じゃ。馬鹿がうつるわ」

ここぞとばかりに心は嫌味を放ち、２－Ｆから反感を買っている。

「言いたい事はそれだけか？馬鹿がうつるならさっさと失せろ」

黙っていたサーシャが顔を向けず、視線だけを心に向けて言い放った。

「ふん、身の程をわきまえよ。此方は不死川家の息女。やんごとなき身分なのじゃ。たかが飛び級して留学したくらいで、いい気になるでないわ」

２－Ｆの生徒に散々嫌味をぶつけて機嫌の良くなった心は、余裕の笑みすら浮かべ、サーシャを見下した。

そんな心の姿を見てまふゆと華は、

（なんか、昔の美由梨を思い出すわ……）

（なんか、昔の美由梨を思い出すぜ……）

同じ学園のクラスメイト―辻堂美由梨の事を思い出していた。今でもあの高笑いが聞こえているような気がする。

しかし、サーシャは心の言葉に動じることなく、

「――見苦しい。他人の威を借るしか能がないのか」

かつて、辻堂美由梨に放った言葉を口にした。

「な……なんじゃと!?」

思わず動揺を隠せない心。今の今まで、そんな事を言われたのは初めてだった。

「自分では靴一つ磨けない無能者が、偉そうな口を叩くな」

「……い、言っておくがの、２－Ｓに入ったのは、此方の実力じゃ！」

今のクラスに在籍しているのは家の銘柄だけではない、と心は言い張る。以外に努力家だった。

「お前のクラスには成績一つで威張るような連中しかいないのか。特進クラスが聞いて呆れる」

「な、なななななな……」

心はとうとう言葉を失い、そのまま黙ってしまった。プライドを傷つけられ、ショックを隠せないようだった。それも、相手が２－Ｆの生徒ならなおさらだ。これ以上の屈辱はない。

２－Ｆの生徒達から「いいぞー、アレクサンドル！」「もっと言ってやれ！」と、エールが送られた。

これ以上言い返してこないと分かると、サーシャは自分の教室へと戻っていく。

「……とうじゃ」

ふと、心が小さく呟いた。サーシャの足が止まる。

「何？」

「……決闘じゃ！此方はお前に決闘を申し込む！！！」

心は扇子をサーシャに突き付け、高らかに宣言した。

決闘―学生の間でいざこざがあると、学生同士で戦って決着をつけるという、生徒の自主性・競争意識を尊重した川神学園独特のシステムである。

「ちょ、ちょっとサーシャ。まさか受けるの？もし受けたりしたら……」

まふゆが耳打ちする。当然、決闘を受ければさらに目立つ事になるだろう。ただでさえ留学生という理由で有名人扱いなのに、これ以上目立てば任務に差し支える可能性がある。

「くだらん。お前の相手をしている暇はない」

サーシャは申し出を拒否した。面倒を起こせば任務に影響が出る…当然の判断だった。

「なんじゃ、怖気づいたか？あれだけ威勢のいい事を言っておきながら、所詮は口だけじゃったか。ほっほっほ、とんだ腰抜けじゃのう」

心はサーシャを罵り、嘲笑う。他のSクラスの生徒達からも笑い声が聞こえる。

ここまで馬鹿にされては黙ってはいられない。流石のサーシャも頭に血が上り、心に振り返った。

『Вы можете либо дрожь？（お前は、震えた事があるか？）』

サーシャが感嘆してロシア語を口走り、心に敵意の眼差しを向ける。

「その決闘、受けて立つ！」

宣戦布告し、心との決闘を受理した。

「決まりじゃな。場所は校庭、時間は昼休みじゃ。逃げ出すでないぞ」

時間と場所を指定し、心とSクラス一行はサーシャ達の前から去っていき、自分達の教室へと戻っていった。

「おい、聞いたか？アレクサンドルと不死川が決闘だってよ！」

「マジかよ、こりゃ見物だぜ！」

「どっちが勝つんだろうね！」

「あたしはアレクサンドル君に勝ってほしいわ！」

決闘が決まり、２－Ｆの生徒達が盛り上がり始めた。これで、サーシャ達のことが一気に学園中に知れ渡る事になるだろう。

「お、おいサーシャ。いいのかよ！？」

心配そうに尋ねる華。しかし受けてしまった以上、もう後には退けない。

「クェイサーの力を使わなければ問題ない」

「そういう問題かよ……」

「目立たなければいいんだろう」

言って、サーシャは教室へ戻っていく。

「あの馬鹿……何考えてんのよ、もう」

予想だにしない事態が起きてしまったと、まふゆは肩を落とした。
この決闘で任務に影響が出ない事を、ただ祈るしかない。

結局、勢い余って決闘をすることになったサーシャ。こんな調子で、
無事に任務を終える事ができるのだろうか。

まふゆと華の不安は、さらに高まるばかりだった。

――――不死川心との決闘まで、後数時間。

## 2話　波乱の幕開け（後書き）

次はいよいよサーシャＶＳ心の決闘が始まります！そしてカーチャ様も登場！

ちなみにサーシャのロシア語の翻訳は多分間違ってます；；；ロシア語の電子辞書でも買おうかな……。

## サブエピソード1「クラスの雑談1：2－Fの番長」

★クラスの雑談1：2－Fの番長★

2時限目終了後の休み時間。

（ん、風を感じる……）

風が吹く予兆を感じ取ったヨンパチはカメラを身構えた。

ターゲットはもちろん千花。千花はまふゆとすぐに打ち解けていた。
今はまふゆと話に夢中になっていて、こちらには気づかない。

（まふゆちゃんまでセットなんて……今日の俺はツイてるぜ！ぐへへ、こいつはいいアングルが取れそうだ）

涎を垂らしながら、まふゆと千花のスカートが捲れる瞬間を、今か今かと待ち続けている。

ズーム機能を使い、まふゆと千花の後ろ姿を捉え、スタンバイＯＫ。
退路確保。

（3・2・1……）

「きゃっ」

「わっ」

風が吹き、まふゆと千花のスカートが捲れ上がる。今こそシャッターチャンス！

「よっしゃいくぜ！ファイ――――」

「何やってんだ、お前」

カメラのシャッターを切る前に、通りすがった華がカメラを取り上げた。

「アーーーッ！！！俺の今日のオカズがーーー！！」

シャッターチャンスを逃し、悲痛な叫びを上げるヨンパチ。

「あ、わりぃわりぃ。邪魔したか？」

どうやら華は悪気があってやったわけではなく、ただ純粋に興味本位でカメラを取っただけだった。

パンチラを撮ろうとした事は悟られてはいないと、ヨンパチはホッと息を漏らす。

「で、何やってたんだよ？」

「そりゃあ……あれだよ、俺は女性の美を追求してたんだ！」

しまった……とうっかり核心に迫るような発言をしてしまい、思わずヨンパチは口元を押さえた。

「は……？女性の美？追求？」

華はカメラで写そうとした場所を確認する。

そこには、スカートを押さえているまふゆと千花の姿があった。

「って、盗撮じゃねぇかよ」

まふゆと千花のパンチラを盗撮しようとしたのだと、華は一目でわかった。

「いや、違うね！俺は盗撮なんてこそこそするような真似は絶対にしねぇ！……ああ、でもたまにするかも」

「堂々と撮りゃいいってもんじゃねぇだろ……」

開き直るヨンパチの態度に、華はもう呆れてものも言えなかった。

「華、どうかしたの？」

ヨンパチと話している内に、まふゆと千花がやってきた。華は持っていたヨンパチのカメラを二人に見せて、

「こいつ、織部とチカリンのパンチラを盗撮しようとしてたんだよ」

盗撮していた事を暴露した。ヨンパチはバツの悪そうな表情を浮かべている。

それを聞いたまふゆと千花は顔を真っ赤にし、ヨンパチを睨み付けた。

「また盗撮!?ホント凝りないよね、このエロザル!!」

「ちょっと福本君、どういうつもりなの!?」

まふゆと千花に責め立てられ、逃げ場をなくすヨンパチ。華はそれを面白がって見ていた。

「まあ、その辺にしとけよ。ほら、カメラ返すぜ」

言って、華はカメラをヨンパチに投げ返した。

「盗撮は好きにしてもいいけどよ、あたしの目の黒い内は絶対撮れねぇと思ったほうがいいぜ?」

くっくっくと笑い、華は警告する。華がいる以上、女子の撮影は困難になるだろう。

「さっすが華。頼りになるぅ～♪」

千花もすっかり華と仲が良くなっていた。

「く、くそぉ……見てろよ、お前の目を掻い潜って、絶対撮りまくってやるからな！」

しかし、ヨンパチは懲りることなく宣戦布告をするのだった。華はやれるもんならやってみろと鼻で笑う。

こうして２－Ｆに、番長的な存在が誕生した。

## サブエピソード1「クラスの雑談1：2－Fの番長」（後書き）

2話のサブエピソードになります。本編では描き切れなかったお話を、ちょくちょくうpしたいと思います。

## サブエピソード2「クラスの雑談2：まふゆの実力」

★クラスの雑談2：まふゆの実力★

3時限目の休み時間の事。

まふゆはすぐクラスに馴染み、生徒達と打ち解けていた。

教科書を机の中にしまっていると、クリスに声をかけられる。

「聞きたいんだが、まふゆは剣道をやっているのか？」

クリスはまふゆの荷物にあった竹刀袋が、ずっと気になっていたようだ。まふゆは答える。

「うん。昔剣道部に入ってたんだけど、色々あって今は辞めちゃったの。でも稽古はちゃんと自分で続けてる」

「そうだったのか。もし差し支えなければ、自分と手合わせを願いたい」

是非まふゆと一戦交えてみたい、とクリス。

「それって……まさか、決闘？」

「いや、単なる腕試しだ。自分は、まふゆの強さが知りたい」

決闘ではなく、純粋な勝負の申し出だった。サーシャに続いて決闘を起こせば、もう任務どころではなくなる。

それなら……と、まふゆは承諾した。

「いいけど、私あんまり強くないよ？」

「そうか？自分は、まふゆにただならぬ何かを感じるんだが」

クリスはまふゆに興味を抱いていた。

確かにまふゆは剣の生神女（マリア）である事や、危険な任務に関わっている事。少なくとも普通の人間とは違う。

任務とはいえ、やはり隠し事をするのは気が退ける。

「なになに？何の話？」

ワン子が話の輪に入ってくる。

「今度、まふゆと手合わせをすることになった」

「え、そうなの！？それならあたしとも勝負してほしいわ！」

目を輝かせながらまふゆに懇願するワン子。先程の心といい、この学園は好戦的な生徒達が多いなとまふゆは思った。

「何か、二人とも強そうだよね」

思わず感想を漏らすまふゆ。

「まあね。ま、クリはあたしの次ってところかしら」

強いと言われ、すっかり機嫌を良くしたワン子はえっへんと胸を張る。

「む、それは聞き捨てならないな。どちらかというと二番目はお前だろう、犬」

「違うわよ、二番目はあんたでしょ！？」

「いいや、お前だ！」

互いに火花を散らすワン子とクリス。

「ま、まあまあ二人とも……」

まふゆが二人を宥めようと声をかける。しかし二人の耳には届かない。

「クリよ！」

「お前だ！」

「ちょ、ちょっと……」

暴走する二人を前に、どうしていいかあたふたするまふゆ。

「何よ、じゃあ勝負する！？」

「望むところだ！」

「だ、だから……」

このままだと決闘になりかねない。まふゆは言う事を聞かない二人にとうとう痺れを切らし、

「だから……やめなさいって言ってるでしょうがぁ！！」

竹刀袋から竹刀を取り出し、聞く耳持たないワン子とクリスの頭に面を食らわせた。

「あうわっ！？」

「ぐっ！？」

まふゆの一撃をもらい、ワン子とクリスはようやく落ち着きを取り戻した。

「……」

「……」

キョトンとした表情でまふゆを見るワン子とクリス。クラス中の視線がまふゆに集まった。

やばっ…と、まふゆは我に返る。

「ごご、ごめん！つい……」

サーシャと接する時の感覚で、つい手が出てしまったとまふゆは謝罪した。

「……見切れなかった」

「自分もだ」

しかし、二人とも怒っている様子はなかった。むしろ逆に感心しているといった感じだ。

「驚いたわ、まふゆも結構やるじゃない！」

早く戦ってみたいわ、とワン子は闘争心を燃やす。

「只者ではないと思っていたが……自分はますます興味が湧いたぞ、まふゆ！」

手合わせをするのが楽しみだ、とクリスは笑う。

何はともあれ、喧嘩に発展しなくてよかったとまふゆは安堵した。

「口より先に手が出るのは相変わらずだな」

一部始終を見ていたサーシャに痛いコメントを貰うまふゆ。

「う、うっさいわねこのツンドラ坊主！」

図星を突かれ、まふゆは顔を赤くしながらサーシャに食ってかかる。

本当に仲がいいなぁ、とFクラスの生徒達はサーシャとまふゆを暖かく見守るのだった。

## サブエピソード2「クラスの雑談2：まふゆの実力」（後書き）

まだ続きます。気が付いたら、２０ポイントも頂いていました。評価して下さった方、ありがとうございます。

## サブエピソード3「クラスの雑談3：ファミリートーク（男性陣編）」

★クラスの雑談3：ファミリートーク（男性陣編）★

同じく、3時限目の休み時間。

キャップ、大和、岳人、モロの4人は、サーシャと心の決闘の話で持ちきりだった。

決闘まで後数時間を切っている。当人のサーシャはというと、

「……」

席に座り、静かに読書をしていた。

「アレクサンドル君、随分余裕だね」

モロはサーシャを見て思う。余程自信があるのか、それとも読書で緊張を紛らわしているのか。

どちらかというと、前者に見えた。

「なあ、大和はどう思うよ？」

決闘でどちらが勝つか。キャップが大和に意見を求めてくる。

「う～ん……今の時点では何とも言えないなぁ」

突然転入してきた留学生、アレクサンドル＝ニコラエビッチ＝ヘル。

大和は少なからず、サーシャに興味を持っていた。

彼の事は未だ未知数。今の段階では結論は出せないが、今まで男子と女子の決闘では、男子の殆どが負けているというのが現状だった。

従って、統計学的に言えば勝利するのは心という事になる。

それに心は意外にも全国区の実力を持つ程の柔道―主に関節技の使い手であり、並大抵の人間ではまず勝てないだろう。

決闘の形式は喧嘩だけでなく、スポーツ、論争等の様々なジャンル

を選ぶ事が可能だ。

にも関わらず、サーシャは直接対決を選んだ。という事は、それなりに戦闘経験を積んでいると推測ができる。

「ま。考えても仕方ねぇし、決闘の時間になるまで待とうぜ」

と、岳人。

しかしサーシャは心の戦闘スキルを知らないはずだ。一応知らせておいた方がいいだろうと、大和は席から立ち上がった。

「俺、ちょっとアレクサンドル君と話してくるわ」

言って、大和はサーシャの席へと近づいた。

「決闘まで後少しだね。緊張とかしてない？」

「……別に緊張などしていない」

サーシャは大和に顔を向けず、読書をしたまま答える。大和はその

まま続けた。

「アレクサンドル君の対戦相手なんだけど、あいつ―不死川心は柔道の使い手で、全国に通用する程の実力者だよ」

心について、知っている限りの情報を提供する大和。

ただ教える為ではない。これはサーシャとのコミュニケーションを取るいい切っ掛けになる。

サーシャという人物を、より良く知る為に。

するとサーシャは読書をやめ、読んでいた本を閉じて立ち上がる。余計なお世話だっただろうか…しかし、サーシャから返ってきたのは意外な言葉だった。

「спасибо（感謝する）」

ロシア語でいう、「感謝」の意味であると大和は理解する。第一印象は無愛想だが、意外に話の分かる奴かもしれないと大和は思った。

「だが、相手が誰だろうと俺には関係ない。立ちはだかる敵は――

―全て倒すだけだ」

それだけ大和に言って、サーシャはまふゆのいる席へと向かっていく。

「口より先に手が出るのは相変わらずだな」

「う、うっさいわねこのツンドラ坊主！」

サーシャにはまだ謎が多い。だからこそ、大和の好奇心がそそられる。

（アレクサンドル、か……）

面白い奴がやってきた……と、大和はサーシャという人物にさらなる興味を抱くのだった。

## サブエピソード3「クラスの雑談3：ファミリートーク（男性陣編）」（後書き）

サーシャ×大和……これは一筆書けそうだ！
なんてことにはなりませんのであしからず（笑）

## サブエピソード4「女王（エンプレス）の来校」

★女王（エンプレス）の来校★

サーシャ達が２－Ｆに転入した同時刻、カーチャも学園に到着し、転入先のクラスは１－Ｃに決定した。

サーシャと同様、飛び級で学園に転入という手筈になっている。

「初めまして。エカテリーナ＝クラエといいます。“カーチャ”って、呼んで下さい♪」

カーチャはスカートを広げ、とびきりの笑顔でクラス全員に一礼する。

まるで妖精のようなその姿は、１－Ｃの男子生徒全員の目を釘付けにした。

女子生徒達もカーチャのあまりの可愛らしさに、思わず抱き締めたいという生徒もいれば、いけない妄想に走ろうとする生徒もいる。

転入して早々、カーチャは1－Cのアイドルの座を獲得した。

「凄いですね……あんなに小さいのに、飛び級で留学だなんて」

感心し、カーチャに尊敬の念を抱くまゆっち。

『何言ってんだよー。まゆっちだって成績優秀で、色々と頑張ってるじゃんかー』

携帯ストラップの松風が、まゆっちに励ましのエールを送る。と言っても実際に喋っているのはまゆっちなのだが。

そんな中、カーチャは松風と喋っているまゆっち（独り言）に視線を注いでいた。

（……ふーん）

ニヤリとカーチャの口元が吊り上がる。この瞬間、まゆっちが奴隷候補にあがった。

そして昼休みの時間。

昼食を食べ終えたまゆっちは、友人であるクラスメイト―大和田伊予と一緒にいた。

「というわけでイヨちゃん。私、カーチャさんに声をかけてみたいと思います」

カーチャと友達になるきっかけを作るため、意気込むまゆっち。まだ声すらかけていないのに、まゆっちは緊張して顔を強張らせていた。

ちなみにまゆっちの友達１００人計画は、まだ続いている。

「落ち着いてまゆっち。ほら、深呼吸深呼吸」

『そうだぜー、まゆっち。ここで挫けたら前に進めねぇー』

私も一緒に声をかけるから、と伊予や松風も応援してくれていた。

「すー、はー、すー、はー……で、では、参ります！」

深呼吸して息を整え、まゆっちはカーチャのいる席へと足を運ぶ――――。

「――こんにちは、お姉さま方♪」

まゆっちの視線の先には、無垢な笑顔を浮かべたカーチャの姿があった。

突然のカーチャの訪問に、まゆっちの心臓が飛び跳ね、バクン、バクンと音を立てる。

「あ、あああ、えええっと、あのその……こここここここんにちは!!!」

先に声をかけられて、緊張が極限までに達したまゆっち。辛うじて挨拶は返せたが、顔は強張ったままだった。

そんなまゆっちを見兼ねて、伊予が助け船を出す。

「こんにちは、カーチャちゃん。私は大和田伊予。こっちは黛由紀江。で、この子が松風、よろしくね」

『おう、よろしくなー』

「はい、よろしくお願いします。伊予お姉さま、由紀江お姉さま、松風♪」

カーチャは自己紹介の時のように、礼儀正しく一礼する。

（ほら、まゆっち）

伊予が肘でまゆっちの脇を突く。本当なら伊予が伝えれば済む話だが、それではまゆっちの為にならない。

『いけー、チャンスだまゆっちー。やるなら今しかねぇ。大人の階段を登るんだー！』

松風に後押しをされる。まゆっちは意を決して大きく息を吸い込み、カーチャに伝えた。

「あ……あああああの、わ、わわわわたしとお友達に――――」

「おい、聞いてくれ！転入してきた２－Ｆの留学生と、２－Ｓの不

死川先輩が決闘だってよ！」

同じクラスの男子生徒が声を張り上げる。クラス全員が一斉に教室を飛び出し、決闘の場である校庭へ向かう。おかげで、まゆっちは言いそびれてしまった。

２－Ｆの留学生……それはサーシャの事だとカーチャはすぐに分かった。

（決闘……？はっ。鉄の奴（ジェレーザ）、目立った行動はしないって言ったくせに、ほんとお子ちゃまね。ま、いいわ）

決闘のシステムはカーチャも知っている。いい退屈凌ぎになりそうだわと、心の中で笑った。

「カーチャ様、校庭へお連れ致します。行きましょう」

カーチャの前に現れたのは、男子生徒と女子生徒が数名。腕を後ろに組み、頭に『カーチャ様☆ＬＯＶＥ』と書かれた鉢巻きを巻いている。

カーチャのファンが増え、ついには親衛隊まで結成されていた。カーチャにとっては迷惑な話だが、今後役に立ちそうなので好きにや

らせておく事にしている。

「ごめんなさい。カーチャ、呼ばれてるみたいだから行かなくちゃ」

カーチャはもう一度だけまゆっち達に一礼し、

『до свидания（またね）』

ロシア語で言う、「またね」と言って、親衛隊と一緒に教室を出て行った。

「うう……言いそびれてしまいました」

せっかく勇気を出したのに……まゆっちはガックリと肩を落とす。

『うわー……今のはさすがに切ねーよ、まゆっち』

同情する松風。

「だ、大丈夫だよまゆっち。まだチャンスはあるから」

元気を出して、とまゆっちの肩を叩く伊予。しかし、まゆっちのショックは大きかった。

「ほら、私達も決闘を見に行こうよ。何か面白そうだよ！」

まゆっちの手を引っ張る伊予。落ち込んでいても仕方ない…まゆっちは気持ちを切り替える。

（そうですよ……ここで諦めてはダメ。よし、頑張れ私！）

決闘が終わったら、もう一度カーチャに声をかけよう。その決意を胸に、まゆっちは伊予と共に教室を出て行くのだった。

## サブエピソード4「女王（エンプレス）の来校」（後書き）

ついにカーチャ様のご登場です。小説の更新についてですが、仕事が始まってなかなか更新できないかもしれません。ですが、完結まで書きたいと思っていますので、見てくださっている方、応援よろしくお願いします！

## 3話　対決（前書き）

前回のお話でカーチャ様登場！と書きましたが、話が長くなりましたのでパートを分けて書きました。カーチャ様の登場は次になります。申し訳ないです；；；；；

# 3話　対決

ついに、サーシャと心の決闘の時間がやってきた。

学園の校庭には大勢の生徒達や教師が集まり、決闘の始まりを待っている。

その中には、ここぞとばかりに弁当を売って稼ごうとする者や賭けをする者、カメラで撮影をする者等、様々な人達でごった返している。

校庭はもはやイベント会場と化していた。

その大勢のギャラリーの中心に、対戦者――サーシャと心がいる。

「逃げなかった事だけは褒めてやるのじゃ、アレクサンドル」

まるで自分の勝利を確信しているように、心は余裕の笑みを見せていた。一方のサーシャは無言のまま、心を睨み付けている。

もうすぐ、二人の試合が始まろうとしていた。そんなサーシャの行く末を、心配そうに見守るまふゆと華。

「……とうとう始まっちゃったわね」

まふゆはサーシャの姿を眺めながら呟いた。

「そういや同じクラスの直江から聞いたんだけどよ。あの不死川心って奴、全国レベルの柔道の使い手なんだってよ。クェイサーの力を使わないっていっても、結構ヤバいんじゃないのか？」

華は念の為、クラスの人間から情報収集をしていた。

不死川心――決闘を申し込むだけあって、戦闘スキルは高い。

「い、一応、私の聖乳（ソーマ）を吸ってあるし……っていうか、勝たなかったら許さないんだから」

顔を真っ赤にしながら、胸を隠す仕草をするまふゆ。

決闘前、まふゆとサーシャの間でこんなやり取りをしていた。

――誰もいない、２－Ｆの教室。

決闘まで後数分。サーシャはまふゆを呼び出した。

『まふゆ。念の為だ、お前の聖乳（ソーマ）を吸わせてくれ』

『え……こ、ここで！？』

『お前が必要だ』

『う……わ、分かったわよ。その代わり、やるからには絶対に勝ちなさいよね』

そう言ってまふゆはワイシャツとベストをたくし上げ、ブラジャーを外す。

『да（当然だ）』

そしてサーシャはまふゆの胸にゆっくりと口を近づけて……。

『んっ……！？あっ、うっ……！！』

――――――――――――。

サーシャの聖乳は既に補給済みだった。恥ずかしそうに話すまふゆを見て、華は思わず苦笑いした。

しばらくして、周囲にいた生徒達がざわめき始める。いよいよ決闘開始だ。

現れたのは威厳のある老人……川神学園学長の川神鉄心である。鉄心はサーシャと心の間に歩み寄った。

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行う！」

鉄心の声が校庭中に響き渡り、校庭中から一気に歓声が上がる。

「と、その前にじゃ……アレクサンドリャ…ニコビチョ、言いにくい名前じゃのう」

サーシャの名前が言いにくいのか、髭を弄りながら苦笑いする鉄心。

「サーシャで構わん」

先に進まないので、サーシャは鉄心にそう促した。

「ふむ、そうか。ではサーシャよ、先程は挨拶が出来なくてすまんかったの。ワシは川神学園の学長を務める、川神鉄心じゃ」

鉄心は自己紹介を簡潔に終わらせると、“また後程ゆっくりと話そう”と意味深な言葉を口にする。

鉄心は、サーシャ達の滞在先である川神院のトップであり、今回の任務の一件を知る重要中心人物だった。

「では、二人とも前へ出て、名乗りを上げるが良い！」

鉄心の掛け声と共に、サーシャと心が一歩前に出る。

「２－Ｆ、アレクサンドル＝ニコラエビッチ＝ヘル」

「２－Ｓ組、不死川心！」

心も名乗りを上げ、サーシャと対峙する。

「ワシが立ち会いのもと、決闘を許可する」

基本的な判定は、勝負がつくまでは何があっても止めない。ただし、勝負がついたにも関わらず攻撃を行えば、ワシが介入して戦闘を止めると鉄心が付け加えた。

「問題ない」

「心得たのじゃ」

サーシャと心は同意し、戦闘態勢に入る。

（……さて。アトスの秘蔵“致命者サーシャ”とやらがどれほどのものか、見せてもらうぞい）

鉄心はサーシャの戦いぶりを期待していた。派遣されたクェイサーがどれ程のものか、それを知る良い機会である。

「いざ尋常に、はじめいっ！！！」

鉄心の合図と同時に、サーシャＶＳ心の決闘の火蓋が切って落とされた。

「いくぞっ！！」

「すぐ楽にしてやるのじゃ！」

互いに衝突し、体術のぶつかり合いが始まる。

近接戦闘は、心の必殺の間合い。心はサーシャの手を絡め取ろうと手を伸ばした。が、サーシャはそれを払い落し、蹴りで反撃する。

「ふん。当たらぬわ！」

ひらりと身を躱す心。二人とも隙を一切見せず、激しい攻防を続けている。

「すっげぇ……アレクサンドルの奴、あんな強かったのかよ」

観戦していた岳人が思わず声を漏らす。

岳人だけではない……観戦している人間の殆どが、ハイレベルな戦いを前に度肝を抜かれていた。

（一筋縄ではいかないか）

サーシャは反撃と防御を続けながら、心の力量を測っていた。

近接戦闘においては、サーシャも退けを取らない。だがそれ故、心に対して迂闊な真似はできなかった。関節技を一度でも食らえば、こちらが不利になる。

（だが――――それなら！！！）

サーシャは動きを変え、防御を捨てて攻撃に徹した。殴り、蹴りを雨のように浴びせ、怒涛の攻撃で心を攻め立てる。

「うっとおしいのじゃ！そらっ！！」

「――――――！！」

心はサーシャの腕を掴み、勢いよく背負い投げた。視界が反転し、空へと高く投げ飛ばされる。

しかしサーシャは空中で体制を整え、受け身を取ることなく着地に成功した。

「――畳みかけてやるのじゃ！」

心の反撃は止まない。急接近して、サーシャに再び攻撃を仕掛ける。

「――――舐めるな！！」

サーシャは地面を強く蹴り上げた。周囲に砂埃を発生させると同時に、蹴り上げた砂が心の視界に舞い込む。

「ふん、甘いわ！」

心は視界に飛んできた砂を、扇で全て叩き落した。

心の切り札――鉄扇。飛び道具や武器から身を守るための手段で、

常に携帯していた。つまり、心に真正面からの小細工は通用しないという事になる。

「ほっほっほ。此方にそのような小細工など通用せんのじゃ」

心は口元を扇子で隠しながら、サーシャを嘲笑った。

（あの扇……鉄か）

だが、それはサーシャにとって勝機だった。鉄の元素を自在に操るサーシャなら、あの鉄扇を利用しない手はない。

しかし、クェイサーの力は使わないと決めている。とはいえ、大鎌等の大きな武器を練成するわけではない。短剣程度の練成なら、許容範囲だ。

こんな所でクェイサーの力に頼る事になるとは……心を甘く見ていた自分を呪う。だが、サーシャは負けるつもりはない。

もう一度だけサーシャは地面を蹴り上げ、砂を心の視界に向けて飛ばした。

「何度やっても無駄無駄無駄なのじゃ」

同じように、鉄扇を広げて砂を叩き落す心。サーシャはその隙を狙い、鉄扇に手を伸ばした。だが、サーシャの動きに気付いた心は一歩退いて距離を取る。

「なるほどのぅ。此方の扇子を奪うという寸法か。所詮は猿の浅知恵じゃ――――――な!?」

そして心は気付いた。自分の持つ鉄扇の大きな異変に。

心の鉄扇は見事にひしゃげ、一部がごっそりと抉り取られていた。心は何が起きたのか理解が出来ず、冷静さを失っている。

「こ、こここここ此方の扇子が!?な、何がどうなっておるのじゃ!?」

その瞬間が、心の最大の隙だった。サーシャは心の背後に回り込み、腕を捻り上げて身動きを封じる。そして――――、

「――――――まだ続けるか?」

心の首元には、鋭利な刃を持った短剣が突き付けられていた。心の鉄扇の一部を奪って、サーシャが練成した物だ。

「ひいいいいいいいいいいいいいいい！？」

命の危険を感じ、心の血の気が一気に引いていく。心は恐怖で力が抜け落ち、地面に崩れ落ちた。

「そこまで！」

心が戦意を喪失したものと判断し、鉄心は右手を上げて、

「勝者、サーシャ！！」

サーシャの勝利を、高らかに宣言するのだった。

## 4話　一日の終わり、非日常の始まり（前書き）

ついにカーチャ様の登場です！気が付いたら、こんなにたくさんのポイントを頂いていました。読者の皆様、ありがとうございます！

# 4話　一日の終わり、非日常の始まり

激しい戦いの末、心に勝利したサーシャ。

「すっげぇ、不死川心に勝ったぞ！」

「アレクサンドル君、超カッコイ～！！」

「ざまあみろ不死川！」

校庭にいる生徒達から歓声が上がる。生徒達の声は、サーシャ一色だった。体術は互角だったが、サーシャは傷一つ負っておらず、尚且つ心に身体的なダメージすら与えていない。

総合評価的に言えば、サーシャの圧勝だった。

「うぅ……何なのじゃ。一体何がどうなっておるのじゃ……」

心は未だに状況が飲み込めていなかった。地面に座り込み、泣きべそをかきながら無残に変形した鉄扇を見つめている。

「……」

勝者となったサーシャは無言のまま心に近づき、心の目を覗き込むようにしながらしゃがみ込んだ。

「ひっ……」

びくっと身体を震わせて、怯え切った表情でサーシャを見る心。

「……」

サーシャは表情一つ変えないまま心をじっと凝視する。そして、次の瞬間――――。

……。

右手を心の左胸に手を伸ばし、触れた。

――――――。

校庭中――否、全ての時間が一瞬だけピタリと止まったような気が

した。先程まで騒いでいた生徒達も急にしん、と静まり返っている。

「……あ」

心は自分の胸に置かれているサーシャの右手に視線を下ろす。

「……」

数秒間沈黙が続く。そして心は今の状況を理解し、ようやく我に返った。

「にょわあああああああああああああああああああああああああっ！？」

胸を触られ、顔を真っ赤にしながらサーシャから後退りする。同時に、校庭中の生徒や教師達が騒ぎ始めた。特に男子生徒達が性的な意味で騒ぎ立てている。

「……」

サーシャは心の胸に触れた自分の右手を数秒間見た後、怯えている心を見下ろし、興味が失せたと言わんばかりの表情で、

『В вашей груди, сердце мое неп околебимое（お前の胸では、俺の心は震えない）』

ロシア語で心に吐き捨てた。心は言われた意味がよく分からず、近くにいた冬馬に翻訳を頼む。

「……葵君、アレクサンドルは何と言ったのじゃ？」

しかし、冬馬は言いにくそうにしながら苦笑いを浮かべていた。あまり聞かない方がいいですよと忠告するが、それでも心は知りたいと言って頷いた。

「“貴方の胸では、私の心は震えない”、だそうです」

サーシャのロシア語を、丁寧に訳して伝える冬馬。心にはイマイチ意味が分からなかったが、とりあえず分かった事は明らかに貶されているという事だけだった。

「もう色々と悔しいのじゃ！うわ～～～～～ん！！」

負けた挙句に侮辱を受け、それに耐え切れなくなった心はとうとう

泣き出してしまった。

すると、まふゆと華がギャラリーを掻き分け、怒りを露わにしながらサーシャの前にやってきた。

「一体何考えてんのよ、アンタはっ！！！！」

まふゆは竹刀で、サーシャの頭を力一杯ぶっ叩いた。

「ここはミハイロフとは違うのよ！無闇に女の子のおっぱいを触らないの！っていうか、普通は私達の学園だろうと何だろうと基本的にアウトだから！！」

「吸ったわけじゃないから問題はない」

竹刀で叩かれた頭部を擦りながら、反省する様子もなくただ本心を述べるサーシャ。

「そういう問題じゃねぇだろ！ただでさえ目立ってるのに、これ以上問題起こすなよ！バカかよお前は！？」

流石の華もこれには激怒した。サーシャは後先考えずに直情的に行

動する時がある事は知っていたが、今回のは取り返しがつかない。

「こりゃ！何と言う不埒な真似をするでおじゃる！」

まふゆ、華に続いて後からやってきたのは、顔の白い、まるで平安時代にでもいるような人相の教師―綾小路麻呂だった。

ちなみに麻呂に対してのまふゆと華の第一印象は、“うわ、何コイツ気持ち悪”である事は言うまでもない。

麻呂の言う事に対し、サーシャは反論する。

「勝ったのは俺だ。その俺が何をしようがお前には関係ない」

「だまりゃ！これは由々しき問題でおじゃる！アレクサンドルとやら、お前には処分を――」

「まあまあ綾小路先生、その辺にしておきなさい」

鉄心がこの場を納めようと、サーシャと麻呂の間に入って割り込んできた。しかし麻呂は納得がいかず、鉄心に抗議を求める。

「し、しかし学長……」

「いわゆる“かるちゃーしょっく”と言うやつじゃ。兎に角、この件はワシが一旦預かろう。後でサーシャにはキツク言っておくわい」

鉄心はそう言って、一先ずこの騒ぎを納めたのだった。これ以上揉めると家柄的にも厄介なので、学長がそう言うならと麻呂も身を引くことにした。

こうして決闘は終わり、生徒や教師達がそれぞれの教室へ戻っていく。決闘が終わってもサーシャの話題が消える事はなかった。

自分達の教室にはとてもではないが戻れない……そう思うまふゆと華だった。

そんな中、ガックリと肩を落とし、教室へと戻っていく心の後ろ姿を、カーチャは興味深そうに眺めていた。

（……決めたわ）

カーチャの口元が吊り上がる。まるで獲物を狩るような、狡猾で扇情的な瞳。くすくすと静かに笑いながら、カーチャは校庭を去って

いくのだった。

重い足取りで、教室へと戻るまふゆと華。サーシャは特に気にする様子もなく廊下を歩き、二人の先頭をきって２－Ｆへと向かう。

廊下からは、別のクラスの生徒達の視線を感じる。サーシャはある意味で有名人になった。今日から“おっぱいソムリエ”等と変な仇名を付けられても可笑しくはない。

（……ああ、入りずらいなぁ）

とうとう２－Ｆの教室に辿り着く。まふゆは大きく溜息をついた。

きっとドアを開けば、サーシャは女子生徒達の敵になっているだろう。どうフォローすればいいかまふゆと華は悩んでいたが、もうフォローのしようがないことは明らかだった。

そんな二人の気持ちを余所に、堂々と教室のドアを開けるサーシャ。教室のクラスメイト達が、一斉に視線をサーシャに向けた。そして、

「アレクサンドル、いやサーシャ！お前は最強だ、神と呼ばせてく

れ！」

「なあなあサーシャ、どうやったらあんな風に堂々と掴めるんだ！？」

「頼む、俺にもその技を教えてくれよ！」

「不死川の胸、どんな感触だった！？」

男子生徒達の殆どがサーシャに集まってきた。サーシャの勝利よりも、公然の場で堂々と女性の胸を掴んだ英雄として崇められていた。

サーシャは返答に困り、群がる男子生徒を掻き分けてその場から脱出する。しかし、今度はサーシャの戦いぶりを見て目を輝かせているワン子とクリスが待ち構えていた。

「見たわよ！サーシャってめちゃくちゃ強かったのね！今度はあたしと勝負しなさい！」

「サーシャ。お前の強さ、しかと見せてもらったぞ。が、しかしだ。さっきの行為だけは頂けないな。今後は自粛しろ」

ワンコはサーシャに勝負をふっかけ、クリスはサーシャの戦闘能力を賞賛しつつ辛口のコメントをするのだった。

（面倒な事になった……）

自分がした行いを今になって後悔するサーシャ。だがまふゆや華に助けを求めた所で、“自業自得よ”と言ってあしらわれるのは目に見えている。

「あ、あの……アレクサンドル君。ううん、サーシャ君」

そんなサーシャを見ていた千花が話しかけてくる。決闘での出来事があったのか、少し態度が控えめだった。

この状況はまずいと思ったまふゆと華は、サーシャの前に出て千花に弁解を始める。

「あ、あのね千花ちゃん！あ、あれはなんていうかね……その、悪気があったわけじゃないの！」

「そ、そうなんだよ！こいつの癖って言うかさ……だから――――」

「――よかったら、アタシのも触ってみる？」

千花から返ってきた言葉は批判でもなければ敵意でもなく、ただ純粋な好奇心だった。意外過ぎる返答を前に、まふゆと華、サーシャまでもが絶句していた。

「え、マジで！？スイーツの胸揉んでもいいのか！？」

千花の言葉を聞いて真っ先に反応したヨンパチが、興奮して息を荒げながら前に出てくる。

「誰がアンタみたいなエロザルに触れって言ったのよ！？アタシはサーシャ君に言ったの！」

ヨンパチを追い払い、千花は再びサーシャを見る。

「サーシャ君、アイツの胸を触った時……何て言うか、不思議と嫌らしさを感じなかったのよね。純粋っていうか」

だったら触ってもらうのもいいかな、と千花は顔を赤らめて、自分の胸をサーシャに近づけた。

「た、だだだだだだだだダメよサーシャ！い、い、いいくら相手がいいって言っても、ダメなものはダメなんだからね！！」

顔を真っ赤にしながらサーシャに注意するまふゆ。恥ずかしさからなのか、それともヤキモチなのか。気持ちが焦り、まふゆの頭の中はもうごちゃごちゃだった。

そんなまふゆの様子を見て、千花はくすっと笑う。

「な～んてね、冗談冗談。まふゆっちも本気にしないの、こんなに顔真っ赤にしちゃって」

林檎のように赤く染まったまふゆの頬を、指先で突いてからかう千花。まふゆは「もう！」と、頬を膨らませた。

ともあれ、少なくとも千花達はサーシャの事を悪く思ってはいないようだった。それどころか、むしろサーシャを愛称で呼ぶ程親しみを持つようになっている。

これはこれで良かったのだろうと、まふゆはとりあえず安堵したのだった。

こうして、波乱の学園生活一日目は終わった。しかし、こうしてい

る間にも正体不明の元素回路は、なおもどこかで出回り続けている。それを根絶しなければ、川神市に明日はないだろう。

守るべき人達が、ここにいる。だからこそ戦わなければならない。

この川神学園の生徒達――否。川神市の人々から、平和を取り戻すために。

放課後の事。

心は壊れた鉄扇を強く握り締めて、苛立ちながら廊下を歩いていた。

サーシャに敗北した挙句、その上胸まで触られ、終いにはサーシャにはお咎めなし。当然納得のいかない心は抗議を試みたが、学長権限により一時保留となった。

サーシャが留学生とはいえ、女性の胸を触る文化など聞いた事がない。

「悔しいのじゃ、悔しいのじゃ、悔しいのじゃ……」

負けたおかげで２－Ｆの生徒からは馬鹿にされ、サーシャに“震えない胸”（要するにがっかりおっぱい）という屈辱的な烙印を押され、プライドをズタズタにされた心は悔しさと怒りで満ちていた。

今度は絶対にリベンジしてやる……そんな事を考えながら歩いていると、

「にょわ！？」

「きゃっ！？」

廊下の曲がり角で、誰かと鉢合わせする。勢いよくぶつかり、心は豪快に尻餅をついた。

「いたた……どこを見ておるのじゃ！？」

ただでさえ苛立っているというのに、一体どこの無礼者だ……半分八つ当たりも含めて、心は怒鳴った。

「ご、ごめんなさい……」

ぶつかってきた相手はカーチャだった。カーチャも尻餅をついたのか、お尻を擦りながら、涙目かつ上目遣いで心を見上げていた。

（か、かかかかかかかかかかかわゆいのじゃ……）

無垢な瞳で、まるで妖精のような可愛さに心は心を奪われた。立ち上がり、倒れているカーチャに手を貸す心。

「ま、まあ分かれば良いのじゃ……ところでお前、見かけない顔じゃのう」

「はい。私、聖ミハイロフ学園から転入してきました、１－Ｃ所属のエカテリーナ＝クラエといいます。“カーチャ”って、呼んで下さい。お姉さま」

カーチャはスカートを広げ、礼儀正しく心に一礼する。礼儀作法も美しく、由緒正しい家に生まれたのだろうと心は理解した。

「此方は２－Ｓの不死川心。由緒ある不死川家の息女じゃ。覚えておくが良いぞ」

「はい、心お姉さま♪」

元気良く返事をして、心を敬うカーチャ。そんな素直で可愛いカーチャを、心はますます気に入ったのだった。

「あ、あの、心お姉さま。カーチャ、この学園の事がよく分からなくて……だから、心お姉さまに案内して欲しいの。ダメかな？」

上目遣いで、カーチャは心に眼差しを送る。

「良いぞ。カーチャがそこまで言うのであれば、此方が案内してやろう」

すぐに帰るつもりでいたが、カーチャに会ってすっかり機嫌を良くした心は、快く承諾した。

「本当？ありがとう、心お姉さま！」

カーチャは飛びきりの笑顔を浮かべて、心に抱き付いた。心の顔が慈愛に満ちていく。

心は早速カーチャの手を引き、学園を案内するのだった。

――しばらく心とカーチャは学園中を一通り回った。放課後の学園内はあまり生徒がいない分、心は気が楽だった。

「～♪」

可愛らしくくるくる回りながら廊下を楽しそうに歩き、無邪気にはしゃいでいるカーチャ。そのカーチャの姿を見て、心は和んでいた。

「……？ここは何の教室かしら」

廊下の片隅にある教室がカーチャの目に入る。カーチャは扉を開け、中へと入っていく。

「カーチャ。そこは物置じゃ。入っても何もないぞ？」

好奇心が旺盛な年頃なのだろう。心はやれやれと肩を落としながらも、表情は笑っている。まるで自分に妹が出来たみたいで、嬉しく思っていた。

カーチャの後を追い、物置部屋に足を踏み入れる心。中は薄暗く、少し不気味だった。

カーチャの姿はまだ見えない。きっと隠れて自分を脅かそうとしているのだな、と心は思った。

が、その直後。

――――――ピシャッ！！

突然、物置部屋の扉が勢いよく閉まった。変に思った心は扉に手をかける。

「あ、開かないのじゃ……」

力強く扉を引くが、固く閉ざされたままでビクともしなかった。

薄暗く気味の悪い物置部屋に閉じ込められ、心に不安が生まれ始める。早くカーチャを見つけて何とかこの部屋を出よう、そう思った時だった。

ギィ……。

心の背後から物音が聞こえる。カーチャだろうか、それとも……心は恐る恐る背後を振り返る。

「――――――――――」

暗闇の奥で光る、二つの不気味な目。それは徐々に近づき、心の前に姿を現した。

「ひっ」

小さく悲鳴を上げる心。現れたのは赤一色に染められた大きな人形だった。

――――断罪天使、アナスタシア。

アナスタシアが心を見下ろすようにして立ち塞がっていた。

「ひいいいいいいいぃぃぃぃぃいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!!?」

見たこともない化け物のようなアナスタシアの姿を前に、腰を抜かして後退りする心。しかし扉は閉ざされたままで、心に逃げ場はな

い。

アナタスタシアは沈黙したまま、心との距離をゆっくりと縮めていく。

『――――――меДь（銅よ）』

「にょわ～～～～～～～～～～～～～～～！？」

一瞬、暗闇の奥から声が聞こえた。その声に反応するように、アナスタシアは両手を上げ、無数の銅線を心に向けて放つ。

無数の銅線は心の身体に絡み付き、心を引っ張り上げて逆さ吊りにする。

「うわ～～～～ん！　誰か、助けて……助けるのじゃ～～！！」

銅線は心の身体の自由を奪い、身動き一つできない。心の思考が恐怖に染まっていく。

すると、暗闇の奥――声のした方向から人影が心に歩み寄ってくる。

それはカーチャだった。カーチャ妖精のような笑顔とは打って変わり、鋭い目付きと、そしてサディスティックな表情を浮かべている。

心が放課後に出会ったカーチャとは、まるで別人だった。

「――――光栄に思いなさい。今日から私が、お前の主人になってあげる」

自ら主人を名乗り、心をまるで奴隷呼ばわりにするカーチャ。

「な、何をわけの分からぬ事を……そんな事より、さっさと降ろすのじゃ！！」

自由の利かない身体を揺さぶり、カーチャを睨み付けて抗議する心。しかし、返ってきたのはアナスタシアの銅線による痛烈な拷問だった。銅線をまるで鞭のように、心の身体に叩き付ける。

「い、痛い、痛い！痛いのじゃ！？」

「それが主人に対する口の聞き方かしら？“どうか降ろしてください、女王様”でしょ？」

まあ、降ろすつもりは無いけどねと付け加え、カーチャは嘲笑う。

「こ、こんな事をして、ただで済むと思うでないぞ！此方は由緒ある不死川家――」

「お前がどんな身分だろうと、私の前ではただの雌犬よ」

動揺する様子もなく、カーチャはたった一言で一蹴する。サーシャと同じく、カーチャには家柄や名声は全く通用しなかった。

名門である不死川家――自分の誇りが、一瞬にして崩されてしまった。

「まだ立場と言うものが理解できていないようね。主人に逆らったどうなるか……じっくりとその身体に刻み込んであげるわ」

氷のように冷たい笑みを浮かべながら、カーチャは逆さ吊りにされた心の頬を撫でるように触る。

「ふふ……覚悟なさい」

そして心の耳元で、優しく、まるで誘惑するように囁いた。

あの無垢で可愛かったカーチャは幻だったのだろうか。今ここにいるカーチャが本物なら、今日という日を迎えた事を心は心底呪った。

悪夢ならすぐにでも覚めて欲しいと切に願いたい。が、この鞭打ちのような痛みは、紛れもない現実だと言う事を認識させる。

心の地獄のような放課後は、カーチャと言う女王の欲望が満たされるまで続くのであった。

## 4話　一日の終わり、非日常の始まり（後書き）

心が叫んでばっかりですね（笑）
これでカーチャ様の奴隷は心になりました。
続いてのお話はクェイサーファンなら知っているあの人が登場します！
地獄のち……ごほん。
書きあげるまでに時間がかかりますが、どうぞ応援宜しくお願い致します。

Ｂｙ　マイシャッフルのクェイサー

## サブエピソード5「川神院にて」

★川神院にて★

関東三山の一つ――それが川神院。

厄除けの寺院として名高い有名な寺であり、サーシャ達の滞在場所である。

また鍛錬場所としても使われているため、住み込みで訓練をしている修行僧も多い。

初日目の学園生活を終えて、川神院を訪れたサーシャ、まふゆ、華は鉄心に挨拶をする。

「よく来てくれたのう。では、改めて挨拶をするぞい。ワシがこの川神院の代表を務める、川神鉄心じゃ」

「ワタシはここの師範代を努める、ルー・イーです。ようこそ、川神院へ」

鉄心の隣にいるのは、ルー・イー。川神院の師範代である。

サーシャ達は川神院の修行僧に部屋まで案内され、荷物を置いて再び鉄心のいる部屋へと赴いた。

「――――あれ？サーシャにまふゆ、それに華も！？」

廊下を歩いている途中で、ワン子と遭遇した。ワン子は養子で、川神院で引き取られてここで暮らしている。

どうしてここにいるのか疑問に思っているワン子に、まふゆが理由を説明する。

「私たち、しばらくの間ここでお世話になることになったの。よろしくね、一子ちゃん」

「そうなんだ。うん、よろしく！……じゃあじーちゃんの言ってた大切なお客さんって、サーシャたちのことだったのね」

ワン子は嬉しそうに、サーシャ達をマジマジと見る。鉄心から話は聞いていたようだが、深い事情までは知らないだろう。

また鬱陶しい奴が来たと、サーシャは目を逸らした。

「そう言う事なら、いつでも勝負ができるわね！あ、ちなみにあたしのことは“ワン子”でいいわ」

明るく、エネルギッシュなワン子の姿。一緒にいるだけで元気を与えてくれるような存在。

こういう人間は嫌いではない。サーシャはワン子に視線を戻した。

「生半可な覚悟で俺に勝てると思うなよ、ワン子」

「望むところだわ、負けないわよサーシャ！」

サーシャとワン子はライバル視し、火花を散らす。お互いに認め合い、そんな二人を見てまふゆと華は笑う。微笑ましい光景だった。

「……あ、あたしそろそろ行かなくちゃ！」

ワン子はこの後、日課である走り込みのトレーニングに行くらしい。サーシャ達にまたねと手を振って、廊下を駆けていった。

「一子ちゃんって、努力家だね」

ワン子の後ろ姿を見送るまふゆ。ワン子の直向きな姿勢を、今の自分自身と重ねていた。

「――――ああ、私の自慢の妹だからな」

突然、三人の背後から声をかけられる。まふゆと華はびくっと身体を震わせ、振り返るとそこには百代の姿があった。いつからいたのだろう、全く気配を感じなかった。

「あ、えっと……あなたは？」

「川神百代だ。３－Ｆに所属している」

百代はまふゆたちより一つ上の先輩――上級生だった。まふゆ達も会釈して自己紹介をする。

「織部まふゆです。よろしくお願いします、百代先輩」

「桂木華です。どうも……」

「モモ先輩でいい。まふゆに、華か……二人とも可愛いな。どうだ、今夜私の部屋に来ないか？私とイイ事をしよう」

ニヤッと笑いながら、まふゆと華の肩を抱き寄せる百代。冗談で（？）言っているつもりだろうが、それでも何とも言えない複雑な気持ちになる二人である。

（うわ、おっきい胸……）

百代の大きな胸に目がいく。豊満かつ、名前の如く桃のような胸に、思わず見惚れてしまうまふゆ。親友の山辺燈といい勝負かもしれない。

「……」

当然、サーシャも百代の胸に興味を抱いていた。

確かめたい……心の時と同じように、百代の胸に手を伸ばすサーシャ。

が、

「――――おっと」

さっきまでまふゆと華の後ろにいた百代が突然姿を消したと思いきや、サーシャの背後に回り込んで腕を掴んでいた。

「そう簡単には触らせないぞ？サーシャ」

まるでずっとそこにいたかのように、百代は平然とサーシャの背後にいる。

（迅い……！いつの間に！？）

サーシャは見えないどころか、気づくことすらできなかった。勿論、驚いていたのはサーシャだけではない。まふゆと華も一瞬の出来事に唖然とする。

「お前の戦い、全部見せてもらった。今度は私と勝負しろ」

サーシャの戦いを見て、闘争本能を刺激された百代はサーシャに興味を持っていた。

ただ純粋に強者を求めるという百代の闘気が、サーシャの身体を駆け巡る。

（こいつ……強い！）

サーシャは感じ取っていた。百代の異常なまでの強さを。その強さは、今まで戦ってきたアデプトの使徒とは比較にならない程だ。

クェイサーでもなければ軍人でもない、ただの女子生徒である。サーシャは戦慄した。

「……道理で来るのが遅いと思っとったら、モモ。お前が引き止めておったんじゃな？」

サーシャ達がいつまで経っても来ないので、心配した鉄心が迎えにやってきた。

「じじい、私を今すぐサーシャと戦わせてくれ」

「ならん。これからサーシャ達と話があるんでの、お前は部屋に戻っていなさい」

百代は不満そうに顔を顰めるが、しばらく悩んだ末、分かったよと素っ気ない返事をして、サーシャの腕から手を離した。

しかしその強者に飢えた瞳は、諦めてはいない。百代とはどんな形であれ、戦う事になるだろうとサーシャは理解する。

「まあ、いいさ。だが、いずれは私と戦ってもらう」

「構わん。俺は負けるつもりはない」

「いい返事だ。お前と死合う日が待ち遠しいぞ、サーシャ」

満足そうに笑いながら、百代はサーシャ達の前から去っていく。そんな百代の様子を見て、鉄心は重い溜息をついた。

「全く、仕方のないやつじゃのう……」

百代の戦いに対する執着心は、鉄心の悩みの種であった。戦っていないと生きている気がしないとまで言う始末。何か大きな趣味でも持っていれば……と、つくづく思う。

「あ、あの……あの人は一体？」

百代の事が気になった華が鉄心に尋ねた。

「ん？ああ、あれはワシの孫じゃ。まあ、ああいう奴じゃが、仲良くしてやってくれ」

そう言って、鉄心は苦笑いする。

「……さて。ここで長話もなんじゃから、そろそろワシの部屋に行こうかの」

鉄心が部屋へ来るように促す。これから、任務についての詳しい話を聞かなければならない。サーシャ達は鉄心と共に歩きだした。

（川神、百代……）

サーシャは百代が去っていった廊下を振り返る。

百代の戦闘能力は計り知れない。少なくとも、本気で戦わなければ勝てない相手である事は確かだ。

武神――川神百代。その圧倒的なまでの存在感は、サーシャの心を“震わせて”いた。

## サブエピソード5「川神院にて」（後書き）

以上、サブエピソードでした。ちなみにサーシャは百代に恋心を抱いているわけではないです＞＜

## サブエピソード6「百代の好奇心」

★百代の好奇心★

満月が夜空に上り、月明かりが川神院の道場を照らしている。

百代は一人佇み、目を閉じて精神を研ぎ澄ませていた。

勿論、百代が好きでやっているわけではなく、心の修行という一環で鉄心から強要されていた。

（サーシャ……ああ、早く戦ってみたい）

しかし、修行の成果は出ない。むしろサーシャが現れた事により、より一層心が荒ぶり始めていた。

ここ最近、サーシャのような強者に出会った事があっただろうか。

百代に挑戦する者は数秒持たず敗れ去り、満たされない日々が続いていた。

それ故に、サーシャはある意味で“救い”なのかもしれない。

百代にあるこの飢えと渇きを、満たしてくれるかもしれないのだから。

「――――――いい月夜ですね、百代さん」

背後から声をかけられ、意識を引き戻された百代は後ろを振り返る。

そこに立っていたのはユーリだった。

「……あなたは？」

百代は不信感を抱く。黒い服に身を包み、右目には眼帯。明らかに怪しかった。

そんな百代の不信感を察し、ユーリは答える。

「決して怪しい者ではありませんよ。私は極東正教会、第四管区巡回司祭・聖ミハイロフ学園付設聖堂責任者、ユーリ＝野田です。お話は鉄心さんから聞いていますよ」

無駄に長い自己紹介が、百代の耳から耳へとすり抜けていく。とりあえず分かった事は神父であるという事だけだ。

それともう一つ。聖ミハイロフ学園の聖堂と言う事は、サーシャ達の関係者だろう。

「聖ミハイロフ……確か、サーシャ達もそこの生徒でしたね。お知り合いですか？」

「ええ。まあ、保護者みたいなものです」

ユーリは笑みを浮かべ、夜空を見上げた。本当に良い月ですね、と満月を眺めている。

保護者……容姿的な意味合いで説得力がないが、世の中には色々な人間がいるという事で、百代はこれ以上の詮索をやめた。

（それにしても、全く気配を感じなかった。この人は一体……）

一体、何時からいたのだろう。百代が道場にいた時は誰の気配もなく、一人だった。

しかし、ユーリは百代の背後にいた。いくら精神を統一していたとはいえ、人の気配くらいは察知できる。仮に気配を消したとしても、百代なら微弱な気すら察知できるはずだ。

なのに、ユーリからは一切の気を感じない。あり得ない。

まるで、初めから“そこ”にいないような、虚無の存在のように。

「……おや？」

百代が険しい表情でユーリを見ていたので、気になったユーリが視線を向ける。

「どうなさいました？私の顔に、何かついていますか？」

「あ、いえ。別に……」

百代は慌てて目を逸らした。しかし、ユーリはそのまま問いかけを続ける。

まるで、百代の抱いている疑問を見透かすかのように、答えた。

「それとも……私の気配を感じなかった事が、そんなにも不思議ですか？」

「……っ！？」

背筋が、ぞわりとした。

ユーリの問いに、百代は本能的に身構えていた。警戒をさせてしまったか、と思ったユーリは透かさずフォローを入れる。

「いやあ、どうも私は存在感が薄いようでしてね……周りからもよく言われるんですよ」

言って、百代に苦笑いで返すユーリ。あまりの余所余所しい態度に、百代は身構えていた自分が馬鹿馬鹿しくなり、警戒を解いた。

「……ユーリさん、ちょっとお尋ねしたいのですが」

百代は思った。聖ミハイロフの関係者なら、サーシャの事を知っているかもしれない。

「構いませんよ。できる範囲でお答えします」

ユーリは快く承諾した。百代は早速答える。

「サーシャは、一体何者なんですか？」

――――――――――。

ほんの一瞬、沈黙が走った。だが、ユーリは表情を変えることなく受け答える。

「彼はロシアからの留学生で、飛び級で進学してきた優秀な生徒だと聞いています。それ以外は何も」

「本当にそれだけですか？」

「ええ。私は聖堂を管理しているだけですので、学園内の事はあまり詳しくないのです」

あくまで管理者であると、ユーリは答えた。

どことなくだが、白々しさを感じた百代は、更に追求を図る。

「川神学園のシステムはご存知ですか？」

「確か、生徒の間で揉め事があると、決闘して白黒をつける……そう聞いています」

ユーリの表情は未だ変わらない。百代はついに、今日起きた決闘での出来事を切り出した。

「今日、昼休みに決闘がありましてね。戦ったのはうちの生徒と……サーシャです」

「――――――」

ユーリの表情がほんの僅かに崩れたのを、百代は見逃さなかった。やはり、ユーリは何かを隠している。

「サーシャの並外れた戦闘力。見た所、ただの留学生とは思えません」

百代はサーシャと心が決闘した様子をユーリに説明する。

滑らかな動き、体術。そして、心の鉄扇を破壊したあの異能の能力。観戦していた生徒達の殆どは、手品か何か、もしくは誰も気にしてはいなかっただろう。

だが、百代だけは違った。あれは“普通”の人間が成せる技ではない。そしてユーリもその例外ではないと確信する。

すると、しばらく沈黙を守っていたユーリが、ようやく口を開いた。

「仮に私が知っていたとして、あなたはどうするおつもりですか？」

「理由は特にありません。単なる好奇心ですよ。それに、ユーリさんもただの神父ではなさそうですが」

身構え、戦闘態勢に入る百代。本能が叫ぶ。ユーリを強者と認識し、血が騒ぎ立てていた。

こいつは、強い――――戦って培ってきた武神の勘が、そう告げている。

「はっはっは、考え過ぎですよ。私はどこにでもいる、ただのしが

ない神父です」

当然、ユーリに戦闘の意思はない。それでも百代は諦め切れなかった。ようやく目の前に現れた強者を、ここで逃すわけにはいかない。

百代の心が、本能に浸食されていく。まるで、闘いに飢える獣のように。

「手合わせ願えますか？私が勝ったら、サーシャの事について教えてもらいます」

「断る、と言いましたら？」

ユーリの返答に、百代はニヤリと笑った。

「――その気にさせるまでです」

瞬間、百代はユーリとの距離を縮め、正拳突きを放った。拳をユーリの腹にめり込ませ、身体ごと吹き飛ばす。

――――はずだった。

「――――――!?」

今まで自分の前にいたユーリの姿が、消えている。

百代は動揺した。手応えを感じない上、かすりもしない。まるで幽霊を相手にしているような、気味の悪い感覚に襲われる。

「血気盛んなのは結構ですが――――」

何時の間にか、百代はユーリに背後を取られていた。だがユーリは構えず、両腕を後ろに組んだまま、微動だにせず佇んでいる。

「――――女性が暴力を振るうのは、あまり宜しくありませんね」

完全に舐められている。今まであらゆる敵を倒し、武神と呼ばれた百代にとっては最大の屈辱だった。咄嗟に背後を振り返ると同時に、回し蹴りを放つ。

「はあああぁぁぁぁぁーー!!」

百代の鋭く、重い蹴りがユーリを襲う。だがユーリは臆することな

く、攻撃を難なく回避する。

「まだまだあああぁ！！」

百代の攻撃は続く。怒涛の連撃でユーリを圧倒するが、攻撃は一度も当たらない。

まるで、手の内が全て読まれているかのように。

（くそっ……！）

一度後退し、体制を立て直す百代。一方のユーリは涼しげな表情をしたまま、百代を見据えている。

追い詰めているはずなのに、逆に追い詰められている――百代は焦りを感じていた。

同時に生きているという実感が身体中を震え立たせ、この状況を愉しんでいるようにも見える。

百代は今、満たされつつあった。

「……ふふふふふふ、ははははははははははははははははは！！！！」

歓喜のあまり、満月が照らす夜空にまで響くように、高らかに笑う百代。

「いいぞ……これで心置きなく本気が出せる――――――！！」

百代は身体中の気を最大限まで引き出し、抑えていた力を解放する。闘気が身体を覆い、大気が、そして大地が震える。

（成程。報告の通り……確かに深刻ですね）

だが、そんな百代に対してユーリは冷静だった。このままでは流石に危険か……今度ばかりは避けられるどころか、命を落としかねない。

「全力でいくぞ……さあ、存分に死合おう！！！」

決断する。止めるしかない、と。ユーリは右目の眼帯に手をかけた。

「――――私に、この眼帯を外させる気ですか？」

――――ドクン。

刹那、空気が変わる。百代の本能が危険であると察知した。

それは、死の予兆。百代の心臓が激しく脈打ち、忘れ掛けていた感覚を思い出させてくれる。

（久方ぶりの感覚だ……震えが止まらない！！）

自分では抑えきれないくらい、闘争心が膨れ上がっていた。百代は全力を注ぎ、ユーリに再び挑む。

「川神流奥義！！富士砕――」

「――――やめいいいいぃぃぃぃ！！！！」

百代が拳を突き出すと同時、百代とユーリの間に鉄心が割り込んできた。百代の拳が、ピタリと鉄心の寸前で止まる。

「お前の気を感じて此処へ来てみれば……モモ。これは一体どういうことじゃ！？」

「どけじじい！邪魔をするな！！」

百代には、ユーリという目の前の敵しか見えていない。聞き分けの悪い百代に、鉄心は大きく息を吸い込み、

「――――いい加減にせんか！！！！！！！！」

闘気の入り混じった喝を百代に入れた。百代は我に返り、荒れ狂っていた獣のような心が徐々に落ち着きを取り戻していく。

しばらくして、百代は拳を下ろした。反省しているのか、視線を地面に落としている。

平常心を取り戻したと分かると、鉄心は小さくため息を漏らす。

「……もう良い。モモ、お前は部屋に戻っていなさい」

「……悪い、じじい。少し暴れ過ぎた。ユーリさん、先程のご無礼、お許しください」

百代はユーリに頭を下げて謝罪すると、背を向けて道場から去っていった。

「……孫がとんだ迷惑をかけてしまいましたな。誠に申し訳ない」

「いえいえ、おかげで良い運動になりました」

ユーリは特に気にしている様子はなかった。それよりも、百代と戦闘しているにも関わらず、ユーリは傷一つ負っていないという事実に、鉄心は驚きを隠せずにいた。

「しかし、驚きましたな。モモの攻撃を受けて無傷でいるとは」

「偶然ですよ。私も避けるのがやっとでした」

ユーリは苦笑いしながら答える。

「ふむ……それにしても、このままではいかんのぅ」

鉄心は顔を俯かせながら、眉間に皺を寄せ、独り言のように呟いた。

「百代さんの事ですね」

「うむ、最近のモモは戦いに囚われ過ぎておりましてな。今でも戦いに飢えておる……」

鉄心の心配は尽きない。百代の精神面は危険な状態にあった。このままにしておけば、何をするか分からない。

「その件についてはご心配なく。既に手は打ってあります」

ユーリはこうなる事を予測し、手を回していた。

百代が危険な相手である事は鉄心から報告を受けている。それなら、百代と対等に戦える相手を用意すればいい。

それは、サーシャ達に危険が及ばないようにするのが本来の目的だが、同時に百代を更生させるための手段でもあった。

「――――ほう。それでアタシを呼んだってわけかい」

道場に響く女性の声。鉄心とユーリが視線を向けたその先に、彼女はいた。

修道服に身を包んだ、引き締まった体格の女性。彼女こそ、ユーリが手配した人物であった。

「ええ。厄介な仕事ですが、宜しくお願いします」

女性は拳を鳴らし、息を殺し、百代との戦いを待ち続ける。

――――アトス最強の戦術教官が今、この川神市の大地に降り立った。

## サブエピソード6「百代の好奇心」（後書き）

更新が遅くなりました。名前はまだ出しませんが、あの人が登場しました。
ユーリが強いという設定で構成しました。原作では眼帯を外さずに終わったのですが、強さがよく分からないので結局外していません（笑）
また文章が長いため、サブエピソードで分けています。
本編まで今しばらくお待ちください。

## サブエピソード7「女王様と心1」

★女王様と心1★

カーチャの地獄のような時間からようやく解放された心は、無事に自分の家――不死川邸へと帰宅した。

（うぅ……身体のあちこちが痛いのじゃ……）

アナスタシアに捕縛され、銅線による鞭打ちを受け、身体中――特にお尻の部分を集中して叩かれていた。身体が痛みで悲鳴を上げている。

『――いいこと心。今日から放課後、毎日ここへ来なさい。もし来なかったら……分かってるわね？』

帰り際に言われたカーチャの言葉が蘇る。心は毎日来るように命令されていたのだった。

その場では頷くしかないと思った心だったが、当然行くわけがない。

（父上に言って、あの女狐を退学にさせてやるわ……ほっほっほ、此方を敵に回した事を後悔させてやるのじゃ）

心の中で静かに笑いながら、心は機嫌を取り戻しつつ、家の玄関を開ける。

「今帰ったのじゃ」

心が帰宅すると、何人もの侍女達が整列し、心を出迎えていた。

「お帰りなさいませ、心様。お荷物をお持ちいたします」

「うむ」

侍女の一人に荷物を渡し、自分の部屋に向かう心。今日の事は忘れて、早く眠りにつこう……そう思った時、別の侍女に声を掛けられる。

「心様。お客様がお見えになっています」

「客じゃと？此方にか？」

「はい。あちらに」

侍女が客間のある部屋を指し示す。一体誰だろう、と心は首を傾げつつ客間へ向かう。

すると、客間の扉が勢いよく開き、不死川家を訪ねた“客”が姿を見せた。

「心お姉さま！！」

心の視界に飛び込んだのは、妖精のような容姿で、天使のような笑顔で出迎えるカーチャの姿だった。

カーチャは心に飛び込むように抱き付いて、嬉しそうに頬を擦りつけている。

「な、なななななななななな……」

放課後の出来事が、フラッシュバックして心の脳内から蘇ってきた。

まだ夢を見ているのだろうか。もしくは帰る家を間違えたのだろう

か。どの道、心の現実逃避である事に変わりはない。

心に抱きついている彼女は、間違いなくカーチャである。

「ど、どどどどういう事じゃ！？何故お前がここにいるのじゃ！？」

錯乱しながら、侍女に説明を求める心。すると、代わりにカーチャが答えた。

「カーチャ、しばらくここでお世話になる事になったの。それまでずっと心お姉さまと一緒なの。だから、カーチャすっごく嬉しい！」

カーチャの笑顔が眩しい、というか恐ろしい。心は滞在の話など全く聞いていなかった。

それが真実というなら、カーチャと一つ屋根の下で暮らすことになる……考えただけでもおぞましい。

「心様。この方はロマノフ家の末裔、エカテリーナ＝クラエ様でございます。大切なお客様ですので、決して粗相のないようにと、旦那様が申しておりました」

と、侍女が補足して説明する。

ロマノフ家――ロシア帝国を統治していた皇室であると、心は世界史の授業で聞いた事があった。

その末裔こそが、カーチャである。こんな幼い少女が……信じられない。

（……ふふ）

カーチャの天使の笑みが、悪魔の笑みに切り替わる。勿論、それは心にしか見えていない。

心は今すぐにでもカーチャを追い出してしまいたかった。が、父親の客である以上、それは絶対にできない。尊敬している親に対する裏切り行為だ。

「くっ……」

こうなってしまっては、心に決定権はない。心は渋々カーチャの滞在を認めるしかなかった。

「そ、そうか……此方も嬉しいのじゃ。ほ、ほっほっほ」

心にもない事を言う心。もうこの場で泣いてしまいたかった。

「……カーチャの部屋は用意できておるのか？」

「はい、すぐにご案内致します」

侍女に確認を取ると、カーチャは荷物を運ぶように指示を出した。

とりあえず、カーチャの機嫌だけは取っておこう。少しでも機嫌を損ねれば、被害を受けるのは確実に自分だ。

すると、カーチャが心の着物の袖を引っ張り、何やら照れ臭そうな表情を浮かべている。

「あ、あのね。心お姉さま……」

上目遣いで、何かを訴えるように心を見つめるカーチャ。何故だか、心にはもう嫌な予感しかしなかった。

「な、なんじゃ？」

「カーチャね、心お姉さまと一緒の部屋がいい。カーチャ一人じゃ寂しいし……怖い」

カーチャの要望に、心の背筋が凍りついた。カーチャと一緒に過ごす上に、同じ部屋で寝るなど、命がいくつあっても足りやしない。

（此方はお前と一緒にいる方が怖いのじゃ……！）

もし一緒の部屋になれば、カーチャの天下だ。それだけは避けたいと思った心は、必死になって阻止を試みる。

「そ、それなら心配いらないのじゃ。カーチャの部屋に侍女を側につけよう。それなら寂しくー―」

――――ぎゅっ。

再び、カーチャが抱き付いてきた。すると、スカートのポケットから何かを取り出し、心にしか見えないように、“それ”をちらつかせた。

「なっ……！」

心は言葉を失った。

それは、心がアナスタシアに縛られ、鞭打ちされている時の写真だった。何時の間にか、カーチャに撮られていたらしい。

「主人がお前の部屋に行ってあげるって言ってるのよ。それともいいのかしら？このあられもない姿をしたお前の写真を、学園中にばら撒いても」

心にしか聞こえないように、静かに囁くカーチャ。

「う……うぅ……」

脅迫され、心は何も言い返せなくなった。ここでカーチャの頼みを断れば、この写真が学園内にばら撒かれ、心の評判は一気に変態の域に堕ちるだろう。

つまりそれは、不死川家に泥を塗る事を意味する。そんな事態になれば学園中の笑い者にされ、おまけに２－Ｆの生徒達からは永遠にネタにされることは間違いない。

心にとって、とても耐え切れるものではなかった。

「……カーチャの荷物を此方の部屋まで持っていくのじゃ」

心は自分の部屋にカーチャを入れる事を選択し、侍女に指示をする。
これも自分の名誉……不死川家の名誉を守る為なら、致し方ない。

「かしこまりました。では、エカテリーナ様のお荷物をお運び致します」

侍女は心とカーチャに一礼をすると、この場から立ち去っていく。
心は侍女の姿を見送った後、再びカーチャに視線を戻した。カーチャは目を輝かせながら、ニッコリと笑顔を見せる。

「わあああ……ありがとう心お姉さま！お姉さまとなら、カーチャ寂しくない！」

無邪気に喜ぶカーチャだった。それとは対象に、心はガタガタと身体を震わせている。

この場に残っている侍女達には、微笑ましい光景に見える事だろう。

だが、心には悪い夢としか思えなかった。

「早くカーチャを部屋まで連れていって……心お姉さま」

カーチャの声のトーンが低くなる。心は悟った、もう逃げ場はないのだと。

こうしてカーチャとの壮絶な一夜が、幕を開けようとしていた。

## サブエピソード7「女王様と心1」（後書き）

カーチャ×心エピソードの第一弾です。
次第にエスカレートしていく予定ですが、過激度は抑えます。できるだけエロは避けたいですが、だいぶ無理がありますね。だってクェイサーだもの；；；；

## サブエピソード8「ヨンパチの災難」

★ヨンパチの災難★

夕日が上る、ある放課後の日の事。

ヨンパチはカメラを持ち、プールサイドの隅で息を潜めていた。

目的は勿論、水泳部の女子生徒のスクール水着姿を盗撮する為である。

（うっひっひ……ああ、いい眺めだぜ）

準備体操をする水泳部の女子生徒達を堪能しながら、はあ、はあ、と息を荒げていた。

スクール水着からくっきりと見える、女子の身体のボディライン。
特に胸の部分が強調されている所が嫌らしく、男の本能を刺激する。

ヨンパチは思った。これは良い極上のオカズになると。

（さすがにアイツも外までは監視できねぇだろ）

華が番長役になったおかげで、クラスの女子生徒達の盗撮が困難を極めていた。

だが、クラス以外なら監視の目は当然届かない。女性の美を追求するヨンパチに“諦め”という文字はなかった。

（よし……）

カメラを構え、盗撮のスタンバイをする。万が一の退路は確保済み。後はアングルを決めて激写をするだけだ。

「それにしても、でっかいおっぱいだよなぁ……ああ真剣（マジ）でしゃぶりつきてぇ」

ヨンパチは水着の女子生徒の一人を見て思わず感想を漏らす。

その女子生徒は見事なまでに巨乳だった。今にも水着がはち切れてしまいそうなくらいの大きな乳は、準備運動をする度に激しく揺れ動く。

（――――きたあああぁぁぁ！！）

ヨンパチの目が光る。今こそシャッターチャンスの時。ヨンパチはカメラの照準を合わせ、巨乳が揺れた瞬間を狙い撃つ――――。

「――――ちょっと聞きたいんだが」

シャッターを押す寸前で後ろから声をかけられ、思わずヨンパチはビクリと身体を震わせた。

盗撮がバレた……恐る恐る背後を振り向くヨンパチ。

「ひっ」

小さな悲鳴が上がる。ヨンパチの背後に覆い被さるようにして立っていたのは、黒の修道服に身を包んだ、シスターだった。

鍛え上げられた鋼の肉体。引き締まった服直筋。そして、ヨンパチの2倍以上はあろう背の高さ。どちらかと言えば、体格の良い巨漢と呼ぶ方が相応しい。

その圧倒的なまでの存在感に、ヨンパチの腰が思わず退ける。

「え、あ……はい」

「この学園の職員室はどこにある？」

巨漢のシスターが尋ねる。どうやら学園を訪ねてきた客人らしい。

とりあえず、ヨンパチは職員室の場所を教えた。盗撮の事を気にしている様子はないが、一刻も早くここから立ち去らなければ、とヨンパチの勘がそう告げている。

「じゃ、じゃあ俺はこれで……」

役目を終えたヨンパチは、プールサイドから逃げるようにして立ち去ろうとする。が、

「まあ待ちな」

巨漢のシスターが背後からヨンパチの制服の襟を掴み、引き止める。

「お前、そんなに女性のおっぱいが吸いたいのかい？」

巨漢のシスターは、ヨンパチが喋っていた一部始終を聞いていた。
ヨンパチは答える。

「そりゃあもう！揉みまくって、しゃぶりまくって、吸いまくってや――――あ」

またしても本音を漏らしてしまい、慌てて口を紡ぐヨンパチ。やはり、自分の性の本能には逆らえなかった。

すると、巨漢のシスターはヨンパチの襟から手を離し、解放する。

何やら不穏な空気が漂う……ヨンパチはそう感じた。

「そうか。そんなに吸いたいのなら、アタシが思う存分吸わせてやろうじゃないか」

そう言って、巨漢のシスターは胸を覆っていた服の部分を引き剥がし、

「さあ――――――お吸い！！！」

その筋肉質なボディを、ヨンパチの前で曝け出した。

「――――――」

ヨンパチの目に映る、巨漢のシスターのむっちりとした、豊満な胸。まず巨乳であることには間違いないだろう。

しかも素肌から直に見る“それ”は、男にとって誰もが夢見る（ゲイなど一部を除き）理想郷。それなのに、興奮や性欲よりも恐怖が先に支配していた。

ある意味でヨンパチは、“それ”から目を逸らせずにいた。

まるで、蛇に睨まれた蛙のような感覚。恐怖で震え、固まったまま動けない。

巨漢のシスターは両手でヨンパチの頭をがっちりと掴み、自分の胸へと近づけていく。

「吸え！吸うんだよ――――――！」

「あ、あ……あ……」

恐怖で引きつったヨンパチの顔と胸が次第に距離を縮めていく。ヨンパチは抵抗できず、そしてついに――――。

「――――――ンンア゛ア゛ァァァイィィィ！！！！！！！！」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

夕日が上る放課後の川神学園に、ヨンパチの断末魔が茜空に響いた。

## サブエピソード8「ヨンパチの災難」（後書き）

ビッグ・マム、初登場です。そしてヨンパチオワタ＼（＾ｏ＾）／
このシチュエーションはクェイサー？の１１話が元ネタです。気になる人は見てみてください。
次はいよいよ５話で、ワン子・クリス・京ＶＳビッグ・マムの戦いが始まる予定です！サーシャ達の出番は、まだ先になります……（涙）

## 5話　川神市の中心で“ア゛ーイッ！”と叫ぶ（前書き）

サブエピソードでワン子・クリス・京ＶＳビッグ・マムの対決を予告したのですが、話が長くなったので次の回になります。すみません；；；；；

「６話　激突、武士娘！」で連続バトルに入ります。御期待下さい。

# 5話　川神市の中心で“アーイッ！”と叫ぶ

サーシャ達が転入してから早一週間が過ぎた。

川神市に流出している謎の元素回路（エレメンタル・サーキット）の手掛かりは未だ掴めず、進展はない。

サーシャ達が調査しているエリアは親不孝通り。その名の通り治安が悪く、如何わしい店やドラッグの密売が頻繁に行われている。しかし、元素回路に関しての情報は全くない。

サーシャ達の調査は、困難を極めていた。

朝のＨＲ前、サーシャ、まふゆ、華の三人は現在作戦会議＆現状報告の最中である。

「見つからないわね、元素回路」

まふゆは肩を落とし、窓の外を何気なく眺めていた。まふゆはサーシャと同行し、親不孝通りを見て回ったが、ドラッグの常習犯を一人捕まえただけで、それ以外は何も起こらなかった。

「あたしもカーチャ様と周辺を探ったけど、進展なしだぜ……っていうかカーチャ様、てっきり川神院に来ると思ってたのに、滞在場所が別だなんて……」

華は別の意味で肩を落としていた。カーチャの滞在場所は別で手配したらしく（カーチャが勝手に決めた）、華に置き手紙を残して去っていったという。

ちなみに置き手紙の内容は、

『お・あ・ず・け　？』

と、カーチャの似顔絵とこの四文字だけである。要するに放置プレイという奴だ。

「我慢しろ。聖乳（ソーマ）なら俺が変わりに吸ってやる」

サーシャが腕を組み、真顔で答える。華はねーよ！と言って機嫌を損ねるのだった。

「ったく……お？」

ふと、華の目に留まったのはヨンパチの姿だった。ヨンパチは自分の席に座ったまま、何もせず大人しそうにしている。

いつもならカメラを持って盗撮を図るのだが、今日はカメラを持参してない上、やけに物静かだった。

何か企んでいる……華はニヤリと笑い、早速からかいに行く事にする。

「やけに大人しいなヨンパチ。今日はカメラ持ってないのかよ？」

嫌味のように、話かける華。しかしヨンパチは黙ったまま、まるで電池の切れた機械のように無機質な表情を浮かべていた。無視されたような気がして、華はヨンパチを睨み付ける。

「おい、聞いてんのか？」

「……」

それでも、ヨンパチの態度は変わらなかった。不思議に思った華はヨンパチの顔を覗き込むように見る。ヨンパチの表情はまるで感情

のない人形のようだった。

「あれ、どうしたの桂木さん」

華に声をかけてきたのはモロだった。側には岳人もいる。

「それがよ。ヨンパチのやつ、声かけても何の反応もしないんだぜ？コイツどうしちまったんだよ」

無反応なヨンパチの身体を指で突く華。しかしそれでも反応は返ってこない。

すると岳人がヨンパチの前に出てくる。

「昨日ＡＶ見て抜き過ぎたんじゃねぇの？ま、こいつを見りゃ元のヨンパチに戻るって。ヨンパチ、例のヤツ手に入れてきたぜ～」

岳人が手に持っていた紙袋の中に手を突っ込み、一冊の本を取り出した。

『豊作！美少女巨乳乱獲祭！～もぎたて夏の果実たち～』と書かれたタイトルの本だった。表紙には巨乳の水着美少女達が恍惚な表情

をして写っている。

要するに、エロ雑誌だった。

岳人は早速雑誌をパラパラと捲り、特集ページをヨンパチの目の前に突きつける。

「――――――」

ヨンパチの表情が、僅かに動いた。目の焦点が雑誌に集中する。徐々に身体が震え、男としての本能がヨンパチを震え立たせ、

「うわあああああああああああああああああああ！！！おっぱい怖いよ～！！！！！！」

そして恐怖と共に、悲痛の雄叫びを上げた。それと同時にモロと岳人……クラス全員が驚愕し、揃えて声を上げる。

「えええええっ！？ちょっと待ってよ、一体何があったのさヨンパチ！？」

ヨンパチの豹変が信じられず、モロは驚きを隠せなかった。岳人も

予想外の反応に面食らい言葉も出ず、持っていた雑誌を落として口をあんぐりと開けている。

常に女性の美を追求し続けてきたヨンパチ。２４時間セックスの事しか考えていないと豪語していたヨンパチ。

そんな彼から女性の胸に恐怖を抱くなどと、一体誰が予想できただろうか。できるはずがない。

「二人とも、何かあったの？」

騒ぎを聞いて京がやってくる。

「京、ヨンパチがおかしくなっちまった……」

岳人はヨンパチを指差す。ヨンパチは恐怖に震えていた。

「ふーん」

興味なさそうにヨンパチを見る京。すると、京は岳人が落としたエロ雑誌を拾い上げ、

「ほーれ」

再び特集ページをヨンパチに突き付けた。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ！！」

ヨンパチは恐怖のあまり、机の下に隠れてしまった。

「うん、重症だね」

「京、それ面白がってやってるよね！？」

モロの突っ込みが入る。京はくくく、と笑うと自分の席へ戻っていった。確信犯である。

「皆さん、もうすぐウメ先生が来ますよー！」

予鈴のチャイムが鳴り、真与が生徒達に声をかける。生徒達はすぐに席へ戻り、朝のＨＲの体制に入った。

教室の扉が開き、梅子が入ってくる。委員長が号令をかけて挨拶をすると、いつものように朝のＨＲが始まった。

「おはよう諸君。朝のＨＲを始める」

梅子は一通りの連絡事項を手短に生徒達に伝え、早めにＨＲを切り上げた。咳払いをし、もう一つの連絡事項を生徒達に伝える。

「それと1時限目の体育の授業だが、今日は特別講師に来てもらっている」

と、梅子。クラス全員がざわつき始めた。梅子は「静粛に！」と鞭を捌き、場を沈める。

「その方は多くの戦場を潜り抜けてきた戦いのプロだ。存分に鍛えてもらうといい……では教官、宜しくお願いします」

梅子は教室の扉に向かって声をかける。

聞こえてきたのは足音。梅子とは違い、重苦しく、圧し掛かってくるような威圧感があった。

そして、教室の扉が勢いよく開く。現れたのは黒の修道服を着た、引き締まった体格を持った巨漢の女性。

そう――その正体はサーシャ達の師匠、ビッグ・マムだった。ビッグ・マムは堂々と教室に入り、足音を立てながらクラスの生徒達と向き合った。

「紹介しよう。この方はとある養成所から派遣された格闘及び戦術教官、ビッグ・マム講師だ」

ビッグ・マムを紹介する梅子。ちなみに養成所名は匿名で出すようにと、アトス関係者から指示を受けていた。

「――――――――」

クラスの生徒達は全員、目を見開いている。ビッグ・マムの圧倒的な存在感に、声も出せなかった。

「し、師匠!?」

「「ビッグ・マム!?」」

声を出して驚いていたのはサーシャ、まふゆ、華だった。

「久しぶりだねぇ、サーシャ、まふゆ、華。ここに転入したと聞いていたが……まさか最初の授業がお前達のいるクラスだとはねぇ」

これも因果か、必然かと言ってバキボキと拳を鳴らすビッグ・マム。反射的に、サーシャ達の背筋が凍り付いた。

突然の師匠との再会——喜ぶべきか、悲しむべきか。サーシャ達にとっては複雑な心境である。

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああ！！！出たあああああああああああああああああああああ！！！」

そしてもう一人、声というより悲鳴を上げていたのはヨンパチだった。ヨンパチはビッグ・マムの姿を見て失禁し、恐怖に慄いていた。ビッグ・マムはヨンパチの方へ顔を向け、ニヤリと笑う。

「ほう。お前は昨日の盗撮小僧じゃないか」

「ひいいいぃぃぃぃぃぃぃいいいいい！！！許してえええええぇぇぇぇぇえ

ええええ！！」

ヨンパチの感情は恐怖に支配されている。もはやビッグ・マムがトラウマになってしまっていた。

「福本、お前また何かやったのか！？」

梅子が問い質そうと鞭を構える。が、ヨンパチはおっぱい怖いと連呼するだけで、とても受け答えできるような状態ではなかった。

すると、ビッグ・マムが変わりに答える。

「なに、女性のおっぱいがどうしても吸いたいというもんだから、アタシのを思う存分吸わせてやっただけの話さ」

「は、はあ……」

ビッグ・マムは自分の胸を強調するように述べる。梅子もそれで納得するしかなかった。

一方、そんなビッグ・マムの姿を見た男子生徒一同に悪寒が走る。

あの巨漢に無理やり胸を吸わされて……男にとっては羨ましいシチュエーションの筈なのに、何故だか恐怖を感じていた。

「……さて」

ビッグ・マムが再び生徒達に向き直る。

「お前たち、何をぼさっと突っ立っているんだい！さっさと表へ出る準備をするんだよ！」

怒号のような声を撒き散らし、生徒達に指示をするビッグ・マム。
生徒達は動揺し、どうしていいかおろおろしている。

「――――ん？」

ビッグ・マムは窓際の方へ顔を向けると、窓から身を乗り出そうとしているキャップの姿を発見した。キャップと目が合う。

「やべっ」

キャップは次の瞬間、そのまま窓から飛び出し、逃走を図る。授業

の内申を捨てている、キャップにしかできない行為だった。

「こら、風間！……全く、仕方のないやつだな。教官、あれはもう放っておいて構いません。早く授業を――」

「――面白いじゃないか」

ビッグ・マムは両手を鳴らし、キャップが逃げた方角を見てニヤリと笑った。どうやら捕まえる気でいるらしい。

「度胸だけは認めてやろう。だが、所詮はヒヨっ子。このアタシから逃げようと思った事をたっぷりと後悔させてやる！！」

“ア〝ーイッ！”と声を上げて、窓ガラスを豪快に割って飛び出すビッグ・マム。梅子が止めに入るが時既に遅し。ただ呆然と見ている事しかできなかった。

「へっ。キャップがそう簡単に捕まるかよ」

腕を組みながら岳人が笑う。“気まぐれな風”と呼ぶだけあって、キャップは早い。唯一捕まえられる人間といえば、百代ぐらいしかいないだろう。

捕まえられるはずがない、クラス全員もそう思っていた。

「……無理だ」

ボソッと、サーシャが呟く。サーシャはビッグ・マムの恐ろしさを知っているが故、結果はとうに見えていた。

「確か、サーシャの師匠なんだよね。あの人ってそんなに凄い人なの？」

大和が訪ねると、サーシャはゆっくりと頷いた。あのクールなサーシャの表情が、恐怖の色で染まっている。

「例えどこへ逃げようと……師匠は地獄の果てまで追ってくるぞ」

「大丈夫だよ。まあ見てれば分かるって」

大和と、クラス全員がキャップの逃走劇を見物しようと窓から顔を出した次の瞬間、

「アーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

イッ！！！！！！！！！」

ビッグ・マムの声と共に轟音が校庭に響いた。あまりの声の大きさに思わず耳を塞ぐ生徒達。何が起きたのだろうと再び窓を覗いた時には、キャップとビッグ・マムの姿はなかった。

何故なら、ビッグ・マムは既に教室の窓から乗り込んでいたのだから。

そしてその脇には……キャップが抱えられていた。顔には×印のような痣があり、ぐったりとした表情で力尽きている。

その光景に、クラス全員……梅子までもが驚愕していた。ビッグ・マムは抱えていたキャップを床へ投げ捨てる。

「うぇ……この人、強ぇ……」

キャップのかすれ声が聞こえる。キャップは最後まで逃げきれず、ビッグ・マムの制裁を受けていた。

「う、嘘だろ……キャップが捕まるだなんて」

岳人は信じがたい光景を前に唖然とする。あの風のようなキャップが捕まった……それはクラス全員を戦慄させた。

そしてビッグ・マムは生徒達を見て叫ぶ。

「いいかよく聞きな、ヒヨっ子ども!!アタシが来たからには、お前たちのぶったるんだ空気をぶっ飛ばしてやる!!!」

ビッグ・マムの喝が生徒達を震撼させ、２－Ｆの空気を支配していく。

「分かったら準備をして外へ出な!!!」

「「「……は、はい!!!」」」

生徒達は声を揃え、ビッグ・マムの指示に従った。

キャップが捕まった以上、もうビッグ・マムから逃れる事はできない。それを見せつけられた生徒達は一時限目の授業の準備をすると、一斉に更衣室へと向かっていった。

「……素晴らしい統率力です。感服いたしました」

ビッグ・マムの指導力を見せつけられ、教師としての未熟さを知った梅子。まだまだ自分も修行が足りないと痛感する。

「うむ。さて……まずはこの学園の生徒達がどれ程のものか、調べないといけないね」

右手をわきわきと鳴らすビッグ・マム。川神学園のレベルが如何なるものか……戦術教官であるビッグ・マムとしては、興味があった。

――――もうすぐ、1時限目の授業が始まる。この学園に、早くも暗雲（別の意味合いで）が立ち込めようとしていた。

# 6話　激突、武士娘！

体操服に着替え、準備を終えた２－Ｆの生徒達は校庭に集まり、授業が始まるまで待機していた。

「う……やっぱりこの格好恥ずかしい」

まふゆが恥ずかしそうに呟きながら、シャツを伸ばしてブルマを隠していた。

「ってか、いつも思うんだけどよ。何で今時ブルマなんだよ。この学園は……」

華も自分の格好を見てうんざりする。学長曰く“ワシがいる限り、この学校はブルマじゃ”との事。

鉄心が引退でもしない限り、この学園の女子の体操服は永遠に変わる事はないだろう。

「……」

サーシャはそんなまふゆの体操服姿をぼーっと眺めていた。そんな

サーシャの視線を感じ取り、まふゆは自分の身体を隠すような仕草を見せる。

「そ、そんなにジロジロ見ないでよ……サーシャ」

「いや、俺は……別に」

照れ隠しをしているのか、サーシャは顔を赤くして視線を逸らす。何度も見ている筈なのに、まふゆのブルマ姿はどうも慣れないサーシャなのだった。

「ア〝ーーーーーーーーーイッ!!!」

するとどこから現れたのか、突然ビッグ・マムがサーシャとまふゆの間に割り込んできた（正確には降ってきた）。目を鋭く光らせ、二人を睨み付けている。どうやら惚気は禁止、という事らしい。

サーシャとまふゆは距離を置くと、ビッグ・マムはふんと鼻を鳴らし、集まった生徒達の前へと歩いていく。

「さて……早速授業を始めるとしようか」

ニヤリと笑うビッグ・マム。生徒達全員が、ゴクリと唾を飲んだ。
これから一体何をやらされるのか……そう思うと不安が募る。

「今日の授業は……アタシとの模擬戦闘を行う事にする」

そして、その不安は見事に的中した。生徒達の殆どが恐怖で震え上がる。

「その前にだ……サーシャ、まふゆ、華。お前たちは後だ。まずは川神学園のレベルがどれ程のものか、お手並み拝見といこうじゃないか」

サーシャ達はいつもビッグ・マムの訓練を受けている為、実力は把握している。

「さあ、アタシと戦いたいヤツは前に出るんだよ」

――――ヨンパチがトラウマを植え付けられ、キャップが捕まり、なおかつ心を負かしたサーシャでさえも震える最強の存在。

そんな人間に、太刀打ちできるわけがない。生徒達は誰も前に出ようとはしなかった。

そんな中、勇敢にも名乗りを上げる生徒が3人。

風間ファミリーのメンバー、ワン子、クリス、京だった。3人はビッグ・マムの前に堂々と出る。

「お前たち、名前は？」

「はい！2－F、川神一子！」

「同じく、クリスティアーネ＝フリードリヒ！」

「同じく、椎名京」

3人とも力強い（京はそうでもないが）声を上げ、真剣な眼差しでビッグ・マムを見上げる。ビッグ・マムは腕を組み、他に挑戦者がいない事を確認すると、満足げに頷くのだった。

「ふむ、いいだろう。武器は好きな物を使って構わない」

言って、ビッグ・マムは武器のレプリカ（教室から勝手に持ち出した物）を用意する。

ワン子は薙刀を。クリスはレイピアをそれぞれ手にする。京は武器は取らず、素手で勝負に挑む。

武器を選び、戦闘の準備を整えた3人は改めてビッグ・マムと対面した。

「あたしが先に行くわ！」

一番手を先取るワン子。

「いや、自分が先だ」

割り込むクリス。どちらが先に戦うか揉め出し、火花を散らしていた。一方の京はどちらでもいいらしく、言い争う2人を見て“しょーもない”と溜息を吐くのだった。

すると、ビッグ・マムが口火を切って宣言する。

「――順番を決める必要はない。3人まとめてかかってくるといい」

そのビッグ・マムの言葉に、ワン子達――否、２－Ｆの全員が驚愕した。

ワン子、クリス、京はクラスの中でも戦闘力の高い強者達だ。その３人を同時に相手をするのだから、ビッグ・マムには相当の自信があるのだろう。

（３人同時……なんか燃えてきたわ！）

ビッグ・マムという強敵を前に、闘争心を燃え上がらせるワン子。

（随分と舐められたものだな……目にものを見せてやろう！）

挑発を受け、クリスはビッグ・マムを睨み付ける。

（ま、めんどくさくなくていいか）

京は相変わらず冷めたままだった。

「さあ、始めようじゃないか」

両手を鳴らし、戦闘体制に入るビッグ・マム。まだ手を合わせていないというのに、この圧迫感。３人は思わず息を飲む。

しかし……戦士として、武人として、そして騎士として引き下がるわけにはいかない。３人は構えて、ビッグ・マムと対峙する。

周囲の生徒達も息を飲み、その様子を見守っていた。

――――――数秒間、沈黙が訪れる。そして、

「――――――いざ！」

「――――――参る！」

「――――――いくよ！」

３人の掛け声と同時に、ワン子達とビッグ・マムとの戦いの火蓋が切って落とされた。

「はあああああぁぁーーーーー！！！」

まずはワン子が先陣を切り、持ち前のスピードでビッグ・マムに接近する。薙刀を振り上げ、その一撃をビッグ・マムに叩き込む。だが、

「遅いっ！！！！」

ビッグ・マムはあっさりと身を躱す。薙刀を掴み、片手でワン子の身体ごと投げ飛ばし、地面へと叩き付ける。

「あぐっ！？」

まるで鈍器で殴られたような重い衝撃がワン子の身体を襲う。ワン子は怯み、しばらく動けなかった。

「はっ――――！」

続いて京の攻撃。京は遠距離専門ではあるものの、体術はある程度体得している。

だが、あくまで“遠距離専門”であり、肉弾戦でビッグ・マムとやり合うには到底及ばない。ビッグ・マムも体術で牽制し、京の腕を掴んで背負い投げる。

「うっ！？」

うまく受け身は取れたものの、反動と衝撃が大きく、京の身体中に痺れが走った。

「――――もらったっ！！」

さらに、クリスの弾丸のようなレイピアの一撃がビッグ・マムの身体を狙う。ビッグ・マムは舌打ちをすると、紙一重で攻撃を回避した。

「まだまだっ！！！」

クリスの攻撃はさらに続く。常人の動体視力では捉えられない程の高速連続突きを放ち、ビッグ・マムを追い詰める。

だが、マシンガンのような怒涛の攻撃さえも、ビッグ・マムは見事に躱していく。

さすがは戦いのプロ……戦術教官を名乗るだけはあるとクリスは思う。だからこそ、目の前の強敵を打倒したいと、騎士としての血が

騒いだ。

（だが――――次で決める！！）

クリスはビッグ・マムが反撃を始めるまでの僅かな瞬間を狙っていた。

1、2、3――――連撃のカウントと同時に、腕に力を溜めていくクリス。徐々に距離を縮め、必殺の間合いへと入った。

クリスは身体を捻り、バネのように反動を利用する。そして、

「零距離――――刺突！！！！」

渾身の一撃をビッグ・マムの身体目がけて放った。距離は技の如く、零に等しい。避けられる道理などありはしない。

レイピアの一撃はビッグ・マムの腹部にめり込み、致命的なダメージを与える。

「――――――！？」

そのはず、だった。

クリスは突きの構えをしたまま動かなかった。否、正確には動けずにいる。

正面にビッグ・マムの姿はない。レイピアを持つ手首はビッグ・マムに掴まれ、クリスは身動きを完全に封じられていた。

「動きのキレ、隙のなさ。なかなかやるじゃないか。太刀筋も悪くない。だが、お前の攻撃は“真っ直ぐ”過ぎる。それじゃあ、相手に攻撃する場所を教えているようなもんさね」

「くっ――――！」

レイピアを突き出した僅かな瞬間、ビッグ・マムは攻撃が当たる正確な位置を把握し、攻撃を回避していた。クリスは腕を振り解こうと力を入れるが、まるで石のように硬く、ピクリとも動かない。

「次はこっちの番だ」

腕に力を込め、拳を強く握り締めるビッグ・マム。身体の自由を奪われ、もはやクリスに逃げる術はない。

「ア゛ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーイッ！！！！！！」

ビッグ・マムは強烈なアッパーをクリスの腹にめり込ませ、身体ごと打ち上げた。クリスの身体が空高く吹き飛んでいく。

「がはっ……！？」

まるで大砲のような強力な一撃だった。クリスは立ち上がろうと身体に力を入れるが、予想以上にダメージが大きく、そのまま地面に崩れ落ちて気絶した。

クリス、ダウン。

「クリスが一撃！？マジかよ……」

全貌を見ていた岳人が絶句する。クリスの強さを知っているが故に、一撃で沈黙したという事実が信じられなかった。他の生徒達も同じである。

「ううっ……まだやれるわ！」

薙刀を杖代わりにし、ようやく立ち上がるワン子。身体中のあちこちが悲鳴を上げているが、戦いに支障がある程ではない。京も起き上がり、戦線に復帰する。

「ほう。なかなかしぶといじゃないか」

こうでなくては面白くないと、ビッグ・マムは笑う。

「はあああああぁぁーー！！」

反撃を開始するワン子。フルスピードで再び突貫し、空高く飛び上がった。

「川神流奥義・大輪花火！！！」

薙刀を振り上げ、全力を注いで攻撃を叩き込む。

「ふん、隙だらけだ！！」

ビッグ・マムは薙刀の猛攻をフットワークで掻い潜り、攻撃が大振

りになった瞬間を狙ってアッパーカットを放つ。

「京――――！」

そしてワン子の掛け声と共に、その瞬間を京が狙う。

京は手に隠し持っていたパチンコ玉を弾き、ビッグ・マムの身体に向けて狙い撃った。パチンコ玉は見事ビッグ・マムの身体に直撃する。

（当たった！これで……え？）

だが、ビッグ・マムが怯む事はなかった。

「うわあああああっ！？」

ビッグ・マムの攻撃がワン子に直撃する。咄嗟に薙刀で防御したものの、それも虚しく薙刀ごと折られ、攻撃は見事に貫通した。ワン子の身体が勢いよく吹き飛び、地面に叩き付けられる。

（そんな……あり得ない）

確かに、京の攻撃は当たっていた。なのに、まるで効いていない。
今の今までこんな状況に出くわした事のなかった京は冷静さを失い、
再びパチンコ玉を取り出して応戦する。

「――――攻撃の隙を突き、狙撃して怯ませるという考えまではよかったが」

「!?」

京の背後に、何時の間にかビッグ・マムの姿があった。腕を掴まれ、身動きが取れない。

「相手が悪かったね――――アミン」

最後の祈りを捧げ、京の首筋に手刀を叩き込んだ。京は“しゅん…”と言って気を失い、地面に崩れ落ちる。

日頃から鍛えているビッグ・マムの肉体には、パチンコ玉のような小細工は無力であった。

京、ダウン。

クリス、そしてついには京までもがやられ、戦局は絶望的だった。

残るはワン子のみ。ワン子は傷だらけの身体に鞭を打つように、ゆっくりと立ち上がる。

「はぁ、はぁ……まだまだ」

口では強がっていても、身体は殆ど動かないに等しかった。それでも、ワン子の戦いの意思は消える事はない。

たとえ身体が悲鳴をあげようと壊れようと、ワン子は絶対に諦めなかった。ここで諦めたら、きっと前に進めない。

――川神百代。自分の目標とする人間に少しでも近付く為に、ここで倒れる訳にはいかなかった。

「――――――」

そんなワン子の姿を見て、努力の天才だとビッグ・マムは思う。だが、努力をしても超えられない壁がある。

少なくとも、今の時点では。

「川神一子。お前は――――」

ビッグ・マムは告げる。ワン子に現実を突き付ける為に。だがその直後、

「その勝負、待った――――――――！！」

突然、校庭に声が響いた。正確には、ビッグ・マムの頭上からだった。そして、その声の主は華麗に地面に着地する。

――ビッグ・マムの前に現れた、川神学園の生徒が一人。

その正体は……武神、川神百代であった。

## 6話　激突、武士娘！（後書き）

何と言うビッグ・マム無双（笑）
まじこいファンのみんな、ごめんなさい。３人ともフルボッコになりました；
そして次は百代との連戦です！

# 7話　最凶と最強（前書き）

ついに百代ＶＳビッグ・マムの戦いです！はい、クェイサー組が殆ど空気（笑）

# 7話　最凶と最強

1時限目の授業の時間に乱入し、ビッグ・マムの前に現れた百代。

ビッグ・マムの戦いを教室から眺めていた百代はとうとう闘争本能を抑えきれなくなり、授業を抜け出していた。

2－Fの生徒達も、百代の突然の登場に騒然とする。

「お……お姉さま？」

戦いでボロボロになった身体で、よろよろと百代に歩み寄るワン子。

だが、百代の目にワン子の姿は映っていなかった。百代にはもう、ビッグ・マムしか見ていない。

「ワン子、こいつはお前が勝てるような相手じゃない。下がれ」

「で、でも……」

「姉の言う事が、聞けないのか？」

「う……」

大人しく、百代の言う通り引き下がるワン子。この時の百代の目がまるで獣のように見えて、ワン子は少し恐怖を覚えた。

「ビッグ・マムとか言ったな。私は３－Ｆ所属、川神百代だ。今から貴方に決闘を申し込む！！」

ビッグ・マムと対面した百代は早速宣戦布告をする。それに対しビッグ・マムはニヤリと笑う。

「お前が川神百代かい。噂には聞いているよ……いいだろう。その決闘、受けて立とうじゃないか」

何の躊躇いもなく、百代との決闘を承諾するビッグ・マム。ビッグ・マムは２－Ｆの生徒達に向き直った。

「お前たち、今日の授業は自習だ。各自１時限目の授業が終わるまで、好きにするといい」

何ともむちゃくちゃな講師だと、２－Ｆの生徒達全員がそう思った。

だが、生徒達の取る行動は一つしかない。

――百代とビッグ・マムの対決を、見過ごす訳にはいかなかった。

「うっ……」

「ん……」

ビッグ・マムの一撃を受け、倒れていたクリスと京が意識を取り戻す。大和、キャップ、モロ、岳人が駆け寄り、二人を介抱する。

「クリス、大丈夫？」

モロと岳人がクリスに肩を貸す。クリスは立ち上がると、唇を噛み締めながら、地面を視線に落としていた。

「手も足も出なかった……あの教官、思った以上に強い」

まるで赤子扱いにされたような戦いだった。クリスは自分の未熟さを思い知らされる。

「京、しっかりしろ」

ぐったりした京に肩を貸し、大和が声をかける。京は意識が朦朧としていて、今にも倒れてしまいそうだった。

「大和……私、もう……」

「どこか痛むのか？なら、保健室に……」

「大和がキス、してくれたら……私、もう何も怖くない」

「よし、分かった。とりあえず保健室に行こう」

「もう、大和のいけず」

半分（殆どが）仮病だった。大和を引き付ける為の。

「ワン子、よく頑張ったな」

キャップがワン子の肩を叩く。ワン子はえへへと笑い、急に力が抜けて、地面に崩れてしまった。キャップはワン子を背負うと、大和

達のいる方へと歩く。

（お姉さま……）

ワン子は思う。あれは百代の姿をした”何か”だ。自分の本能を満たしてくれる相手を、常に探し求めている。

まるで、戦いに飢えた獣のように。

大和達といつものように遊んで笑っていた百代は、もう帰ってこない……そんな気がして、ワン子は胸が締め付けられるような思いだった。

その一方で、百代はビッグ・マムという強者と対峙し、歓喜していた。

あのワン子、クリス、京ですら手も足も出ないとなれば、相手にとって不足はない。

サーシャといい、あのユーリといい……戦いに震え、鼓動が高鳴る日をどれだけ待ち望んでいたことか。百代は武者震いし、闘争心を

燃やしていた。

「久方ぶりの死合いだ……楽しませてもらうぞ、ビッグ・マム！」

「いい気になるんじゃないよ小娘が。川神百代、お前のその天狗っ鼻をへし折ってやる！」

互いに火花を散らし、闘気をぶつけ合う百代とビッグ・マム。もはやこれは決闘というレベルでは収まらないだろうと、ここにいる誰もがそう思った。

――百戦錬磨の武神と、ワン子達を軽くあしらう程の圧倒的な戦闘力を見せつけた戦術教官。

今、最凶と最強の戦いが始まろうとしていた。

「――――この戦い、ワシが立ち会わせてもらうぞい」

二人に向かって歩いてきたのは鉄心だった。鉄心は真剣な表情で両者を見る。

「モモ。授業を抜け出すのは感心せんが、今回だけは特別じゃ」

「やけに聞き分けがいいな、じじい。まあ、止めたとしても無駄だがな」

百代は腕を鳴らし、ニヤリと笑いながらビッグ・マムをまじまじと凝視する。今すぐにでも戦いたいと言わんばかりに。

すると、学園中から他の生徒達や教師たちも決闘を見たいがためにやってきた。校庭は、あっという間にギャラリーで覆い尽された。

ちなみに授業は中断し、決闘の見学は鉄心の学長権限により許可が降りている。

「では両者、名乗りを上げるがよい！」

「３－Ｆ、川神百代！」

「川神学園特別講師、ビッグ・マム」

両者とも名乗りを上げ、互いに顔を向き合った。校庭中にいるギャラリー全員が息を呑む。

（ビッグ・マム殿、モモを頼みましたぞい）

心の中でビッグ・マムに託した鉄心は、決闘開始の合図を告げる。
両者は睨み合い、拳を構えて戦闘体制に入る。

この戦い――――真剣（マジ）にならなければ勝てない。究極の対決が、今実現されようとしていた。

「いざ尋常に――――はじめぃ！！」

鉄心が合図をした次の瞬間、百代とビッグ・マムは同時に動き出して突貫する。

「――――川神流奥義・無双正拳突き！」

百代は拳を突き出し、強烈な一撃を繰り出した。ビッグ・マムもそれと同時に拳を突き出し、ストレートを打ち込む。

互いの拳と拳がぶつかり合い、その反動で凄まじい衝撃が巻き起こった。地面が揺れ、いかに強力な一撃かを物語っている。

「ふんっ！！」

ビッグ・マムは即座に反撃し、百代の左上腕に回し蹴りを打ち込んだ。百代は回避できず、打撃で骨が軋む。

（早い！？……だがこの程度！）

百代もすかさず反撃し、もう一度正拳突きを放った。ビッグ・マムも避けきれず、腹部に直撃を受ける。

「ぐっ……！？」

ビッグ・マムは後退し、体制を立て直した。腹にダメージを負ったものの、鍛え上げられた鋼の肉体で衝撃はある程度軽減されていた。もしもそれがなければ、一撃で沈黙していただろう。

（あの一撃でこの威力かい。さすがは武神と言った所か）

ビッグ・マムは心の中で感心する。今まで戦ってきた中で、百代は格段に強い。少しでも気を抜けばやられるのは自分だ。

（こいつは……久しぶりに本気を出さないといけないねぇ）

それにも関わらず、ビッグ・マムは全力ではなかった。百代の力量を測るため、様子を伺っていた。

だが、もうその必要はない。百代は計り知れない程のスペックを持った化け物だと認識したビッグ・マムは、精神を集中させて再び構える。

その様子を、百代は興味深そうに眺めていた。

（ようやく本気を出したか……なら、こちらも出し惜しみはなしだ）

百代も同じく、ビッグ・マムの力量を測っていた。百代は抑えていた闘気を身体中から放出させ、これまでとは比べ物にならない程のパワーを漲らせている。

「――さあ、いくぞ！」

「――来い、川神百代！」

戦闘続行。両者が接近し、体術による激しい攻防が始まった。互いに互角の戦いを繰り広げ、リードを譲らない。

その戦闘光景を見ていた多くのギャラリーは、誰も声をあげなかった。人の領域を逸脱したハイレベルな戦いを、ただ口を開けて見入っている。

「すごい……あの姉さんと、互角でやりあうなんて」

大和も思わず魅入ってしまっていた。

それもそのはず。何故なら今まで百代と戦ってきた相手は、互角どころか決闘以前の問題であり、１０秒も立たないうちにやられてしまうのを何度も見てきたからだ。

それが今、百代と対等に渡り合えている人間がここにいる。その光景は新鮮極まりない。

「ははははは！楽しいぞ、貴方のような強者を、待ち望んでいた！！」

「小娘にしてはやるじゃないか！ここまでアタシが本気になったのは久しぶりだよ」

強さを認め合い、拳と拳で会話を交わす二人。百代もビッグ・マムもこの戦いを心底楽しんでいた。

「だが、そろそろ決めさせてもらうぞ！！川神流奥義・星殺し――――」

「やらせないよ！！！」

百代が気を練り上げる僅かな瞬間を狙い、ビッグ・マムは百代の四肢に打撃を打ち込んだ。ダメージを負い、百代は体制を崩すが、身体の細胞を活性化させてダメージをリセットした。

瞬間回復――――百代が修行の末に獲得した能力である。

「お返しだ――――禁じ手・富士砕き！！」

百代が反撃し、強力な正拳尽きがビッグ・マムを襲う。ビッグ・マムも正拳突きで迎撃して攻撃を相殺させた。が、思った以上に衝撃が大きく、反動で身体が大きく後退する。

（身体の細胞を活性化させてダメージを無くした……随分と厄介な能力だね）

末恐ろしい小娘だ、とビッグ・マムは笑う。これではいくら攻撃をしても無意味で、体力を削られて力尽きるのを待つばかりだ。

しかし、その規格外の相手を如何に倒すかこそが、戦術教官の腕の見せ所である。

百代は強い。だからこそビッグ・マムは知りたかった。百代の中にある、戦いの真意が。

「……川神百代。お前に一つ聞きたいことがある。お前は何のために戦う？」

何故戦いに執着するのか、何故強さを求め続けるのか。百代の心を震わせ、突き動かす程の理由があるはずだ。

しかし、その質問に対し、百代は小馬鹿にするように笑う。

「愚問だな……決まってるだろう。戦いたいから、戦うんだ！」

百代の回答は単純明快な物だった。ただ、本能の赴くままに戦う。そこに理由などありはしない。ひたすら強者を求め、倒してはさらに強者を求める……果てのない、歪んだ欲望だった。

それを聞いたビッグ・マムは深く目を閉じて、考えに耽る。鉄心の依頼通り、このままの状態で百代が戦い続ければ精神が狂い、もはや人間ではなくなってしまうだろう。

それ以前に、ビッグ・マムは哀れに思った。強者の果てにあるのは、孤独しかないというのに。

「嘆かわしいねぇ。それがお前の答えか」

「そうだ、それの何が悪い？私は強い者を求め、打ち倒す。ただそれだけだ――――そしてビッグ・マム、貴方も私が倒す！！」

ビッグ・マムに突進し、正拳突きを放つ百代。しかしビッグ・マムは微動だにせず、ただ静かに目を閉じ、佇んでいた。

何かを企んでいるのか。それとも、勝てないと知り戦意を喪失したのか。どの道、百代に止まる理由などない。

どんな策があろうが、全て打ち砕くのみ――――百代に迷いはなかった。

「我が主(しゅ)よ――――」

ビッグ・マムの目が開く。右腕に力を溜め、突進する百代を迎え撃つ。

「――――愚かなる愛し子に哀れみを」

百代との距離が零になる寸前、正拳突きをしゃがんで回避し、ビッグ・マムは百代の腹部に渾身の一撃を放った。

「ごっふ――――!?」

ビッグ・マムの拳が深々と百代の腹にめり込み、衝撃で胃液が逆流する。おそらくこれが、ビッグ・マムの全力だろう。それが身体中に伝わってきた。

だが……百代はニヤリと笑っていた。こうなる事を予測していたかのように。

（……!?拳が抜けない!?）

百代の腹に減り込んだビッグ・マムの拳は、まるで接着剤か何かで

くっつけたように、ビクともしなかった。百代はビッグ・マムを捕縛するため、この攻撃を意図的に受けたのである。

「これで終わりだ！！」

百代から発する膨大な気のエネルギーが、ビッグ・マムの拳を通して伝わる。エネルギー量は次第に膨れ上がり、百代の身体が異常な熱を帯び始める。そして、

「川神流奥義・人間爆弾――――――！」

百代の周囲に大爆発が起こり、ビッグ・マムもろとも巻き込んだ。爆風で砂嵐が巻き起こり、ギャラリーが砂が入らないよう目を腕で隠し、後退っていく。

――――やがて爆風は収まり、砂埃から二人の影が飛び出してきた。百代とビッグ・マムである。二人は距離を取って着地し、体制を立て直した。

百代は自身を爆発させた事によりダメージを受けたが、瞬間回復により完治している。

一方のビッグ・マムは爆発による傷を負っていたものの、戦闘に支

障はなかった。しかし、その差は歴然。百代は無傷であり、ビッグ・マムが圧倒的に不利なのは明らかだった。

「この攻撃を受けてまだ立っていられるとはな……驚いた」

「見くびるんじゃないよ。あれくらいの爆発じゃ、アタシには響かない」

「ふっ、そうこなくてはな」

何かが満たされていくのを感じる。ビッグ・マムは今まで百代が出会った中で、最強の戦士であろう。ここまで渡り合える人間はそうはいない。

「さあ、戦闘再開と行こう――ビッグ・マム!!」

百代は再び構えた。だが、ビッグ・マムは構えず、腕を組んで百代を見つめていた。その目に闘志は宿っていない。

そして、ビッグ・マムは静かにこう答えた。

「いや――――もう詰みだ」

詰み――つまり、勝敗は決したという事だろう。その言葉を聞いたギャラリーがざわめき始める。

それは、ビッグ・マムが負けを認めたと解釈すべきだろうか。状況からすれば、そうとしか考えられないだろう。当然百代は納得するはずがなく、ビッグ・マムに問う。

「……それはどういう意味だ？」

「自分の身体によく聞いてみるといい」

「身体……？　一体何を言って――うぐっ！？」

突然、百代は自分の腹を抑え込み、地面に崩れ落ちて膝をつく。身体中から汗を噴き出し、千切れそうなくらい強烈な痛みが百代を襲った。

百代はあまりの痛みに耐えきれず、とうとう地面に倒れて蹲くまってしまう。

そして身体からみるみる傷口が開き始めていた。一体何が起きたの

か、百代は理解できずにいる。

百代が地に伏している……ギャラリーや大和たちは目の前で起きている事が信じられず、ただ呆然と見ている事しかできなかった。

「く……あ、どうなって……」

「決まってるだろう。お前は文字通り“自爆”したのさ」

ビッグ・マムは眈々と告げる。

「じ、ばくだと？……でも、私は」

人間爆弾を使用した際、瞬間回復で傷は完治したはずだった。自爆など、断じてあり得るはずがない。もしあるとするなら、瞬間回復が使えなくなったとしか考えられない。

だが、それこそあり得ない。瞬間回復を潰せる術など、ましてや初見の相手ができる技ではないのだから。

「何を、した……」

「お前の考えている通りだ。瞬間回復を潰したんだよ」

百代の考えている事を見透かすように、ビッグ・マムは答えた。

「なんだ、と……どうやって」

「お前の体内に流れる気のエネルギーの起点に、直接勁（けい）を打ち込んだのさ。これでしばらく瞬間回復は使えまい」

勁とは、中国武術における力の発し方の技術である。主に発勁と呼ばれ、ビッグ・マムはそれを応用した形で百代の起点に打ち込み、気の流れを一時的に止め、瞬間回復を封じたのだ。

百代が突進し、ビッグ・マムの攻撃を受けたあの瞬間である。

たった一度手を合わせただけで、ビッグ・マムは戦いの最中で百代の身体に流れる気を察知し、起点を見つけだしていた。

「瞬間回復に頼りすぎたね……それがお前の敗因だ」

純粋な力という面では、ビッグ・マムは百代より下回るだろう。し

かし、知略と戦術はビッグ・マムが遥かに上回っていた。

「負ける、だと……この私が」

敗北という文字が、百代の心を苛立たせる。それは武神としてのプライドが許せなかった。百代は傷でボロボロになった身体を無理やり起こし、立ち上がる。

「ほう。その身体でまだ戦うつもりかい？」

「あ……たりまえだ。まだ、私は戦え……うぐっ！？」

身体に痛みが走り、再び地面に崩れ落ちる百代。四肢が悲鳴を上げ、もはや動かす事すらままならなくなっていた。

「人間の身体の傷は、普通は完治までに時間がかかるものだ。瞬間回復がない今、お前の身体は人並みだ。当然、他の傷口も開くってもんさね」

アタシがなんの考えもなしに攻撃をしていたと思っていたのかと、ビッグ・マムは悟る。百代との戦闘でも常に先を読み、こうなる事を予測して四肢に攻撃を入れていた。

百代は瞬間回復という絶対の能力を持つが故に、それが同時に弱点でもある事を思い知らされた。完全に、ビッグ・マムの手中であることに気づけなかった。

「……モモ、もう決着はついた。お前の負けじゃ」

戦いを見ていた鉄心が、百代に諭す。瞬間回復が封じられている今、これ以上誰がみても戦えるような身体ではない。

「まだだ……」

「何？」

「まだだ、じじぃ！！」

敗北を認められない百代は立ち上がり、残っている気力を練り上げる。身体が傷だらけになっても戦いを望む百代の姿は、痛々しかった。

そこまで突き動かしているのは、やはり本能なのか。それとも……

ビッグ・マムはもう一度問う。

「もう一度聞こう。お前は何のために戦う?」

「……何度も同じ事を言わせるな!戦いたいから、戦う、ただそれだけだ!」

百代は叫び、残る力を振り絞ってビッグ・マムに攻撃を仕掛ける。だが、最初の時よりも勢いはない。スピードも格段に落ちている。言うならば、単なる悪足掻きだった。

ビッグ・マムは難なく攻撃を避け、カウンターで蹴りを百代の身体に打ち込む。

「あ……がっ!?」

吹き飛ばされ、地面を転がっていく百代。だが、それでも立ち上がろうとするそれは、もはや修羅であった。

「はっきり言わせてもらおう。川神百代、お前は武神失格だ」

「なん……だと?」

地面に這いつくばるようにしながら、百代はビッグ・マムを睨み付ける。

「戦いたいから戦うだって?笑わせるんじゃないよ小娘が。それはもはや狂気でしかない。そんなものは理由がないのと同じだ。お前は戦う時点で、既に心が負けているんだよ」

力と精神は、常に等しくなければならない。どちらかが欠ければバランスが崩れ、綻びが生まれてしまう。戦いに執着し、自分の心を制御しきれない百代はまさしくそれだった。

「心が……負けている……」

打ちひしがれ、地面に視線を落とす百代。百代の瞳から、次第に戦意が失われていく。自分の色が、敗北の色に染まるのが分かる。

ああ、自分は負けたのだとはっきりと理解した。悔しさで叫んでしまいたかった。認めたくはない、しかしそれが現実であった。

百代が戦意喪失したと認識した鉄心はゆっくりと右腕を上げ、勝者の名を高らかに宣言する。

「勝者――ビッグ・マム!」

戦いに勝ったのは、ビッグ・マムであった。しかし校庭で見物していたギャラリーに歓声はなく、あるのはただ静寂のみ。

勝利するのは百代であろう……誰もがそう思っていたが、結果は予想だにしないものだった。

ビッグ・マムは百代に背を向けて立ち去っていく。去り際に、鉄心がビッグ・マムの元に歩み寄った。

「……世話をかけましたな、ビッグ・マム殿」

「随分と手間がかかってしまいましたがね。あの子が戦う意味を見つけられない限り、立ち直る事はないでしょう」

後は、百代次第ですとビッグ・マム。ちょうど一時限目の授業が終わるチャイムがなる頃合いになり、ビッグ・マムは２－Ｆの生徒達に教室に戻るよう号令をかける。

そんな中、大和たち風間ファミリーは傷ついて倒れた百代に駆け寄っていた。

「姉さん！」

「お姉さま！！」

大和やワン子たちが心配して声をかけるも、今の百代には届かない。

百代は、これまでにない敗北を味わっていた。

“自分”という名の、敗北に。

「くそ……負けた。私は……私は……くそおおおおおおおおおおおおお！！！」

校庭中に、百代の悲痛な叫びが響き渡っていた。

## 7話　最凶と最強（後書き）

百代ファンの皆様、ごめんなさい。こういう結末にしちゃいました。
ここからは百代の葛藤と成長を描いていきます。
そしてその後は、ようやくアデプト勢力と謎の元素回路が関わってきます。ご覧になっている方々、ぜひぜひご期待下さい！
ちなみにそれまではサーシャ達の出番が……ｏｒｚ

## 8話　失ったもの

川神百代が敗北した……その噂は、学園中に知れ渡った。

ビッグ・マムとの決闘後、百代は救護班に運ばれた。現在は保健室で眠り、傷が癒えるのを静かに待っている。

勁を打ち込まれ、封じられた瞬間回復も徐々に機能し始め、戦いの傷跡も完治しつつあった。

ただ、心に受けた傷跡は未だに消える事なく、今も百代を戒め続けている。

『――――お前は戦う時点で、既に心が負けているんだよ』

ビッグ・マムに言われたあの言葉が、百代の頭の中で繰り返し再生される。心の弱さ……百代は薄々とは気づいていた。

だが、こうして向き合わなければならない日が来ようとは思わず、どうしたらいいか答えを出せずにいるのだった。

（戦いの……理由……）

今まで考えた事もなかった自分が戦う“意味”を、天井を仰ぎながら自分自身に問う。当然、答えは返ってこなかった。

戦いたいから戦う。ただ本能のままに戦い続けてきた百代。それは理由にならないと否定され、始めて自分の戦いの在り方を再認識する。

やはり、それでも答えは出ない。考える度に、まるで出口のない迷路に迷い込んだように、百代の思考は深い溝へと落ちていくのだった。

「――目、覚めたみたいだね」

ベッドの周囲を覆っていたカーテンが開き、女性――ここの保険医であろう人物が顔を出す。

「貴方は……？」

「アタシは及川麗（うらら）。聖ミハイロフ学園から臨時で赴任した保険医だ。よろしく」

グラマーな身体に、私服の上に白衣を着込んだ女性の名前は、及川麗。聖ミハイロフ学園の保険医で、川神院で出会ったユーリと同様、サーシャ達の保護者的存在である。

「私は、いつからここで？」

「ざっと3時間ってとこ。それにしても随分と怪我の回復が早いじゃない。若いっていいわね」

そう言って、麗は部屋の窓を開ける。ポケットからライターとタバコを取り出し、外を眺めながら喫煙を始めた。

「――――――あ」

百代はふと、ベッドの横に飾ってある花に視線がいく。花だけではない、お菓子や手紙が沢山置かれている。

「あんたが寝てる間に、ファンの子達が来て置いていったよ」

モテモテだね、と麗は笑う。百代を心配したファンの生徒達がお見舞いに来てくれていた。

純粋に嬉しいと感じた百代だったが、今の心境ではあまり喜べなかった。喜べないというよりは、どこか虚ろで、何も感じないという方が正しい。

……しばらくして、保健室の扉が開く音が聞こえ、生徒達数人が入ってきた。

「お、本命が来たか」

麗はタバコをやめて、彼らを出迎える。

やってきたのは大和、キャップ、モロに岳人。ワン子、京。そしてクリスとまゆっち。

いつもの風間ファミリーのメンツだった。

「姉さん、具合はどう？それと、これ差し入れ」

大和はお土産の入った袋を百代に渡す。中に入っていたのは、百代の好物の桃だった。

「ふ……さすが私の舎弟だ。気が利いてるな」

嬉しそうに受け取って笑う百代だったが、どこか活力を感じなかった。

まるで何かが抜けてしまったように、百代としての存在感が欠けているように感じる。

「凄かったよ、モモ先輩。あんな戦い始めて見たよ」

モロは負けた事はあえて言わず、当たり障りのない話題を振る。しかし百代は気を遣われていると察したのか、思わず苦笑いした。

「わざわざ気遣う必要はないぞモロ。私は負けたんだ、はっきりとそう言ってくれたほうがいい」

「あ、いや。僕は……」

口籠ってしまい、狼狽えてしまうモロ。気まずい空気が流れ始める。すると、ここぞと言わんばかりにキャップがフォローを入れた。

「モモ先輩らしくないぜ？一回や二回負けたくらいで、そんなくよくよすんなって」

「……そうか。そうだったな……」

素っ気のない返事で返す百代。キャップなりに励ましてくれているのだろう。百代は気持ちは嬉しく思ったが、だが、それでも気持ちは晴れない。

負けた事に関してはあまり気にはしていなかった。ただ、ビッグ・マムに言われた言葉がどうしても心にしこりを残している。

「モモ先輩。ど、どうか気を落とさずに……」

『そうだー、まだまだ人生これからだぜー』

まゆっちと松風も元気を出すように声をかけてくれている。クリスやガクト、京も気持ちは同じだった。

しかし、今の百代には耳から耳へと抜けていくだけ。どんな励ましの言葉も響かない。

「た、確かに負けたけど、それでもお姉さまはすごいわ！アタシなんか手も足も出なかったし……」

ワン子は百代を賞賛するが、その顔には影が射していた。やはり、百代が負けてしまった事がショックなのだろう。

自分の目指すべき人が敗れてしまった……それでもワン子は姉であり、目標である百代が好きだった。その気持ちが、痛いほど大和達に伝わる。

「はっはっは、ワン子は可愛いな。さすが自慢の妹だ」

そう言って百代は窓の外を眺め始める。そんな百代の表情には覇気がなく、例えるなら魂の抜けた人形のように、虚無に沈んでいた。

「なあ……みんな」

ぼそっと百代が大和達に呟く。視線を向けず、窓の外をひたすら眺めながら。

「私は今まで……なんのために戦っていたんだろうな」

その百代らしからぬ台詞に、大和達は言葉を失った。何て答えればいいのか……もう返す言葉もない。

すると、大和達の様子が気になった麗が顔を出す。

「もう少しで授業の時間だ。お前たちもそろそろ教室に戻れ」

次の授業の時間まで後数分。大和達は仕方なく保健室を後にすることにした。

「じゃあ姉さん……また来るから」

大和達は百代に手を振ると、それぞれの教室にへ戻っていく。百代はその後ろ姿を、声もかけずに見送っている。

「……さて、百代ちゃんはこれからどうする？身体の方はだいぶ良くなったし、授業には出れると思うけど、まだここにいる？」

再び喫煙を始め、麗は壁に寄りかかりながら百代に尋ねる。

次の授業はなんだったかと、思考を巡らせる百代。しかし、こんな気持ちでは授業に身が入らないだろう。状態はどうあれ、どの道勉強する気が起きないのは変わらない。

「もう少し、休みます」

「そう、分かった。ま、気の済むまでココにいなさい」

そう言って麗はカーテンを閉めると、自分の机へと戻っていった。

（……）

身体を倒し、天井を見上げる百代。自分の中の答えを探すように、ただ天井を眺めている。

未だに心は晴れない。百代はしばらく、自分に問い続けていた。

――自分が戦い続ける本当の理由、そしてその意味を。

## 8話　失ったもの（後書き）

少し短いですが、8話終了です。そして、クェイサーキャラの及川麗が初登場しました。
しばらくサブエピソードがないので、9話連続で続けたいと思います。

# 9話　葛藤

百代とビッグ・マムとの決闘から数日後。

大和達（キャップとワン子を除いて）風間ファミリー一行は、多馬川が緩やかに流れる土手を歩きながら、学園へと向かっていた。

ちなみにキャップは朝から急に京都へ行くと言い出して、そのまま外出。

ワン子は早朝から走り込みのため、多馬大橋の辺りで合流するとの事である。

「はぁ……昨日もまたフられちまったぜ」

「ガクトも懲りないよね……」

前日に駅でナンパに失敗し、肩を落としながら歩くガクト。モロはその隣で苦笑いしている。

「今日こそカーチャさんに話しかけて、お友達になります！」

『頑張れまゆっち。お前ならできる』

「っていうか、転校してきてから随分経ってるよね」

「京。それは言わないでおこう」

今日の意気込みを胸に、松風と会話をして歩くまゆっち。そんなまゆっちを、京とクリスは遠目で見守るのだった。

一方、大和と百代はというと。

「キャップ、今度は京都だってさ。姉さんはお土産何がいい？今のうちに決めてメールしておくよ」

京都に出かけたキャップにお土産を頼もうと、携帯をいじってメールを送る準備をする大和。

「――――――」

百代は聞こえていないのか、反応がない。ただぼーっと空を眺めて、見ての通り上の空であった。意識が完全にどこかへ飛んでしまって

いる。

「姉さん、聞いてる？」

大和は声を少し張り上げ、百代に呼びかけた。すると百代はようやく気づき、大和の方へ視線を戻す。

「……ああ。すまん、大和。えっと……なんだっけか」

「だからさ、キャップの京都土産、何がいい？」

もう一度大和は説明をする。百代なら“舞妓さんのねーちゃんを土産にもってこい！”と無謀な注文をするに違いない。しかも冗談ではなく本気で。

しかし、返ってきた百代の返答は素っ気ないものだった。

「……特にないな。別に何でもいい」

「あ……そう」

大和は頷くことしかできなかった。会話が途切れて、気まずい空気が流れる。いくらコミュニケーションの高い大和でも、流石に百代がこの調子ではとても絡み辛かった。

――しばらく歩いていると、多くの女子生徒達が百代に向かって走ってきた。百代のファンの生徒達である。

「モモ先輩！今日は私を、お姫様だっこしてください！」

「ダメよ、今日は私なんだから！」

「いやいや、今日こそ私が！」

寄ってたかり、百代に要求をせまる女子生徒達。

百代は気に入った女子を抱き上げてはファンを増やし、男子が羨望（特にガクト）するようなシチュエーションを吟味するという……これもいつもの日常風景だ。

だが百代の表情は無気力で、あまり気乗りするようには見えなかった。

「……悪いな、また今度にしてくれ。今はそんな気分じゃないんだ」

言って、百代は前へと歩き出した。女子生徒達が道を開けて、悲しそうに視線を向けながら、百代の後ろ姿を見送っていた。

そんな百代の様子を、大和達も心配していた。ビッグ・マムと戦ってからずっとあの調子で、何をするにも無気力になっている。

（どうしちゃったんだよ、姉さん……）

やはり、ビッグ・マムに負けてしまった事が相当答えているのだろうか……と大和は思う。

無敗の記録が破られ、ついに完敗してしまった百代。だが、それなら百代は自分を負かした強敵が現れたと喜び、今まで以上に闘争心を燃やすはずだ。

それなのに、今の百代にはそれがない。武神としての魂が消えてしまっている。どうしてそうなってしまったのか……大和達には理由が未だに分からずにいた。

多馬大橋に差し掛かり、大和達はワン子と合流する。ワン子はタイヤの付いたロープを身体に巻き付け、それを引きずりながら走ってきた。

「はぁ、はぁ……みんな、おはよー！」

だいぶ走ってきたのだろう、身体中汗だらけだった。が、それでも疲れている様子がないのはワン子が元気な証拠である。

「相変わらず元気だよなー、ワン子は」

ガクトもワン子の活力には感心せずにいられない。ワン子はえっへんと胸を張り、鼻息を鳴らす。

「これくらい余裕だわ！どんどん鍛えて、お姉さまみたいに強くなるの。ね、お姉さま！」

百代に声をかけるワン子だったが、百代は心ここにあらずと言った感じで、ワン子が声をかけられたのことに気づいたのは数秒経ってからだった。

「ん……おお、そうか。頑張れよ、ワン子」

百代の気のない返事が返ってきて、ワン子も調子が狂っていた。いつもなら頭を撫でて褒めてくれるのだが、百代は何もせず、ただ力なく笑うだけだった。

大和達も百代の調子にすっかりお手上げ状態で、何を言ってもこんな感じだという。

（お姉さま……）

虚ろで、まるでガラスのような魂の宿らない百代の瞳。ワン子の目にはそう見えていた。

「――――――」

百代は再び空を仰いだ。この空のどこかにある、答えを探し求めるように。

百代の心にある迷いは、未だ消えずにいる。

授業の内容も頭に入らないまま（元々する気はないが）時間が過ぎ

去り、気が付けば下校の時間になっていた。

特にする事もない百代は一足先に川神院へと戻り、自分の部屋へと続く廊下を歩く。すると、

「――――まだ迷っているのか？」

背後から突然声を掛けられる。振り返ると、そこにはサーシャの姿があった。サーシャは腕を組み、壁に寄りかかっている。

「迷ってる……か。きっと、そうなのかもな」

「……そうか」

サーシャはそれ以上何も言わなかった。百代は用がないと分かると、再び自分の部屋へと歩き出す。

――――が、ふと足を止め、百代は再び振り返った。

「……なあ、サーシャ。聞きたい事がある」

「なんだ？」

「お前は……何のために戦う？」

もしかしたら、自分の探し求める答えのヒントになるかもしれない。だから、百代はサーシャに聞き出そうとしていた。戦う理由を。

するとサーシャはその翠色の瞳で、百代を睨み付けた。

「俺に聞いてもお前の探している答えは見つからない。知りたければ、自分で探せ」

サーシャの返答は、とても厳しいものだった。完全に見透かされている……だが道理である。他人に聞いたところで、理由は人それぞれだ。当然答えを得る事はできない。

「そう、だよな……悪い、変な事を聞いた」

「……」

サーシャは無言のまま百代に背を向けて歩きだすが、途中で足を止めて百代に振り返った。

「百代。お前の心は、震えているか？」

「え……？」

「お前の心が震えたなら……その答えは見つかるだろう」

意味深な言葉を残し、サーシャは遠ざかっていく。

（私の、心……）

自分の胸に手を当てる百代。自分の心臓の鼓動が、手を通して伝わってくる。だが、それ以外は何も感じ取れない。

何もかもが、空っぽに思えた。

「はは……震えてないな、全然」

百代は思わず自嘲する。魂の鼓動が、戦いの本能が、何もかもが失われているように感じる。

もうこれ以上何を求めても無駄という事なのか。それともまだ希望はあるのだろうか。

（それなら、答えは……）

今導き出せる答えは、一つしかない。百代は心の中で決意した。自らのけじめをつけるために。

そして、新たな自分として生まれ変わるために。

## 9話　葛藤（後書き）

区切りがいいので、また短い話になってしまいました。読んでくださっている方も、これくらいがちょうどいいのでしょうかね……。

## サブエピソード9「ワン子とビッグ・マム」

夕日が登り始め、空が茜色に染まる下校の時間。

生徒達が帰宅し、校門を出てそれぞれの家へと帰っていく。

その中には百代の姿もあった。一人で帰り歩く百代の後ろ姿は、どこか寂しげだった。

そんな百代を、学園の屋上から見下ろしている人物が一人。

臨時講師――ビッグ・マムだった。

「さて、どうしたもんかね」

独り言のように、ビッグ・マムは呟く。

百代と対決してからもう数日が経つ。あの日以来、百代の様子を観察していたビッグ・マムだったが、依然と百代に変化はなく、無気力というより諦めに近いものを感じる。

やはり、答えはまだ見つけられていないようだった。

「……」

腕を組み、目を閉じて考えに耽る。このまま百代が何も変わらなければそれまで……と、鉄心には宣告している。

手助けをするつもりはない。これは百代自身が乗り越えなければ意味がないのだから。

（もう少し、様子を見るか）

変わって欲しいと思う気持ちは、ビッグ・マムも同じ思いだった。

彼女には、気持ちの整理をするしばしの時間が必要なのかもしれない。ビッグ・マムは大きく空気を吸い込み、そして静かに息を吐くのだった。

「――――そこにいるのはわかっている」

屋上の入り口に背を向けたまま、ビッグ・マムは声を上げる。まるで、後ろに誰かいると知っているかのように。

「隠れているつもりだろうが、アタシにはバレバレだよ。さっさと出てきな……川神一子」

「……」

屋上の扉がゆっくりと開く。現れたのは気まずそうな表情を浮かべたワン子だった。

ワン子はビッグ・マムに近づくと、早速話を切り出す。

「ビッグ・マム講師。相談があります」

ワン子の目は真剣であった。ビッグ・マムはすぐに、百代の事についてであると理解する。

「川神百代のことだろう？」

振り返る事なく答えるビッグ・マム。ワン子は頷いて、今の百代の様子について話し始めた。

「はい。講師と決闘してから、ずっとあの調子なんです。なんていうか、いつも何かを求めているみたいで……だから、アタシに何かできる事があれば――」

「ほう。それで、アタシのところに相談に来たってわけかい」

ようやくビッグ・マムはワン子の方へと振り返る。だがその表情は厳しく、ワン子を射抜くように視線を向ける。

「ダメだ。手を出す事は許さない」

「え……ど、どうして!?」

「これはあの子の問題だ。あの子が一人で乗り越えなければ、成長にならないからだよ」

ビッグ・マムの厳しい言葉に、そんな……と小さく声を漏らすワン子。

しかし、自分の大切な姉であり、目標である百代のためだ……ここで引き下がる訳にはいかない。ワン子はビッグ・マムに食い下がった。

「アタシは、それでもお姉さまの力になりたい」

「お前の姉を思う気持ちは分かる。だがね、そっとしておくのも一つの思いやりだよ。分かるね？」

時にはそっと見守る事も大切だとワン子に諭した。しかし、ワン子は納得のいかないような表情でビッグ・マムを見つめている。

「ふむ……」

ビッグ・マムは腕を組み、ワン子をしばらく凝視する。すると突然右手を伸ばし、ワン子の右胸を鷲掴みにした。

「ひゃうっ！？」

いきなり胸を揉まれ、思わず身体をビクッと震わせるワン子。ビッグ・マムは、じっくりと揉みほぐしてはうんうんと頷いて、何かを感じ取っているようだった。

散々揉み倒し、満足げに頷いたビッグ・マムはようやく手を離す。ワン子は突然の出来事にあわわわわと声を上げ、ぶるぶると胸を隠すようにして震えている。

「なるほどねぇ……そういうことか」

ワン子の胸を触った手を見ながら、ビッグ・マムはワン子の中にある本質を見抜いていた。

ビッグ・マムの異名である、“地獄の乳揉み師”……そう呼ばれるだけあって、女性の本質が分かるその腕は本物である。

「お前は本当に姉思いのいい妹だ、感心するよ」

ビッグ・マムはワン子を賞賛した。しかし次の言葉に、ワン子は驚愕する事になる。

「だが、あの子を心配しているその裏で、自分の目標が失われる事を恐れている……違うかい？」

「――――――！」

薄々と感じていた本心を……認めたくなかった自分の本心を見抜かれてしまい、ワン子は声も出せなかった。

百代は自分の目標である。ここで百代が答えを見つけられないまま“終わって”しまえば、自分の目指すべき目標が失われる……それがワン子にとって、何よりも恐怖だった。

「あ、アタシは……」

何も言い返せず、拳を握りしめ、地面に視線を落とすワン子。

その瞳には、本心に気付かされてしまった恐怖と悔しさで震え、今にも泣き出してしまいそうだった。

ビッグ・マムはそんなワン子の様子に同情する事なく、さらに残酷な一言を口にする。

「川神一子。はっきりと言わせてもらうよ、お前には武術の才能は……殆ど皆無だ」

初めてワン子達と手を合わせたあの時に、ビッグ・マムは感じていた。

彼女は努力の天才ではあるが、百代や鉄心のような並外れた武術の才能は殆どない。

それを諭す事で、百代に対する思いがどれ程のものか、見極めようとしていた。ビッグ・マムはさらに続ける。

「お前が目標にしているものは、水に写った月を掴み取るようなものだ。少なくとも、アタシから見ればお前の今持つ才能が開花する可能性は、ほぼゼロに等しい」

ワン子が目指す目標――――いくら努力をしても、届かない領域がある。百代に執着して助けになったとしても、いずれはワン子が傷つくだけである。

「それでもお前は……お前の目標である川神百代の力になると言い切れるのかい？」

ビッグ・マムは問う。ワン子が失う事を恐れる、川神百代という目標を。届かないと分かっていてもなお力になるか……その覚悟を。

だが、ワン子に迷いなどなかった。たとえ力になれなかったとしても、その目標が叶わぬ夢だとしても。そしてその結果、自分が傷つく事になろうとも。

ワン子の答えは、一つだった。

「アタシはそれでも……お姉さまを助けてあげたい！」

ワン子は再びビッグ・マムを見る。真剣で、覚悟のあるその眼差しは本物であった。

（ふっ……この子は）

ビッグ・マムは心の中で微笑む。ワン子の気持ちを揺さぶったつもりだったが、最初から答えは決まっていたらしい。それなら、わざわざ自分の所へ来る必要はないだろうに。

もしかしたら、ワン子も百代と同じように、確かな“答え”が欲しかったのかもしれない。

「そうか。お前がそこまで言うなら、好きなようにするといい。アタシは止めないよ」

背を向け、さっさと百代の所へ行きなとビッグ・マム。その言葉に、ワン子は思わず涙した。

「はい……ありがとうございました！」

流した涙を拭い去り、深く礼をすると、ワン子は屋上の扉に向かって走り出した。その様子を、ビッグ・マムはただ静かに見送っている。

（川神百代……いい義妹を持ったじゃないか）

ここまで思ってくれている人間がいる……幸せ者だと、ビッグ・マムは思った。きっと、彼女なら百代を変えてくれるきっかけになるかもしれない。

（しかし、妙だねぇ……）

本人には言わなかったが、ワン子の胸を揉んだ時、ビッグ・マムはほんの僅かに妙な違和感を感じ取っていた。

ワン子の中に表現できないような、ただならぬ“何か”を。

## サブエピソード9「ワン子とビッグ・マム」（後書き）

久々のサブエピソードです。時間軸は9話の中間くらいですね。
更新速度はまちまちですが、頑張って執筆致します。
ってか、カーチャ様がマジで空気だ……orz

# １０話　百代の決意（前編）

大和達の住む、川神市の一角。

多馬川の付近にある廃ビルの中に、風間ファミリーの秘密基地はある。

場所は５階。中は綺麗に掃除され、私物を持ち込んで、もはや一つの部屋と化していた。

大和達はこの基地を使い、毎週金曜日に”集会”を行っている。

大和、モロ、ガクト、ワン子にまゆっち、京と百代はいつものように集まり、お菓子やジュースを飲みながら他愛の無い雑談に花を咲かせていた。

リーダーであるキャップはまだ京都から帰ってきておらず、未だに連絡はない。時間を忘れ、京都を満喫しているのだろう。

「うぅ……今日もカーチャさんに話しかけられませんでした」

『挫けんな、まゆっち。まだ明日がある』

ソファに座り、がっくりと肩を落としているのはまゆっち。そしてそれを慰める松風。

今日もカーチャと友達になるため話しかけようと勇気を以って挑んだが、その寸前で親衛隊に割り込まれて失敗。結局友達どころか、話しかけることすらできていない。

「運が悪いというか、不器用というか……しょーもない。ちなみに明日は学校休みだから」

京もほとほと呆れている様子。しかしちゃんと突っ込みを入れていた。

「今度の日曜日、まふゆたちが寮に来てくれるそうだ。ああ、日曜が待ち遠しい！」

クリスは嬉しそうに顔を綻ばせていた。いつかまふゆと手合わせをする……その日程が決まり、サーシャ、華と共に島津寮へやってくるらしい。

ついでに言うと、マルギッテも付き添いでクリスの側にいるのだとか。

「慌ただしい日曜になりそうだな……」

折角の日曜だから、飼っているヤドカリを観察しながらまったり過ごそう……そう考えていた大和だったが、早速その予定はなくなってしまうのだった。

モロはガクトのナンパ失敗談をうんうんと頷きながら聞いている。皆それぞれ会話を楽しんでいる。

「――――――」

一方の百代はその光景を眺めながら、いつ話題を切り出そうかを考えていた。

ビッグ・マムとの戦いで自分が導き出した、一つの答え。考えて、考え抜いて、辿り着いた百代の答え。

それが正しいかどうかは正直言って分からない。ただ、自分のけじめをつけるには十分な回答であると理解していた。

きっとみんな分かってくれるだろう……百代の表情は、以前より晴

れやかではあった。

その隣で、ワン子は百代の様子を暖かく見守っている。

（お姉さま……答え、見つけたんだね）

今まで活力のない百代を見るのは、正直辛かった。それでもワン子は百代に付き添い、稽古や組み手をして、少しでも力になれるように勤め続けていた。

それが実ったのか、それとも百代自身が乗り越えたのか。どんな結果であれ、ワン子にとっては喜ばしい事であった。

（――――よし）

しばらくして、百代はゆっくりと立ち上がる。自分の導き出した決意を大和達に伝えるために。

「……みんな、聞いてくれ」

百代の一声に、大和達が反応して百代を一斉に見る。百代はひと呼吸おいてから話し始めた。

「ビッグ・マムとの決闘から、ずっと色々考えていた。私の何がいけなかったのか、私の……何が足りなかったのか」

百代の話を、大和達は静かに聞いている。自分の答えを待ってくれている、百代は嬉しく思った。

「それをふまえて……私は自分にけじめをつけようと思う。私は――――」

百代はすっと静かに息を吸い、自分の決意を大和達に告げる。

「戦いを……武神を、引退しようと思う」

それが、百代の出した答えであった。

百代は考えた末に、自分の中で結論を出す事ができなかったのだ。

戦う意味がなければ、戦えない。戦う理由がなければ、拳は震えない。戦いそのものに意味を出さずに戦い続けていた自分に対する罰であると、百代は自粛するという選択を選んだ。

当然迷いはある。だが、今の自分にはこれしかない。

大和達は百代の決意に驚きを隠せず、それに対する返事すら出せずにいた。勿論、側にいたワン子も笑顔が消えている。

全員、百代の答えに納得がいくはずもなかった。

「やめるって……どういうこと、お姉さま？」

今までやってきた自分の行為が裏切られたようで、ワン子は動揺していた。そんなワン子に対し、百代は悲しみの入り混じった笑顔でワン子の頭を優しく撫でる。

「ごめんな、ワン子。私を元気付けようとしてくれたのは、すごく嬉しかった。でも……もう決めた事なんだ」

今更答えは変えられないと、百代は諭す。ワン子はショックのあまり、声も出せなかった。ただ悲しそうに目を見開いている。

「ちょっと待ってくれよ、姉さん！」

次に声を張り上げるように出したのは大和だった。百代の決意に納得がいかず、怒りを露わにしながら百代に反論する。

「戦いをやめるって……やっぱり、ビッグ・マム講師に負けたからか！？一度負けたくらいで――――」

「違うんだ、大和。負けたとか……そういうのじゃないんだ。私には――――――戦う理由が、見つからなかったんだ」

分かってくれ、と百代はまた悲しそうに笑う。大和はそんな百代の態度に苛立ちを感じ始めた。

「だから戦いをやめるってのかよ！？そんなのおかしいだろ！？」

大和はバンッとテーブルに手を叩きつけ、百代を責め立てる。すると、黙っていたモロやガクトも反論を始めた。

「大和の言う通りだぜ。モモ先輩らしくもねぇ」

「そうだよ。考え直す事はできないの！？」

モロとガクトの説得も虚しく、百代は首を横に振るだけだった。

「自分も納得がいかない！詳しく説明してくれ、モモ先輩」

「私もそう思う。いくらなんでも安易すぎるよ」

「わ、私もです。何があったかは知りませんが、どうか考え直してください」

クリス、京、まゆっちも百代の説得を試みた。

きっと分かってくれると……そう思っていた百代の表情も次第に影が差し、受け入れてくれない悲しみが怒りに変わる。

「何が……分かる」

怒りでわなわなと身体を震わせながら、百代は大和達全員を睨み付けた。

「お前たちに……私の何が分かる！！！？」

怒号のような百代の叫びが、部屋全体に静寂を呼ぶ。

百代の苦しみは、百代にしか分からない。大和達は何も言い返せず、ただ黙っている事しかできずにいる。こんな百代を見たのは……初めてだった。

気まずい空気が漂う。怒鳴り散らした百代は我に返り、表情が悲しみに消えていく。

「……すまない、怒鳴るつもりはなかった。外で頭を冷やしてくる」

冷静になり、謝罪した百代は屋上へ行こうと部屋を後にする。それは頭を冷やすという名目の、逃避だった。今は自分はいない方がいい、空気が淀んでしまうと判断し、立ち去っていく。

「待って、お姉さま！」

と、百代に立ちはだかったのはワン子だった。ワン子は真剣な眼差しで百代を見る。

「お願い、考え直して！アタシ、アタシ……何でもするから！」

涙を流し、百代を説得しようとするワン子。

目標が消えてしまうという恐怖と、自分の知っている百代がいなくなってしまうという恐怖が入り乱れ、ワン子の思考がぐちゃぐちゃになる。

それでも、ワン子は百代が好きだから……どうしても諦められなかった。

「本当にごめんなワン子。出来の悪い姉を――――許してくれ」

百代はそう言って、ワン子を横切ろうとする。ワン子は何も言ってはこなかった。さすがに諦めたのか……本当に悪い事をしたと、百代は自分を責め立てる。

それでも、自分が選んだ道を引き返す事はできない。これは自分自身への贖罪なのだから。

――――だがその時、百代に予想だにしない出来事が起こった。

「――――――――――!?」

百代の頬に何ががあたり、勢いで身体が吹き飛びソファに叩きつけ

られる。百代は何が起きたのか分からず、目を見開いていた。

それは、大和達も同じである。全員が口を開け、あり得ない光景に動揺を隠せずにいた。

何故なら……ワン子が百代を、自分の拳で殴りつけていたのだから。

ワン子は身体をぶるぶると震わせながら視線を落とし、ゆっくりと口を開く。

「よく分かったわ。もう、お姉さまは……アタシの知ってるお姉さまはもう……いないんだって」

ワン子の涙がぽたぽたと床に垂れ、カーペットに染み込んでいく。そして、ワン子はいつもの元気な表情とは違った……怒りと悲しみに満ちた表情で百代を睨み付けた。

「今、アタシの前にいるのは……自分から逃げた、ただの腰抜けよ！！」

本気で怒りを露わにするワン子の姿を見るのは、大和達にとって複雑だった。大和はワン子を宥めようと声をかけようとするが、ワン子には有無を言わせないオーラが漂っている。

「何が最強よ！何が武神よ！こんな……こんな腰抜けがアタシの目標だったなんて……ホント、どうかしてたわ」

自分から湧き上がる感情が、まるで溢れ出るようにワン子の口から吐き出されていく。もう、自分の怒りを鎮める事はできなかった。

「もう……アンタをお姉さまとは呼ばない！アンタみたいな腰抜けは……アタシが、アタシが倒してやるわ！」

ワン子はズカズカと倒れている百代に歩み寄り、胸ぐらを掴んで言い放つ。

「立ちなさいよ川神百代！アタシは……アンタに決闘を申し込む！」

決闘し、百代を倒す。できるはずがないと分かっていても、今のワン子には関係なかった。ワン子の思考は怒りで支配されている。

散々ワン子に罵倒され、流石の百代も黙ってはいられない。百代は胸ぐらを掴んだワン子の手を払いのけ、ソファから立ち上がってワン子を睨みつける。

「……知った風な口を聞くな」

仲の良い姉妹に、亀裂が入った瞬間だった。互いに睨み合い、敵意をむき出しにしている百代とワン子を、止める術はない。

「表へ出ろ」

百代は顎で屋上を指し示す。誰にも予想できなかった、姉妹の対決が始まろうとしていた。

## １０話　百代の決意（前編）（後書き）

また長くなってしまったので、前編と後編にわけました。
次回もぜひぜひお楽しみください。

## 11話　百代の決意（後編）（前書き）

いよいよ百代編終了です。適度に期待しつつご覧になっていただけると幸いです。

# 11話　百代の決意（後編）

廃ビルの屋上で決闘する事になった百代とワン子。

決闘はすぐに始まり、激しい奮闘が繰り広げられていた。

大和達は心配そうに見守るが、その戦いは一方的だった。ワン子は百代に手も足も出ず、ワン子に攻撃させる暇すら与えない。ただ殴られ続けるのみだった。

「く……あ、まだまだ」

怒涛のような連続攻撃を受けてなお、ワン子はボロボロになった身体で立ち上がる。その瞳に戦意は消えず、立ち上がる度に百代を睨みつけた。

百代は、当然無傷である。幾度となく立ち上がり、向かってくるワン子の姿が気に入らなかった。

「もうやめろワン子。お前じゃ私には勝てない」

「……そんなの、やってみないと、分からないわ」

百代の制止の声にワン子は耳を傾けず、身体を引きずるようにしながら百代に突貫する。

だがスピードは明らかに遅く、誰が見ても悪足掻きにしか見えなかった。百代は舌打ちをすると、向かって来たワン子の腹部を殴りつける。

「あ……がっ!?」

身体が勢いよく吹き飛び、ワン子は地面に転がり落ちた。もはや虫の息であり、まともに戦える状態ではない。

それでも、ワン子は自分の身体に鞭を打って立ち上がった。その不屈さが百代を更に苛立たせ、同時に妹に手をあげているという罪悪感が襲う。

「もういい加減にしろ。それ以上は……お前の身体が壊れる」

百代の言葉には、ワン子を気遣う気持ちが込められていた。しかしワン子は百代を凝視したまま、ゆっくりと百代に向かって歩き始める。

まだ、ワン子には戦う意志は消えていなかった。

「くっ……心が壊れたアンタなんかに、情けなんて……かけられたくないわ！」

「この――――――！」

ワン子の言葉に逆上した百代は、ワン子の身体を蹴り上げようと足を構える。

「もうやめろよ二人とも！なんでったって、姉さんとワン子がこんな事しなきゃならないんだよ！？」

二人の決闘に見るに耐えられなくなった大和が叫ぶ。しかし、ワン子は首を横に振った。

止めるな……と目で訴えている。これはただの決闘ではない。真剣な戦いなのだと大和は悟る。

この姉妹の戦いに、誰かが介入する余地はないのだから。

「アンタは……川神百代は、アタシが倒――――」

「――――黙れ！！！」

百代の叫びと共に、正拳突きでワン子を殴り飛ばした。ワン子は地面に再び倒れ伏せてしまう。

百代は静かに、ワン子の側まで歩み寄った。

「この際だ、はっきり言ってやる。ワン子――――――お前には武術の才能がない」

怒りに任せ、百代は本心をワン子に叩きつける。

ワン子のパワー、スピード、技術……人並み以上の能力はあるが、師範代を目指す者としては全てにおいて劣っていた。それは、いくら努力を重ねても超えられない壁。

生まれながら持つ“才能”という名の壁である。ワン子はそれに恵まれなかった。それは仕方のない、変えようのない事実だった。

「……そんなの、自分でも、分かってるわ……」

百代の身体にしがみ付き、縋りつくように立ち上がろうとするワン子。ワン子は、自分には才能がない事を、うすうすと感じていた。

百代のようには、なれないかもしれない。師範代は夢のまた夢かもしれない。

それでも――――――、

「……でも、アンタには才能がある……アタシには、ないものを……たくさん持ってる……！」

ワン子は怒り――――否、表情はいつしか悲しみに染まっていた。貯めていた涙を溢れさせ、百代の顔を見上げながら訴える。

それは怒りでもなければ軽蔑でもない。百代を――――姉を慕う、純粋な妹としての気持ち。

「だから……戦いをやめるなんて言わないでよ。アタシの知ってる、川神百代は……こんな。こんな事じゃ絶対に諦めない！」

あの時百代を殴ったワン子の行動は、単なる失望ではなく、普段の

百代に戻って欲しいというワン子の思いであった。

「答えが見つからないなら……大和達と一緒に探せばいいじゃない。もっと頼ってよ……アンタは……お姉さまは、一人じゃないんだよ？」

「ワン子……」

百代の戦意が徐々に失われていく。そして、ワン子は張り裂けそうな気持ちを百代にぶつけた。

「だから、お願い……！帰って来て、お姉さまあああああ！！！！」

ワン子の嗚咽が夜空に響き、そのまま泣き崩れる。百代はそんなワン子の姿を見下ろし、ただ立ち尽くしていた。

すると、様子を見ていた大和達が百代の元へと歩み寄る。

「……姉さん、一人で悩むなよ。姉さんのためなら、いつでも相談に乗るぜ？」

その為の舎弟だろと、笑う大和。

モロやガクト、クリス、京、まゆっちも頷いた。皆同じファミリーとして、仲間を思う気持ちは何よりも掛け替えのない物。大和達はそれを、百代に改めて教えてくれた。

空虚が支配していた百代の心が、“川神百代”としての心を取り戻していくのが分かる。

今、川神百代の心は確かに“震えて”いた。

「……はは、まったく。お前たちは」

百代は微笑み、泣き崩れるワン子を優しく抱き締める。暖かい、百代の温もりがワン子の身体を通して伝わる。

「お……お姉、さま？」

「ごめんなワン子。おかげで目が覚めた」

自分の為に、身体を張ってくれたワン子。そんなワン子が愛おしく感じた。

「うぅ……お姉さま、よかった……ふえぇ……」

自分の知っている百代に戻ったと感じたワン子は、嬉しさのあまりに泣き始め、百代の身体に顔をうずめる。微笑ましい、姉妹が仲直りした瞬間だった。

百代は大切な仲間――大和達の方へと向き直る。

「みんなにも迷惑をかけたな。私は、もう大丈夫だ」

百代の求めている答えは、未だ見つからない。今はまだ見つからなくとも、これから仲間達とゆっくり探せばいい。仲間達と歩いて行けばいい。百代は戦っている内に、大切なものを忘れかけていた。

「――おーいみんな、今帰ったぜ！」

聞き覚えのある声。屋上の扉が開き、キャップが京都から帰って来ていた。両手には京都土産が大量に抱えられている。

「……って、あれ？なんかあったのか？」

百代とワン子、大和達の様子を見て首を傾げるキャップ。

「ああ、キャップ。実はね……」

何があったのか、モロが簡単に説明をする。百代の事。ワン子の決闘の事。キャップはうんうんと聞きながら頷くと、そうかと言って笑った。

「ま、たまにはそういう時もあるさ。それよりお前ら、約束の京都土産だぜ！」

キャップは大量の土産袋をかかげてはしゃいでいる。

「おいキャップ。京都土産と言えば、舞妓さんのねーちゃんだろ」

百代もいつものように振る舞い、冗談を言って笑う（8割くらいは本気）。キャップも勘弁してくれよと言って苦笑いするのだった。

――ワン子との決闘を終え、百代は大和達と部屋へ戻り、キャップの土産話で盛り上がりながら会話を楽しんでいた。

いつも集まっているはずなのに、久々にファミリー全員が勢揃いした……と、そう百代は感じた。

（……そうか）

そこでふと、百代は気づく。大和達が仲間達と笑い合う光景の中、“それ”がそこにあったのだと認識する。

（なんだ……ちゃんと、あるじゃないか）

それは、百代の探し求め続けていた答え。こんなに近くにあるのに、何故今まで気が付かなかったのだろうか。

或いは、身近過ぎてそれが当たり前のように思えてしまい、見えていなかったのかもしれない。

百代の答え――それは身近にあって、気付きにくいもの。百代の心を震わせた、確かな理由。

百代はこの時、初めて自分の戦う意味を知った……そんな気がしていた。

――――数日後。

ある昼休みの時間。校庭には多くの生徒達が集まっていた。

それは、百代とビッグ・マムの再戦が行われようとしているからである。百代とビッグ・マムは対峙し、互いに火花を散らしていた。

「少し見ない間に、随分といい顔になったじゃないか。川神百代」

腕を組み、堂々と立ち尽くしているビッグ・マム。百代には、あの飢えた獣のような表情はもうない。百代の瞳に宿るのは、純粋な武人としての魂のみ。

川神百代という――“武神”が復活した瞬間であった。

「ああ、お陰様でな……今度こそ勝たせてもらうぞ、ビッグ・マム！」

百代は構え、戦闘体制に入る。ビッグ・マムは腕組みを解き、両手

の拳を鳴らす。

そして、あの時百代に問いかけた言葉を、もう一度投げかけた。

「……今一度聞こう。川神百代、お前の戦う理由はなんだ？」

ビッグ・マムの問いに、百代は静かに目を閉じる。

百代の導き出した答え。脳裏に映るのは――――大和達、風間ファミリーの姿。大切な仲間。

そして目を開き、この大空に響き渡るくらいの声で答えた。

「大切な仲間を――――守る為だ！！！！」

今の自分なら、自信を持って言える。大和達を守る……この力は、その為にあるのだと百代は思う。

ただ戦い続け、強くなるのではない。仲間達がいるからこそ強くなり、戦えるのだから。

百代の解答に満足したのか、ビッグ・マムはふっと笑みを零した。
そして拳を構え、百代を見据える。

「いい返事だ。それじゃあ――――覚悟はいいかい？」

「望むところだ――――いくぞ！」

決闘の合図が鳴り、百代とビッグ・マムは互いに接近し、距離を縮める。

――――百代は仲間の為に、もう一度拳を振るう。

――――ビッグ・マムは百代の答えを確かめる為に、もう一度拳を振りかざす。

今再び、両者の拳が勢いよく衝突した――――。

――――――――――――。

「――――――？」

目を覚まし、意識を取り戻した時には、百代は保健室のベッドに仰向けで横たわっていた。

ビッグ・マムに再戦を申し立て、自分の戦う意味を伝え、対戦が始まり……それ以降の記憶が曖昧であった。

あの戦いから、一体どうなったのだろうか。ただ、百代の身体には包帯や絆創膏があちこちにあり、治療が施されていた。

とりあえず、この現状から読み取れる事は一つ。百代は――――、

「私は……負けたんだな」

自分はまた敗北したのだと、すぐに悟る。よく覚えてはいないが、互角にやりあえていたものの、結局ビッグ・マムに勝つ事は出来なかった。

なのに、敗北したにも関わらず百代の心は清々しかった。戦いに対する執拗な感情も、虚ろな感覚も、今は何も感じない。

これが“答え”を見つけた百代の結果なのだろう。それ故に、百代は満足している。

心も、身体も。これ以上ないくらいに満たされていた。

「お目覚めのようですね、百代さん」

男の声がした。百代のベッドを覆う、カーテン越しに映る一人の影。不気味なくらいに気配を感じない……この感覚、百代はあの男であるとすぐにわかった。

カーテンが開く。そこには眼帯の男、ユーリがいた。

「ユーリさん……どうしてここに？」

「貴方にお伝えしたい事がありましてね」

ユーリは百代に全ての全貌を伝えようと、ここへやってきていた。

鉄心が百代を更生させる為に、ビッグ・マムを派遣した事。百代に戦う意味を見つけさせる事で、心を――精神を鍛えてもらおうと

した事。

全ては、鉄心の孫を思う気持ちがあってこその配慮だったとユーリは語る。百代はただそれを黙って聞いていた。

「なるほどな……全部ジジィが仕組んでたって事か」

溜息をつき、天井を見上げる百代。しかし、腹は立たなかった。むしろ、強者を連れてきてくれた事に感謝しているくらいだ。

「えぇ……それにしても驚きましたね。あのビッグ・マムをあそこまで追い詰めるとは。さすがです」

百代とビッグ・マムとの戦いは、今まで以上に接戦であったとユーリは話す。

百代はビッグ・マムの勁によって瞬間回復を封じられつつも、持ち前の体術でビッグ・マムをギリギリまで追い詰めていた。

だが、瞬間回復を失った百代の体力に限界が訪れたため、決闘はビッグ・マムの勝利に終わった。

しかし前回の戦いよりも盛り上がり、ビッグ・マムと敗北した百代も称えられ、決闘は盛大に幕を閉じたという。

「追い詰めたつもりだったんだがな……まあ、次はこうはいかない。もう動きは見切ったからな。さて、次の決闘が楽しみだ」

世界は広く、まだまだ強い奴がいる。ビッグ・マムという強敵に出会い、百代の好奇心は高鳴るばかりだった。

「百代さん。その事についてなんですが……」

申し訳なさそうに、ユーリが答える。

「……？」

「ビッグ・マムは、たった今養成所へ帰還しました」

ユーリ曰く、養成所から連絡があり、急遽帰還せよとの事であり、ビッグ・マムはすぐに飛行機で飛び立ったらしい。

「な――――――」

百代は目を見開き、ぽかんと口を開けていた。もうビッグ・マムはここにはいない。ユーリはまあ、仕方ありませんねと、ニコニコ笑っている。

やられたと……百代は拳を震わせ、

「あ……あいつ、勝ち逃げしやがったなーーーーーーー！！」

ベッドから飛び上がる様に身体を起こし、思いっきり叫んでいた。しかし怪我が完治しておらず、身体中に痛みが走り、ベッドに蹲ってしまう。

「い、いたた……ふ、まあいいさ。今度は私から出向いてやる。待ってろよビッグ・マム！」

百代は高らかに笑う。ビッグ・マムと戦える日を、楽しみに待ちながら。

（やれやれ。本当に更生したんですかねぇ……）

懲りない人だと、肩をすくめるユーリ。だが以前の百代と対峙した時よりは、だいぶマシにはなったと感じている。

（しかし、これで問題は一つ解決……ですか）

ユーリは心の中でほっと息を吐く。そして、窓の外を眺めながら思う。

川神市に蔓延している元素回路は、未だ根絶の目処はたっていない。問題は山済みであった。

（頼みましたよ――――――サーシャ君）

ユーリは祈り続ける。川神市の平穏を。そしてサーシャ達の任務が、無事に終わる事を。

## 11話　百代の決意（後編）（後書き）

以上、百代編終了です！長かった（笑）
次からはついに、アデプトと謎の元素回路が絡んできます！ようやくサーシャの出番がきました！カーチャ様もいろんな意味で活躍しますので、どうか生温かい目で見守ってくださいな；；

# 12話　災厄の予兆

とある夕暮れ時の事。

ポニーテールを靡かせて、腰にタイヤを結びつけたロープを引き摺りながら、ワン子は多馬川が流れる土手道を駆け抜けていた。

「ゆー、おー、まいしん！ゆー、おー、まいしん！」

自ら掲げる言葉を掛け声にしながら走り続けるワン子。百代という目標のため、今日も走り込みという名の鍛錬に明け暮れていた。

――――いつか、百代のようになる。そんな強い願いを胸に秘めて。

『川神一子。はっきりと言わせてもらうよ、お前には武術の才能は……殆ど皆無だ』

鍛錬の最中に、ビッグ・マムの言い放った言葉が頭を過ぎる。ワン子はそれを振り切るように、ただひたすら走り続けた。

才能がない……自分でもそれは分かっていた。けれども諦めきれない、そんな自分がいる。

『この際だ、はっきり言ってやる。ワン子――――――お前には武術の才能がない』

ワン子を苛むように、百代の言葉が脳裏に蘇る。認めたくないと、ワン子はがむしゃらに走り続けた。

土手道を走って走って、走り続けて……どこへ向かうわけでもなく駆け続ける。

やがて次第にスピードが落ちて行き、そして……とうとうワン子は足を止めた。地面に視線を落とし、誰に問うわけでもなく、小さく声を漏らす。

「アタシ……こんな事してる意味、本当にあるのかな」

このまま修行と鍛錬を続け、何かが変わるのだろうか。百代のようになれるのだろうか。もしなれなかったら……そう思うと、不安で押し潰されそうになる。

自分に自信がなくなっていく……ワン子の中で、大きな迷いが生まれ始めていた。

夕日が落ち始める頃。タイヤを椅子代わりにして座り、ワンコは茜色に染まる多馬川を眺めていた。まるでその向こうにある何かを求めるように、ワン子は切なげに眺め続ける。

“勇往邁進”。恐れる事なく、自分の目標に向かって前へ進む。その決心が、今揺らぎ始めていた。

こんな気持ちでは、鍛錬に集中などできない。今までこんな事はなかったのに……葛藤が生まれ、ワン子の迷いがさらに大きくなっていく。

強くなりたいのに、なれない。やはり才能がない人間には無理なのだろうか。夕日と共に心が沈み、もう諦めてしまおうと思ったその時だった。

「――――もう走られないんですか？」

突然、背後から声をかけられる。ワン子は振り返ると、そこには背の高い、黒いスーツを来た金髪の男が立っていた。金髪の顔は優しく微笑み、ワン子に声をかける。

「……ああ、すみません。貴方があまりに直向きに走っていたもので、つい見入ってしまいました」

金髪の男が苦笑いしながら答える。少なくとも、悪い人ではないだろうとワン子は思った。

「えっと……お兄さんは？」

「私は観光でやってきた者です。それにしても……ここは良い所ですね」

緩やかに流れる多馬川の風景を見て、金髪の男は思わず感服する。旅が好きで、今回は川神市に旅行へ訪れたのだと言う。

「貴方はよくここへ来るのですか？」

「え……はい、鍛錬のコースにしてるんです。いつも走るのが日課で――――」

と、そう言いかけてワン子は口を閉ざしてしまった。悲しげに、視線を川の向こう側へと向ける。

また明日も続けられるだろうか。自分の目標に向かう事ができるだろうか。今のワン子には、できると言い切れる程の自信はなかった。

そんなワン子の様子が気になったのか、金髪の男はワン子の隣に腰掛ける。

「何かお悩みのようですね。差し支えなければ……お話しいただけませんか？」

これも何かの縁です、と金髪の男は笑う。一度は考え込むワン子だったが、今の気持ちを吐き出せば、少しは気が紛れるのではないか……そう思ったワン子は、今の自分の心境を話し始めた。

自分の自信が失いかけている事。自分の目標に辿り着けないのではないか、不安でいる事。迷っている事……ワン子は胸に秘めた思いを全て曝け出す。

「アタシ、どうしたらいいか分からなくなっちゃって……やっぱり、アタシじゃ無理なのかな」

独り言のように呟くワン子。金髪の男はワン子の方に顔を向けながら、それを黙って頷きながら聞いていた。すると、金髪の男は再び多馬川に視線を戻し、ワン子にこう告げる。

「大丈夫ですよ。貴方ならきっと、ご自身の願いを叶えられます」

「え……？」

ワン子は金髪の男を見る。まるで、そこに救いを求めるかのように視線を向けていた。例え根拠がなかったとしても、その一言は嬉しい。

「信じる者は救われます。だから貴方も、自分を信じてください」

金髪の男はポケットから何かを取り出し、ワン子の手のひらにそっと手渡す。

それは、黒い石に金属の装飾品が施されたアミュレット――お守りだった。ワン子は、そのアミュレットをまじまじと見つめている。

「これは……？」

「ただのお守りです。気休め程度にしかならないかもしれませんが……どうか、貴方の願いが叶いますように」

アミン、と金髪の男は右手で十字架を描くような仕草を取り、ワン子に目標の成就を祈る。

「――――――」

諦めかけていたワン子の心が次第に晴れていき、笑顔が戻っていく。

限界を自分で決めてはいけない。たとえ道程が困難であろうとも、目標を――――百代のようになるためには、こんな事で立ち止まってはいられないのだから。

“自分を信じる”。金髪の男の言葉に心を打たれ、ワン子は自分の目指すべきものを改めて再認識したのだった。

ワン子は自分の頬をパンパンと叩き、気合を入れて立ち上がる。

「お兄さん、ありがとう！おかげで迷いが吹っ切れたわ！」

活力が戻り、金髪の男に蔓延の笑みを返すワン子。金髪の男は何よりですと言って笑う。

「よし、それじゃあ、もうひとっ走りいってくるわ！またね、お兄さん！このお守り、大切にするからーー！」

ワン子は金髪の男に手を振ると、再びタイヤを引き摺って走り去っていく。手渡されたお守りを、大切に握り締めながら。

その様子を、金髪の男は微笑みながら見送っていた。

「――――――」

ワン子の姿が遠くなり、次第に見えなくなると、金髪の男は懐からカードを取り出した。

それは、一枚のタロットカード。

そのカードには“運命の輪”の逆位置を示す絵が記されていた。

「別れ」、「すれ違い」、「情勢の悪化」……まるで、ワン子のこれからの未来を示しているかのように、不吉なオーラを漂わせている。

「どうか、そのまま前へ進んでいってください――――絶望へとね」

タロットカードを投げ捨て、金髪の男――――フールは不気味に笑うのだった。

## 12話　災厄の予兆（後書き）

アデプトの統括者、フール初登場です。続いてワン子編、怒涛（？）の突入！

# 13話　黒い衝動（前書き）

マルギッテ、初登場です！

# 13話　黒い衝動

ある日曜日の朝。

サーシャ、まふゆ、華はクリスに招待され、大和達の住む島津寮へとやってきていた。

サーシャ達だけでなく、ワン子と百代も寮に集まり、いつもの風間ファミリーのメンツも何人か顔を出している。

それもそのはず、何故なら今日は――――待ちに待ったまふゆと手合わせをする日だからである。

皆庭に集まり、まふゆとクリスの対決を観戦しようと縁側に集まっていた。

「この日をどれだけ待ち詫びていたことか……まふゆ、早速手合わせ願おう！」

模造品のレイピアを構え、まふゆに宣戦布告するクリス。クリスは朝からやる気満々で、5時起きでウォーミングアップをするくらい、楽しみにしていたという。

一方のまふゆも、いつもより気合を入れているのか、表情は真剣そのものだった。

アトスの生神女になるために修行を積み、サーシャと肩を並べられるくらいに強くなる……そう決意したまふゆの目に炎が宿る。

まふゆは竹刀を構え、その切っ先をクリスに向ける。

「負けないわよ、クリス！」

自分の実力はまだまだ劣るかもしれないが、戦う以上は何がなんでも負けられない。

何よりもサーシャが見ている。剣道部で培ってきた実力と、修行の成果、今こそ見せる時。

「「いざ、尋常に――――――」」

まふゆとクリス――二人の声が重なり合い、周囲の空気が張り詰めていく。戦士として、好敵手として認め合い、互いに武器を構えて対峙する。そして、

「「勝負――――――！」」

かけ声と同時に、武器と武器が衝突する。鍔迫り合いが始まり、互いにリードを譲らない。

まふゆの武器は竹刀であり、模造品と言えどもレイピアの硬度には耐えられない。

だが、まふゆはクリスの攻撃を受け流す事により、衝撃を防いでいる。これを見る限りでは武器による優劣は見受けられなかった。

しかし、クリスの鋭い連撃は早く、とても避けきれるものではない。受け流すにも限界がある。徐々にだが、まふゆは押されつつあった。

「まふゆ……押されてるな」

サーシャは顎に手を当て、冷静に分析する。その横で、百代は興味深そうにまふゆの戦いぶりを堪能していた。

「まふゆのヤツ、結構やるじゃないか。だが、クリスが一枚上手ってとこだな……さて、どうする？まふゆ」

この戦局をどう切り抜けるか……後はまふゆ次第である。

「この攻撃、見切れるか！」

クリスによるレイピアの連続攻撃が速度を増していき、まふゆも次第に後退し、追い詰められていた。

――クリスは強い。今のまふゆでは防御するのが精一杯だ。だが、どこかに勝機は必ずある。まふゆは攻撃を受けつつも、この状況を覆す方法を模索していた。

「どうしたまふゆ！お前の力、こんなものではあるまい！」

「くっ――――――！？」

この戦い、クリスが圧倒的に優勢だった。このままクリスの連撃を受け続ければ、いずれはまふゆが押し負けるだろう。

何かないのか……まふゆの中で必死に突破口を見つけようとするが、見つからない。

まふゆの体力にも限界が近づいていた。息が荒くなり、反応も鈍くなっていく。

その瞬間を、クリスは見逃さなかった。

「もらったぁ――――！」

「しまっ……！？」

クリスはレイピアでまふゆの竹刀を叩き落とした。これでまふゆは丸腰も同然。これで決着はついた――そう確信するクリス。

竹刀が地面へと落ちていく。しかしこの瞬間クリスは勝利を確信して、油断しているはずだ。

（これなら……！）

まふゆは竹刀が地面につくその直前、足で竹刀を蹴り上げた。宙に浮いた竹刀を手に取り、クリスのレイピアを弾き飛ばす。

「何……！？」

レイピアは回転しながら宙を舞い、地面に突き刺さる。クリスがまふゆに視線を戻した時には既に、決着が着いていた。

――――クリスの目の前には、まふゆの竹刀の先。クリスは身動きが取れず、身体を硬直させている。

まふゆの咄嗟の判断が、逆転へと導いた結果だった。まふゆはクリスに告げる。

「あたしの勝ちね」

「……見事だ、まふゆ。自分の負けだ」

戦いが終わり、まふゆは竹刀を降ろして、クリスと熱い握手を交わす。ここに熱い戦友としての絆が生まれた。

するとそこへ、観戦していた百代が二人に近づいてくる。

「最後の最後で油断したな、クリ」

百代がクリスの戦いに対してフィードバックをする。対戦はクリス

が有利であったが、その有利さが故に生まれた僅かな驕りが、勝敗を分けていた。

「まさか武器を蹴り上げて反撃するとは……恐れ入った」

クリスも流石に予想できなかったのだろう。もし油断していなければ、その行動は予測できていたかもしれない。負けを認め、勝利したまふゆを称えるのであった。

「――――良い戦いでした、お嬢様」

庭の茂みから女性の声。茂みからがさごそと出てきたのは、左目に眼帯を付け、黒い軍服を着た赤髪の女性だった。

マルギッテ＝エーベルバッハ。軍人の家計に生まれた、生粋の軍人である。その素質を買われ、フリードリヒ家に修行に出され、現在に至っている。

マルギッテはまふゆとクリスの戦いを、茂みから隠れてずっと見ていた。最もサーシャと百代はとっくに気付いてはいたが。

「マルさん！」

クリスは姉のように、マルギッテを慕っている。まるで姉妹のようであった。その一方で、まふゆと縁側で見物していた華は「変な人が出てきた…」と心の中で感想を漏らす。

すると、マルギッテはまふゆを射抜くように鋭い眼光を突きつけた。

「織部まふゆ、貴方の戦いも見事だった。褒めてやろう、喜びなさい」

褒められて悪い気はしないが、何故だか上から目線のマルギッテの態度に、思わずムッとするまふゆであったが、反論しても通じなさそうなのでやめておく事にする。

「……」

マルギッテは、壁に寄り掛かって腕を組むサーシャに視線を向けていた。その視線に気付いたサーシャも視線を向ける。

マルギッテはニヤッと意味深に笑うと、サーシャから視線を外す。

一体何だったのだろう……少なくとも、サーシャに興味を持たれた事に間違いはなかった。

しばらくして、縁側に座っていたワン子が立ち上がる。

「じゃあ次はアタシと勝負よ、まふゆ！」

ワン子はまふゆに手合わせを申し込む。しかし、まふゆはクリスとの対戦で体力を消耗していた。当然、連戦などできるわけがない。

「ワン子、織部さんは疲れてるんだ。後にしろ」

と、大和。はしゃぎ過ぎた……ワン子はえへへ、ごめんと笑いながらまふゆに言うのだった。

「それなら私が相手になろう。感謝しなさい」

マルギッテがワン子の前へと出る。日頃の修行の成果を見せるいい機会だ……ワン子にとって願ってもない事である。

「いいわ！覚悟しなさい、マルチーズ！」

「マルチーズではない。撤回しなさい」

マルギッテは両手にトンファーを持ち、構える。ワン子も模造品の薙刀を手に、マルギッテと向かい合った。

両者睨み合い、互いの出方を待つワン子とマルギッテ。まふゆは縁側に座り、対決を観戦する。するとサーシャがまふゆに声をかけてきた。

「また強くなったな、まふゆ」

「え……あ、ありがと」

思わぬサーシャの言葉に戸惑うまふゆだったが、またサーシャに一歩近づいたような気がして、素直に嬉しく思うのだった。

「――――――はあぁぁぁぁ！！」

ワン子とマルギッテの睨み合いが終わり、マルギッテが先手を切り、トンファーを高速回転させながらワン子に突貫する。

ワン子は間合いを取られないように距離を取り、薙刀で応戦する。

薙刀のような長い武器を使うには、寮の庭ではスペースが狭い。故に、この環境ではワン子は限りなく不利である。

「負けないわ――――！」

襲いかかるトンファー攻撃に防戦一方のワン子だが、それでもマルギッテに対して対等に渡り合えている。

とはいえ、それも長くは続かない。マルギッテは攻撃のペースを上げ、トンファーと蹴りの連撃でワン子を追い詰めていく。

この戦いは状況も、能力もマルギッテが有利であった。ワン子は手が出せず、何もできないまま、ただ攻撃を受けるのみ。

やはり、才能という壁は超える事ができないのだろうか。戦う最中、ワン子に迷いが生じる。

“才能”のある人間が生き残る。“才能”のない人間はいくら努力しても報われない。取り残されて、そこで終わるだけ。

――――そんな理屈、認められるはずがない。

「終わりだっ！！」

ついにラストスパートをかけるマルギッテ。攻撃に拍車をかけて、ついにはワン子の薙刀を豪快に破壊する。無防備になったワン子はなす術もなく、マルギッテの攻撃を生身で受けるしかない。

――――――『ツヨクナリタイ』。

マルギッテの攻撃を受ける直前、ワン子の心に訴えかけるように声が聞こえた気がした。

その声は、ワン子の内に秘める自身の叫びなのか、それはわからない。ただ言える事は一つ……純粋に強くなりたいという憧れの感情。

「――――何っ！？」

マルギッテは驚愕する。今目の前で起こった事象……ワン子のとったあり得ない行動が理解できなかったからだ。

「――――――っ……あああああっ！！」

――――ワン子が、トンファーを素手で叩き壊したのである。マルギッテの武器は訓練用の木製トンファーだが、軍で支給された特注品であり、滅多な事では絶対に壊れない。

そのトンファーが真っ二つに叩き割れ、ただの木片となり果てる。あり得ない……マルギッテは動揺を隠せなかった。

そしてワン子はマルギッテが動揺している隙を突き、胸倉を掴んで地面へと投げ飛ばす。

「ぐあっ！？」

地面に叩きつけられたマルギッテは、油断していたのか受け身に失敗し、身体に大打撃を受けた。あまりの力の強さに全身に痺れが走り、しばらく身動きが取れなかった。

つまりはこの勝負――――ワン子の勝利である。

「……」

この光景を見ていた大和やまふゆ、クリスやまゆっち、京や華も驚きを隠せず、言葉すら出なかった。

不利な状況で勝ち目は薄いと思っていた分、この予想だにしない結果は驚愕の一言であった。

「マルさんが……負けた？」

最初に声を出したのはクリス。仰向けに倒れているマルギッテを見て口をあんぐりと開けている。マルギッテは、自分の顔を覗くようにして見るクリスに向かって答える。

「申し訳ございません……お嬢様。油断しました」

言って、ゆっくりと立ち上がるマルギッテ。折れて使い物にならなくなったトンファーを見る……百代の戦闘力ならともかく、素手で破壊された事が未だに信じられなかった。

「見事だ……川神一子、賞賛に値する。誇りなさい」

ワン子の戦いぶりを称えるマルギッテ。ワン子を一人の戦士として認めた瞬間だった。すると、大和や京達がワン子に駆け寄る。

「すげぇよ、ワン子！見違えたぜ！」

「うん、びっくりだよ」

ワン子の頭をポンポンと軽く叩きながら、喜んで褒め称える大和と京。しかし、ワン子は自分がした事がよく分かっていないのか、何がなんだかさっぱりな表情を浮かべている。

「一子ちゃん、強いね！あたしびっくりしたよ」

「トンファー叩き壊すなんて、無茶苦茶なことするぜ」

「はい、すごいです。一子さん」

『いやあー、イイもの見せてもらったぜ。やべぇよ、まゆっち。こいつはきっと化けるぜー』

まふゆと華、まゆっち、松風もワン子の戦いぶりに驚いていた。ワン子は大和達に囲まれ、自分が置かれている状況をようやく再認識する。

自分は勝った――――そう分かった瞬間、ワン子の表情に次第に笑顔が生まれていく。

「やった――――勝った。アタシ、勝ったんだ！」

ワン子は勝利を喜び、嬉しさのあまりに飛び上がる。今は才能がなくても、努力をすれば必ず報われる。強くなれる……そしていつかは、目標である百代に辿り着ける。

信じ続けたワン子の思いが、ほんの僅かだが、今確かに届いたのだった。

そんなワン子の様子を、静かに見守るサーシャと百代。

しかし、二人は感動とは程遠いような険しい表情でワン子を見ていた。見守るというよりは、どちらかというと疑念に近い。

（確かにワン子のアレには驚いた……けど、なんだったんだあの感覚は）

ワン子がトンファーを破壊したあの瞬間……百代はほんの僅かだが、ワン子に何かを感じ取っていた。

刺々しく、まるで泥のような黒い闘気。口では説明できないような、禍々しい“何か”。

百代は腕を組み考え込んだが、感じたのは一瞬だったので、気のせいだと言うコトにして、考えるのを辞めるのだった。

その一方、サーシャは。

（あの瞬間、俺のサーキットが一瞬だけ反応したような気がしたが……）

サーシャも百代と同じように、ワン子から何かを感じていた。ワン子がトンファーを砕いたその直後、サーシャのイヤリングが僅かに赤く光出し、反応していた……そんな気がしてならない。

サーシャの持つイヤリングは元素回路が組み込まれた物で、クェイサーの能力、元素回路に反応すると発行する仕組みになっている。

それが反応したと言う事は……例の元素回路の手掛かりがどこかにあるのでは、とサーシャは思う。

解決の糸口が見つかるかもしれない……しかしそれっきりなんの反応もなく、まるで何事もなかったかのようにイヤリングは静寂していた。

気のせいか……どうも引っかかるが、これ以上はサーシャは考えるのをやめた。不確定要素を考えるだけ無駄である。

「――――――お」

「――――――む」

ふと、サーシャと百代の視線が合う。互いに色々と考えていた所為もあり、何を話したらいいか気まずい空気が流れる。すると、

「お～い！サーシャ、姉さん。そろそろメシにしようぜ」

大和がランチの時間を、二人に告げるのだった。もうそんな時間か……百代とサーシャも居間へと移動する事にする。

百代とサーシャが感じた“何か”。それは分からないままだが、特に気にする事はないだろう。色々な出来事があり、過度に敏感にな

っているだけなのかもしれない。

――――――もし本当にそれが“気のせい”であるのなら。

## 13話　黒い衝動（後書き）

みなさん、どもです～。
小説もどんどん進んでおります。ちなみに百代とワン子編で第1クールというくくりにしたいと考えてまス。

## サブエピソード１０「激闘！サーシャＶＳマルギッテ」

『――――アレクサンドル＝ニコラエビッチ＝ヘル。昼食後、多馬川の土手道へ来なさい』

島津寮の廊下で、すれ違いざまにマルギッテに告げられたサーシャは、マルギッテの言う通り多馬川の土手道にやってきていた。

面倒な話だが特に断る理由もなく、散歩もかねて土手道を歩くサーシャ。

しばらく歩いていると、サーシャの視界に多馬川を眺めるマルギッテの姿が目に入った。

マルギッテはサーシャの気配を察知し、サーシャへと視線を向けてニヤリと笑う。

その眼光は鋭く、まるで獲物を見つけた獣のようだった。サーシャもマルギッテを睨みながら、早速呼び出した理由を聞き出す。

「俺に何の用だ？」

サーシャの問いに、マルギッテはただ笑うだけであった。島津寮の時と、全く同じ表情で。

「……」

ピリピリとした空気が漂い始める。何か来る……サーシャは身構え、マルギッテに対してある種の敵意を抱いた。

あの獲物を狩るような獣の目。間違いなく、サーシャは狩りの対象とされている。

――――そして、マルギッテは左目につけた眼帯を外し、ようやく口を開く。

「待っていたぞ、アレクサンドル＝ニコラエビッチ＝ヘル――――“致命者サーシャ”！！」

瞬間、マルギッテはトンファーを両手に持ち構え、高速回転させながらサーシャに向かって突貫した。

「震えよ――――！」

サーシャはクェイサーの力を使い、大鎌を錬成して応戦する。大鎌の刃とトンファーがぶつかり合い、火花を散らす。互いの武器を押しつけながらの鍔迫り合いが始まった。

（こいつ……さっきよりもパワーとスピードが格段に違う！）

ワン子と戦っていた時よりも、パワーとスピードが桁違いに増している。サーシャが見る限り、マルギッテが左目の眼帯を外している事から、島津寮での戦いは本気ではなかったという事が伺えた。

あの眼帯は抑制か何かか……少なくとも分かっている事は、マルギッテが本気でサーシャに戦いを挑んでいる事だけである。

「――――！」

鍔迫り合いが終わり、サーシャとマルギッテは後退して距離を取り、体制を立て直す。

「貴様、一体何の真似だ！？」

大鎌の切っ先をマルギッテに向け、真意を問うサーシャ。しかしマルギッテは答えないまま、ただ不気味に笑っている。

この戦いを、心底楽しんでいるかのように。

それにあの口ぶりは“サーシャ”を知っている。だとするならアデプトの人間か、もしくは今回起きている元素回路の事件の関係者か……憶測をすればする程、キリがなくなる。

だが、今現時点でサーシャにできる行動は一つ。目の前の敵に集中する事だけだ。

――――再びマルギッテがサーシャ目掛けて疾走する。サーシャも大鎌を構えて突貫した。

「Ｈａｓｅｎ　Ｊａｇｔ！」

感嘆するように叫び、回転させたトンファーをサーシャに叩き付けるマルギッテ。サーシャは大鎌の柄で攻撃を受け止めた。

衝撃で柄は真っ二つに折れ、力の反動でマルギッテの体制が前屈みになる。この瞬間を、サーシャは狙っていた。

トンファーが自分の身体に直撃する刹那、バックステップをして攻撃を回避する。そしてサーシャは両手に持つ大鎌の鉄片を再錬成し、

刀剣とダガーに変化させた。

「うおおおおっ！！」

「はあああああっ！！」

マルギッテの隙を狙い、刀剣とダガーを突き出すサーシャ。

出遅れながらも体制を戻し、身体を捻らせながらトンファーを振りかざすマルギッテ。

両者の攻撃が――――ほぼ同時に交差した。

「――――――」

サーシャの持つ剣の刃先が、マルギッテの喉仏の直前でピタリと止まっている。急所をつかれ、マルギッテは身動きを封じられていた。

「――――――」

マルギッテのトンファーも、サーシャの首のすぐ側で止まっている。下手な動きをしていれば、サーシャの首は今頃綺麗に吹き飛んでいただろう。

しばらく睨み合いが続いたが、ようやくマルギッテはサーシャの首に突きつけたトンファーを放す。同時にサーシャも、マルギッテの喉仏から刀剣の切っ先を退き……互いに武器を収める。

この戦いの結果は、一時引き分けという形となった。

「さすがだ、致命者サーシャ。アトスの秘蔵と言われるだけの事はある」

「……」

試させてもらった、とマルギッテはサーシャの強さを認め、称える。

どうやら敵ではないようだが……そんなサーシャの疑問に、マルギッテは先立って答えた。

「元素回路――私もこの一件に関わっている。決してお前の敵ではないと理解しなさい」

マルギッテも、今回の事件を知る関係者の一人だった。アトスからの協力要請があり、軍の命令で動いているとの事だ。しかしサーシャ達と同じく、詳しい情報は掴めていないという。

「互いに進展はなし……か」

川神学園に転入してから随分と経っているというのに、まるで進展がない。軍の介入があるにも関わらず、捜査に手こずるのはアトス側にしても、サーシャとしても焦りを感じるのだった。

話を終えたマルギッテは左目に眼帯を装着すると、自分の腕時計を確認していた。何か用事があるようだ。

「すまないが、私はこれにて失礼させてもらおう。お嬢様に買い物を頼まれている」

言って、サーシャの前から立ち去ろうと踵を返すマルギッテ。いきなり勝負を挑み、そして突然帰っていく……どこまでも勝手な奴だとサーシャは思った。

「致命者サーシャ」

足を止めて、サーシャに振り返るマルギッテ。

「今日は存分に楽しめた。感謝するぞ」

またいつか手合わせ願おうと、そう言い残してマルギッテは立ち去っていった。サーシャはその背中を見送りながら、思う。

マルギッテ――サーシャと渡り合えるほどの実力者。あれが敵であったなら、相当厄介な相手になっていただろう。

（俺もまだまだ……か）

百代といいマルギッテといい、ここは強い人間が多い。自分の未熟さを戒めつつ、サーシャは島津寮へと戻っていくのだった。

## サブエピソード１０「激闘！サーシャＶＳマルギッテ」（後書き）

やっとサーシャの出番が来ました！というか作りました（笑）
早く決め台詞を言う所まで進めたいですね！
っていうか、マルギッテしか喋ってないような気がするｗｗｗｗｗｗ

## サブエピソード11「まふゆのボルシチ」

夕暮れ時。

サーシャ達は、大和達と島津寮で夕食を取る事になった。

ちなみにマルギッテは軍の命令で帰還し、華は用事があるとの事で今回は同席していない（おそらくカーチャに呼び出されたのだろう）。

「～♪」

鼻歌を弾ませ、台所で料理をするまふゆ。島津寮へと招待してくれたお礼に、まふゆが料理を振舞うと張り切っていた。

鍋の中でグツグツと煮えるまふゆの得意料理――そう、サーシャの好物であるボルシチである。

「ん～めちゃくちゃいい匂いがするわ」

鼻をくんくんときかせ、まふゆのボルシチを今か今かと待ち続けるワン子。リビングにはボルシチの香りが漂い、大和達の食欲をそそ

らせる。

（そろそろ煮えたかな……）

まふゆは鍋の蓋を開け、おたまで掬って味見をすると満足気に頷き、鍋をテーブルの前に置いた。

「はい、おじ様直伝・本格派特製ボルシチの出来上がりだよ♪」

自信満々に出来上がったボルシチを、胸を張って披露するまふゆ。

大和達はおおと感激の声を上げながら、鍋の中を覗き込んだ。鍋の中で具材がよく煮え立ち、大和達の食欲をより一層かきたてる。

「たくさん作ったから、熱い内にどんどん食べてね」

まふゆがボルシチを皿に分け、仕上げにサワークリームとデイルをつけあわせて大和達に配膳する。

「うまそうだな。それじゃ早速――――」

「もぐもぐ……вкусный（うまい）！」

大和の隣で、既にサーシャはボルシチを美味しく頂いていた。よほど好物なのか、食べる事に集中している。しょうがないなあ、とそんなサーシャを見てまふゆは苦笑いした。

「じゃあ俺達も、いただきます！」

早速大和達も、まふゆのボルシチを頂く事にする。

「おお……こりゃうまい！」

「ほんと、何杯でもいけちゃうわ！まぐまぐ……」

まふゆのボルシチの味に、大満足する大和とワン子。

「うむ、うまい！毎日食べてもいいくらいだ」

「はい、とても美味しいです。私も作ってみようかな……」

『伝授してもらえよ、まゆっち。このボルシチ、男に食わせたらイ

チコロだぜ？これで一気にポイントアップだ！』

「わわわわわわわわ！何を言うんですか松風！」

バクバクとボルシチを口に運ぶクリス。そして一人漫才（？）をするまゆっちと松風。

「うん。確かにおいしいけど、ちょっと辛さが足りないかな」

京は瓶に入った『ウルトラデストロイドソース』をドバドバと自分の皿に注ぎ込んでいる。こうして京のボルシチは、激辛カスタム仕様へと変貌を遂げた。

「大和もソースいる？」

「いるかっ！！」

大和は自分の皿を京から遠ざけた。いる？と聞きつつも、大和の皿にソースを入れ込もうとしている仕草は、何とも京らしい。

「こいつはうまいな……まふゆ、私の嫁になる気はないか？」

ボルシチの味（というかまふゆ本人）を気に入り、まふゆの肩を抱き寄せる百代。まふゆは反応に困り、戸惑っていた。冗談で言っているつもりだろうが、とても冗談には聞こえない。

ともあれ、皆ボルシチを気に入ってくれたようで、まふゆは嬉しく思うのだった。

おかわりをするペースが早く、ボルシチは鍋の中からあっという間になくなっていき、とうとう残り一人分となった。

「残りはアタシがもらうわ！」

ワン子はいち早く最後の一杯を狙い、おたまに手を伸ばす。

「――――！？」

ワン子がおたまの取っ手を掴むと同時に、サーシャもおたまを掴んでいた。互いに視線を合わせ、その手を離せと目で訴えている。

「……ちょっとサーシャ、アタシが先よ」

「僅かに俺の方が早かった。手を引くのはお前だ、ワン子」

互いに譲らず、バチバチと火花を散らす二人。

「“れでぃーふぁーすと”よ、黙ってアタシに譲りなさい」

反論するワン子。“あ、ワン子が珍しく難しい単語使ってる”と京が小さく呟いた。

「知った事か。そんな理屈では俺の心は震えない、諦めろ」

サーシャも譲る気はさらさらないらしい。一見カッコいい台詞に聞こえるが、女子からして見れば割と最低である。

「何よ、じゃあ勝負する？」

「いいだろう。表へ出ろ」

サーシャとワン子は合意し、決闘を受諾する。こうして、一杯のボルシチをかけた壮絶なバトルが始まろうとしていた――――。

「こら、サーシャ！」

「やめろ、ワン子」

まふゆと大和が同時に声を上げ、サーシャの頭にはおたま、そしてワン子の頭には大和のチョップによる制裁が入っていた。

二人はしゅん、と反省する。当然バトルはなし。そんな事でいちいち決闘に持ち込むなと、二人に説教をするまふゆと大和なのだった。

『みんな、マスターのお帰りだよ』

「おう、今帰ったぜ！」

説教の最中に、タイミングよくお手伝いロボット――クッキーがリビングへとやってくる。その隣にはキャップがいた。バイトの帰りだったらしい。

「いや～バイトが長引いちまってさ。腹減ったなぁ……お、なんかうまそうな匂いがするな」

鼻をきかせて、キャップはテーブルに置かれた鍋に視線を落とす。

「お、なんだこれ。うまそうだな……いただきま～す！」

何の躊躇いもなく、キャップは鍋の中のボルシチを一瞬で平らげる。
大和達、そしてサーシャとワン子は、ただその光景を見ていることしかできなかった。

そして、鍋の中は空になった。

「これ、ボルシチだよな？すっげーうまかったぜ！一体誰が作ったんだ？」

キャップが周囲を見回すと、まふゆがそっと手を上げる。

「あ、あたしだけど……」

「マジで？織部、お前料理うまいな。俺旅してて色んな店のボルシチ食ったけどよ、こんなうまいボルシチ初めて食ったぜ！」

ボルシチの味がすっかり気に入り、また作ってくれよとキャップは笑うのだった。

――――――。

次の瞬間、悪寒と殺気がリビングの中を包み込んだ。キャップもただならぬ何かを感じ取り、後ろを振り返る。

その後ろには、殺意のオーラを纏ったサーシャとワン子の姿があった。

「キャップ……」

「貴様……」

ボルシチを食された事への怒りを抑えきれず、サーシャとワン子はゆっくりとキャップに詰め寄った。

どうやら食べてはいけない物だったらしい……身の危険を感じたキャップは、

「な、何かヤバそうだから……とりあえず逃げるぜ！」

ダッシュでリビングを脱出し、外へと逃走を測った。キャップが逃

げた事で怒りのボルテージがＭＡＸになり、サーシャとワン子は逃げたキャップを追いかける。

「待ちなさいキャップ！アタシのボルシチをよくも～！」

「俺のボルシチを奪った罪は重い……生きて帰れると思うな！！」

二人はそのまま外へと繰り出した。その光景を見て、やれやれと肩を落とす大和達。

ちなみにキャップ達が戻ったのは、日が沈んでから3時間後だったという。

食べ物の恨みは、時として本当に恐ろしい……それを改めて思い知らされた大和達なのであった。

## サブエピソード11「まふゆのボルシチ」（後書き）

食べ物の怨みは恐ろしいです、はい。
この話書いてたらボルシチが食べたくなりました（笑）ちなみにディルとはハーブの一種で、ボルシチの付け合わせによく使う物だそうです。

## サブエピソード１２「協力者」

川神市にある歓楽街――通称『親不孝通り』。

いくつもの風俗店が立ち並び、看板のイルミネーションが夜を彩るように光を放っている。

そこは言わば不良達の溜まり場であり、覚醒剤等の密売が日々行われ、川神学園の生徒達には迂闊に近寄らないよう、教師達や教育委員会が呼び掛けている。

その場所に一人、川神学園の生徒がいた。

源忠勝――２－Ｆの生徒である。かつては孤児であったが、代行業者の雇い主に引き取られ、今では雇い主の右腕として日々活動を続けている。

今回の依頼内容は、川神市に蔓延る元素回路という物の調査である。その辺で使われている薬よりもたちが悪いらしく、また詳しい情報が一切掴めていないのが現状である。

忠勝は調査の為、今日も親不孝通りを歩いていた。

（……ん？）

しばらく歩いていると、人気の少ない路地に見覚えのある人影が二人。そしてその二人を取り囲む、柄の悪い不良達が数名いる。

物陰に隠れ、目を凝らす忠勝。二人の人影の正体は同じクラスの華と、一年に転入したカーチャであった。

（桂木？それに、あいつは一年の……何でこんなとこにいやがんだ）

同じクラスの生徒と、一年……それも幼い留学生である。どういう経由でこの場所を訪れたのかは知らないが、厄介な事に巻き込まれているのは確かだ。

しかも相手は数が多い。華は男勝りな性格だが、留学生を守りながら相手をするのは分が悪い。

このままではまずいことになる……特に留学生は連れ去られれば、何をされるか分かったものではない。

（ああくそっ。仕方ねぇ――――！）

人数は5、6人。これなら何とかなるだろうと、忠勝は華達のいる方へと突貫した――――。

「――――――!?」

次の瞬間、忠勝は足を止めた。何故なら、今自分の目の前で起きている事態が、あまりに異様な光景だったからである。

華とカーチャの前に、突然赤い人形が空から降ってきたと思えば、気がつけば華達を取り囲んでいた不良達が銅線に縛られ、一網打尽にされていた。

華とカーチャは別段驚いているわけでもなく、まるでいつも見ている光景であるかのように、平然としている。

（なんだあのバケモンは……まさか、あいつらが元素回路ってやつの――――）

忠勝が後退ろうと、足を動かしたその時だった。赤い人形――――アナスタシアから突然銅線が伸び、忠勝の右腕に巻き付いた。

「!?」

忠勝は抵抗しようと力を入れるが、予想以上に力が強く、カーチャ達の方へとと引きずられていく。

「――――それで隠れていたつもりかしら？舐められたものね」

忠勝の元に、カーチャと華が歩み寄る。カーチャは捕縛した忠勝を見て嘲笑っていた。

「げっ！お前……源！？」

カーチャとは対象に、華は忠勝を見て気まずい表情を浮かべている。

同じクラスの人間に見られてはならないような事をしているのだろうか……忠勝は臆することなくカーチャ達を睨みつけた。

「……てめぇら、こんな所で何をしてやがる？」

「お前には関係のないことよ」

カーチャは忠勝をまるで相手にせず、軽くあしらうだけであった。

忠勝も引き下がらず、反論を続ける。

「なるほどな……言えねぇ事情があるってわけだ。まさか、元素回路をばら撒いてるのもてめえらの仕業か？」

忠勝から出た言葉に、カーチャと華が反応を示した。今まで嘲笑うような態度を取っていたカーチャの表情が変わる。

「元素回路……何か知ってるのね？」

「だったらどうだってんだ？」

忠勝が挑発するように笑うが、カーチャはニヤリと笑みを返し、宣告する。

「洗いざらい吐いてもらうわ――――ママ！！」

カーチャの呼びかけに応え、アナスタシアが反応する。先端を尖らせた鋭利な銅線が伸び、忠勝に向けられた。

“答えなければ命はない”。カーチャの死の宣告が、忠勝を追い詰める。

逃げられない……これまでか、と忠勝がそう思った時だった。

「――おい、ちょっと待った！」

遠くから男性の声。カーチャ達が視線を向けた先にいたのは、くたびれた中年の男性――宇佐美巨人であった。宇佐美はカーチャ達に駆け寄り、アナスタシアと忠勝の間に介入する。

「親父……？」

突然の宇佐美の登場に、一瞬戸惑う忠勝。

「宇佐美、どういうことかしら？」

不機嫌な態度を取りつつ、カーチャが尋ねる。

「こいつは俺の連れでな……とりあえず、手を引いちゃくれねぇか」

宇佐美は忠勝が自分の代行業の従業員であると説明する。するとカーチャは小さくため息をつき、忠勝をアナスタシアの束縛から解放

するのだった。

「……説明しろ親父。こりゃ一体どういう事なんだ？」

ようやく自由の身になった忠勝だが、状況が飲み込めず、宇佐美に説明を求める。

宇佐美は頭をポリポリとかきながら、カーチャとアイコンタクトを取る。カーチャは好きにしなさいと目で訴えていたので、宇佐美は話を切り出した。

「この二人は、アトスから派遣された調査員だ」

カーチャと華がアトスの人間である事を明かす宇佐美。

「こいつらが……？」

こんな幼い少女と女子学生が……信じられないような目で、カーチャと華を見る忠勝。

にわかには信じ難い話であったが、先程のアナスタシアを見れば一目瞭然、普通の人間ではない事が分かる。もう信じざるを得ない。

少なくとも、敵ではない……事を願う忠勝だった。

すると、話を横で聞いていたカーチャが痺れを切らし、話に入ってくる。

「……話は終わりかしら？で、宇佐美。何か見つかったの？」

恐らく元素回路の調査の事だろう。カーチャが訪ねると、宇佐美は苦笑いして首を横に振った。

「相変わらず進展なしだ。そっちは？」

「ダメね。あそこで眠ってるゴロツキも、全員シロよ」

カーチャは背後で気絶している不良達を顎で指し示す。全員それらしいものは所持しておらず、強いて言うならば、ドラッグを少量持っている事ぐらいか。宇佐美もそうか、と言って肩を落とした。

「まあ、いいわ。ところで……」

視線だけを忠勝の所へと向けるカーチャ。まるで見下されているようで、忠勝は無性に腹が立った。

「源忠勝……お前もこの一件に関わっているわけね」

「ああ、そうだ……なんか文句でもあんのか？」

生意気な態度に喝を入れようとカーチャを睨みつける忠勝。しかしカーチャは少し忠勝を眺め、侮蔑の意味を込めて笑う。

「ま、せいぜい私の足を引っ張らないことね……いくわよ、華」

「は、はい。カーチャ様」

言うだけ言って、カーチャはまた調査を再開する。宇佐美と忠勝の前から立ち去り、路地裏の暗闇へと消えていった。アナスタシアもドロドロに溶けて、赤い液体状になって消えていく。

「……クソ生意気なガキだぜ。ったく」

舌打ちをし、忌々しげにカーチャ達を睨む忠勝。幼い少女だと思えば、とんだ女狐である。

それにカーチャに対する華の態度。カーチャに頭が上がらないような理由でもあるのだろうか……忠勝にとっては、どうでもいい話なのだが。

「まあ、そう怒るなよ……それより忠勝。分かってるだろうが、あの二人が潜入操作してるって事は他の生徒の連中には内密だからな」

と、宇佐美。当然、カーチャ達の素性がバレれば今後の活動に影響が出る。忠勝は勿論分かってはいるが、協力関係とはいえ、カーチャとは絶対に組みたくはないとつくづく思った。

「にしても、あの二人がな……って事は、織部とアレクサンドルもか」

同じクラスに転入してきた、サーシャとまふゆ。

この二人も、アトスから派遣された人間なのだろう。サーシャが心と決闘したあの時の戦いぶりは、どう見ても戦い慣れし過ぎている部分がある。

何かあるとは思っていたが……そう言う事かと忠勝は理解する。

「アトス……あいつら一体何者なんだ」

同時に疑問も生まれていた。サーシャやカーチャのアナスタシア…
…どうにも異端過ぎる。すると宇佐美が忠勝の疑問に答えるように、
まるで独り言のように呟いた。

「……“クェイサー”」

宇佐美の聞き覚えのない言葉に、忠勝は耳を傾ける。

「クェイサー？」

「俺も詳しい事は知らねぇが、アレクサンドルとエカテリーナの二
人はそう呼ばれてるんだとよ」

責任者のユーリから一部話を聞かされたと宇佐美。しかし、どのよ
うな能力なのかは定かではない。

ユーリ曰く“知るべきものが知っていればいい、奇跡です”だとか。

「よくわかんねぇな……アトスの人間は」

考えれば考える程ややこしくなる。思考を打ち切り、忠勝は宇佐美と共に路地裏から離れ、調査を再開する。

（クェイサー……とんだ人間が舞い込んできたもんだぜ）

夜空を見上げ、そんな事を思いながら忠勝は再び本通りへと戻るのだった。

## サブエピソード１２「協力者」（後書き）

ゲンさんと宇佐美が初登場です！
にしてもゲンさんの喋り方、微妙に表現が難しいっすね……。

## １４話　目覚めた感情（前書き）

ワン子編、どんどん進めていきます！
ここから先はバトルの連続です！描写がマジ大変ｗｗｗｗ

# １４話　目覚めた感情

何もない暗闇の中で、ワン子は夢をみていた。

『アタシね、お姉さまみたいに強くなるの』

――――アタシハ、アイツヲコエタイ。

聞こえる。自分の中に眠る、心の声が。

『お姉さまは、アタシの目標だから！』

――――アタシハ、アイツニカチタイ。

自分の中にある、強さを求める感情。それは偽りのない、純粋なる欲望。

『お姉さまは、アタシにないものをたくさん持ってるわ！』

――――デモ、ソンナアイツガユルセナイ。

何故だろう、百代に対する感情が次第に歪んでいく。あんなに自分の姉を慕っているのに。

『アタシも修行を積んで、もっともっと強くならなきゃ！』

――――モットツヨイチカラデ、アイツヲタオシタイ。

力が足りない。才能がない。ただそれだけで決めつけられる人生なんか、認めない。

『ダカラアタシは、川神百代を――――全てを憎む』

全ては己が望む欲望の為に。その為ならば、何もかも失っても構わない。

何故ならば、どんな犠牲を払ってでも、手に入れなければならない物なのだから。

――――――――。

ジリリリリ……。

目覚まし時計のアラームが、ワン子の頭を刺激する。ワン子は目を覚まし、欠伸をしながら大きく背伸びをすると、時計のアラームスイッチを止める。

「また何か変な夢を見たわ……」

目を擦り、ふわああ、とまた欠伸をかくワン子。眠気が取れず、まだウトウトしていた。

ここ最近夢を見る事が多い。その所為か眠りが浅く、身体にダルさを感じていた。

――まるで、自分の中にいる何かに呼びかけられるような感覚。それが夢なのか現実なのか、判断すらつかないくらいのリアリティがある。

呼びかける声は夢を見る度に次第に大きくなり、ワン子の心を浸食していくような錯覚に陥る。

日常生活には問題はない。ただ唯一変わった事といえば、自分が修行を重ねる毎に、強くなっているという実感が湧いている事だけだ。

それはワン子にとっては非常に嬉しい事なのだが、自分の中で確かな違和感を感じている。

（ん～まあいいや。力がついてるから、そう感じるだけかもしれないし）

これ以上考えても仕方がない。というより、考え事はワン子には似合わない。ワン子は首を振って眠気を吹き飛ばし、頬を両手でパンパンと叩く。

気持ちを切り替え、早速朝の鍛錬の準備に取り掛かろうと布団から飛び起きるワン子。

「今何時かしら……」

何気なく目覚まし時計の時間を確認する。現在の時刻は……。

「８：０５」

時計の針は、無慈悲にも登校時間（大和達が登校する時間帯）を指していた。しかも大和達との待ち合わせ時間まで、後僅かしかない。

そしてワン子は気づく。昨日の鍛錬でだいぶ疲れが溜まり、ウトウトしながら目覚まし時計をセットして眠ってしまった事を。

これはつまり……。

「ぎゃーーーーーーーーーーーーーー！！遅刻だわーーーー！！！」

ワン子は絶叫し、大慌てで制服に着替え始めた。大和達が待っている事や、何故百代やルー師範代が起こしにきてくれなかったのか……色々頭の中で駆け巡ったが、結局は自分が悪い。

「ん……むにゃ……どうしたワン子。そんなに慌てて」

ワン子の部屋の障子が開き、そこから眠そうな顔をした百代が中を覗いていた。おまけに、寝巻きのままである。

「だだだだだって今日は学校だよ！お姉さまも早く支度しないと遅刻しちゃうわ！！」

ワン子は制服に着替え終え、バッグの中に教科書、ダンベル、葡萄と砂糖を詰め込んでいる。

百代もこんな時間なのに何を呑気に構えているんだろうと思いつつも、今はそんな事を気にしている場合ではなかった。

「学校ってお前……今日は祝日で休みだぞ？」

「……え？」

百代の言葉に、ワン子は動きを止める。よくよく考えてみれば、金曜日に梅子が“月曜日は祝日だ、間違ってこないようにな”と言っていた気がする。

段々と冷静さを取り戻したワン子は、その場にへなへなと座り込んでしまった。そんなワン子を見て、可愛いやつだなと百代は笑う。

「疲れが溜まってるんじゃないのか？鍛錬もいいが、たまには休めよ……ふわあああ……」

もう一回寝直そうといいながら、百代は自分の部屋へと戻っていく。ワン子はしばらく放心していたが、力が抜け、布団の上へ仰向けに倒れこんだ。

「何だ……休みか……」

はあああ～と大きくため息をつくワン子。このまま眠ってしまおうかと思ったが、目が冴えてしまい、眠ろうにも眠れなかった。

「ん～……」

最近疲れが目立つ。たまには休むのも悪くないだろう……ワン子は横になり、目を閉じようとした時、ふとある物に目が入った。

「あ……」

それは、夕暮れの土手で出会った金髪の男性から譲り受けたアミュレットだった。ワン子は大事に、いつもそれを側に置いている。

何気なく手に取り、ぎゅっとそれを握り締めた。何故だろう……力が漲ってくるような気がした。

（休みも大事だけど……やっぱり、じっとしてなんかいられないわ！）

ワン子は飛び起き、制服を脱ぎ捨てて体操服に着替えると、いつものように身体にタイヤ付きのロープを結びつけ、鍛錬に出掛けるのだった。

「さて――――今日も“ゆーおーまいしん”よ！！」

多馬川の土手を走り、鍛錬を続けるワン子。

しばらく走っていると、ワン子の目の前に見覚えのあるような、ないような人物が待ち構えていた。

黒の革ジャンとジーパンに身を包んだ不良――――そう、いつしか学校へ向かう途中に現れ、そして百代にあっさりと敗れ去ったウンウン☆マイスリーとヘリウム三兄弟（５男）であった。

彼らは絆創膏や包帯をしていて、以前会った時よりは威勢がないように感じる。

「貴様……あの川神百代の仲間だな？」

金髪の不良その1がへっへっへと下品に笑いながら尋ねる。しかしワン子は首をかしげ、

「えっと……おじさん達、どこかで会ったっけ？」

覚えてないや、と申し訳なさそうに笑うのだった。おまけにおじさん扱いされ、不良達の怒りが大爆発する。

「いや会っただろうがよ！俺たちは川神百代に勝負を挑んだ、“ウンウン☆マイスリー”と」

「そしてこの俺へリウム三兄弟、５番目の弟！」

忘れ去られていた自分達の存在を、必死にワン子に思い出させようと説明する不良達。

ワン子は腕を組み、う～んと唸ってしばらく考え始める。そして手のひらをポンと軽く叩き、ようやく彼らを思い出した。

「あっ！あの時の……！」

「ようやく思い出したか。ふっふっふ……俺たちの恐怖が脳裏に―

――」

「お笑い芸人！！」

ワン子の言葉に、不良達は大ショックを受けた。確かに、ワン子の中で彼らの存在が記憶に残っていたようだ……お笑い芸人という形で。

不良達の怒りは最高潮に達し、それぞれ武器を構えてワン子と対峙する。

「貴様……よくも俺達をコケにしたな！」

「あの時は油断したが、今日は勝たせてもらうぜ！」

「いくぜ、野郎ども！」

「フルボッコにしてやんよ！！」

何の前触れもなく、一斉に襲いかかる不良達。しかしワン子は微動だにせず、ただ彼らの攻撃を待つのみ。

以前のワン子なら、さすがに四人相手……特に鍛錬した人間とでは無理があっただろう。しかし、今のワン子は自身に満ち溢れていた。

何にも負けない、“自分を信じる”という力。超えなければならない目標があるからこそ、強くなり続けるのだから。

――不良達との距離が縮まっていく。武器がワン子の身体に触れる僅かな瞬間、ワン子は腰に結びつけていたロープを引っ張りあげ、そして括り付けていたタイヤを――――、

「せりゃあああああああああああああ！！」

力を込めて、不良達に叩きつけた。タイヤの重みと衝撃が不良達の身体を直撃し、まるでドミノのように綺麗に並び、倒れて吹き飛んでいく。

不良達は川へと転落し、戦闘不能。そのままプカプカと気絶したまま流されていった。

ワン子はふぅと息を吐くと、自分の手のひらを見つめる。

「アタシ……強くなってる」

自分の成長を実感し、少しずつだが百代に近づいていると喜ぶワン子なのだった。

「――――見てたぞ、ワン子」

後ろから声をかけられ、背後を振り返ると百代が立っていた。散歩の途中でワン子の姿を見つけ、ワン子の戦いぶり（と言っても一瞬で終わったが）をずっと見ていたらしい。

百代が見ていてくれていた……ワン子は素直に嬉しく思った。

「どうお姉さま？アタシどんどん強くなってるわよ！」

自分の成長している姿を、胸を張って誇らしげに語るワン子。百代はワン子の頭を撫で、よくやったなと褒め讃える。

「確か、いつしか私に挑んできた奴らだよな……まあ、対して強くもなかったからな。あいつらを倒したからって、浮かれるなよワン子」

ちょっと姉らしく、厳しい事を言ってみたと百代は笑った。

「――――」

その何気ない百代の一言に、ワン子は一瞬言葉を失う。まるで、自分が否定されたように感じ取った。今まではそんな風に思った事は一度もなかったのに……と、複雑な気分になる。

「ワン子、どうかしたのか？」

ワン子の様子を変に思ったのか、百代が心配そうに尋ねる。ワン子は我に返ると、ぶんぶんと首を振るのだった。

「う……ううん。なんでもないわ！」

「そうか……ならいいんだが――――ん？」

何かを察知したのか、百代は視線を別の方向へと向ける。その先には、麗しき美少女という名の女子学生の姿があった。どうやらナンパをする気らしい。

「私好みのタイプだな――――よし、今日はあの子で決まりだ！」

ワン子に鍛錬、頑張れよと励ましのエールを送ると、百代はターゲットを定め、女子学生に向かって駆け出していった。ワン子はそれを手を振って見送っている。

百代のナンパ癖は相変わらずだな……と、ワン子は苦笑いしながらそう思うのだった。

――ソウヤッテ、イツモヒトヲミクダスコトシカシナインダ、アイツハ。

「うっ……！？」

急に激しい頭痛に襲われ、ワン子は頭を抱えて蹲る。

――コンナニガンバッテイルノニ、ドウシテミトメテクレナイ？

何かがワン子の中で呼びかけを続ける。頭が割れるような痛みが続き、膝をついて悶え苦しむワン子。

――ユルサナイ。ユルサナイ。ユルサナイ。ゼッタイニ。

徐々に頭痛が引いていく。ワン子は膝をついて蹲ったまま、動かない。

「……め、させなきゃ」

声を震わせながら、ワン子は小さく呟いた。頭を抱えながら、百代のいる方角を睨みつけている。

その目は、今までのワン子とは別人のような……憎しみの色に染まった瞳がそこにあった。

「認め……させなきゃ」

百代に自分という存在を認めさせる……ワン子の心に、確かな“黒い感情”が宿り始めていた。

# １４話　目覚めた感情（後書き）

黒ワン子出現！盛り上がってきたっス！

# 15話　歪み

「はっ――！はっ！はっ！」

川神院の野外道場で何人もの修行僧が並び、拳を突き出し、鍛錬に明け暮れていた。

時期は夏休みに突入し、それぞれの休暇を過ごす者もいる。が、殆どの修行僧はここに留まり、川神流を極めるため、日々修行を重ねていた。

その光景を鉄心とルーが微笑みながら、修行僧達の成長を見守っている。

「……ふむ、皆よくやっておるのう」

モモも少しは見習って欲しいものじゃ、と鉄心は髭を弄りながら呟く。だが以前に比べて、百代も少しは精神も落ち着いてきていると感じていた。

これもビッグ・マムの指導のおかげだ……心配の種が取り除かれ、鉄心は嬉しく思うのだった。

「そういえば、百代も今は現地に到着している頃でしょうネ」

青空を見上げながら、ルーは言った。

百代は現在、七浜にあるスタジアムに赴いている。

普段は野球の試合で使われている場所だが、今回は模擬戦闘を行う為の決闘場となっていた。

百代と一度手合わせしたいという人物が現れ、喜んで七浜へ飛んでいったのだという。

「うむ……相手は身の丈以上もある大剣の使い手だそうじゃのう」

「ええ。それも小柄な少女がです……信じられませんネ」

鉄心やルーが聞いた話では、今回百代が会う人物は大剣を軽々と振り回す少女と、サポート役をするシスター（スポンサーのような役割）の二人らしい。

詳細はよく分かっていないが、百代に挑戦してきた相手の中では、

かなりの実力者であるという事だけは判明している。

「ワシらも決闘を見にいきたいのじゃが……今はそんな事を言ってられんからのう」

鉄心の表情が険しくなる。元素回路の調査が困難を極める中、鉄心が今ここを動く訳にはいかなかった。

今回の事件の責任者である自分がここを離れれば、何か起こった時に対処ができない。ルーもそうですネ、と肩を落とした。

また、サーシャ達も一旦川神市を離れ、アトス本部へと戻り現状報告に赴いている。戻るのは今日の夕方になると、ユーリから伝達を受けていた。

サーシャ達のいない今、自分達にできる事をしよう……鉄心とルーはそう思うのだった。

「――――じーちゃん、ルー師範代！」

鍛錬から帰ってきたワン子が手を振って、腰にタイヤのついたロープを引きずりながら鉄心達の元へやってくる。

「おー、おかえりなさい一子」

ルーがワン子を出迎え、鉄心が微笑む。やはり、孫が頑張っている姿はいつ見ても眩しい。

「一子も夏休みだというのに、よく頑張っておるのう」

「うん。アタシ、鍛錬する度にどんどん強くなっていくのを感じるの！だから、もっともっと鍛えなきゃ！」

この前の挑戦者（ウンウン☆マイスリー＋ヘリウム５男）も一撃で倒したんだから、と胸を張るワン子。そんなワン子を見て、鉄心はそれは何よりじゃ、とまた微笑むのだった。

「ねぇ、じーちゃん。お願いがあるんだけど……」

ワン子がおねだりするような眼差しを鉄心に送りながら、言い難そうに答える。鉄心は何でも聞いてやるぞいと、ニコニコと笑っている。

すると、ワン子はホント！？と目を輝かせながら答えた。

「アタシ……じーちゃんと手合わせがしたい！」

ワン子の願い……それは鉄心との模擬戦であった。鉄心とルーは一瞬言葉を失ったが、すぐに答えを返す。

返事は勿論、ノーだった。

「一子や、ワシに挑むにはまだ早いぞい。その為にはまず師範代を目指さんとのう」

その時が来たら、全力で相手をしてやるぞいと鉄心。やはり、今のワン子では力不足だと感じる部分があったのだろう……あはは、そうだよねとワン子は苦笑いする。

「学長、そろそろ時間です」

ルーが時計を指し示す。今日は川神学園で元素回路事件についての会議に出席しなければならなかった。鉄心はうむ、と頷いてルーと共に早速川神院を出ようと足を運ぶ。

「ワシは学園に少し用事があっての。一子、留守を頼むぞい」

そう言い残し、川神院を出て学園へ向かっていく鉄心とルー。ワン子はいってらっしゃいと手を振って、二人を見送った。

「……」

やがて二人の姿が見えなくなると、手を下ろし、しばらくその場に立ち尽くすワン子。

「――――やっぱり認めてくれないのね」

まるで別人のように声のトーンが低くなり、ワン子は踵を返すと、野外道場を通り抜けて川神院の中へ入っていく。

廊下を歩き、ワン子が辿り着いた先……そこは武器置き場だった。部屋の中には模擬戦闘で使用する為の武器が保管されている。

刀剣、短刀、弓……レプリカだけでなく本物も存在する。種類が豊富であり、もはや武器庫と呼ぶ方が相応しい。

「……」

ワン子は静かに、一歩一歩部屋の奥へと進む。周囲を見回しながら、自分が探し求めている“モノ”を探し出していた。

しばらくしてワン子は足を止め、壁に立てかけられたある武器に視線を向ける。

それは、ワン子の愛用している武器である薙刀だった。しかも、レプリカではなく本物である。薙刀の先端の刃は丁寧に手入れされ、刃こぼれ一つない。

「――――――」

ワン子はゆっくりと手を伸ばし、置かれた薙刀を手に取る。柄の部分をぐっと握り締め、薙刀を自分の一部になる感触を体感しながら、ワン子は薙刀を一振りした。

……瞬間、薙刀の一閃が風を切り、周囲にあった武器を切断して破壊する。部屋中にあった武器という武器が無残に散り、もう見る影もなくなっていた。

薙刀の刃は、触れてすらいない。斬ったのは刃ではなく、ワン子が作り出した“気”の刃であった。

悪くないわ……とワン子は心の中で呟きながら、普段のワン子とは思えないような歪な笑みを浮かべ、残骸と化した武器置き場を後にするのだった。

学園で会議を終えた鉄心とルーは、川神院へ戻る道程を歩き、今後の対応について考えていた。

「ふむ、事態は深刻じゃのう」

眉間にしわを寄せ、どうしたものかと髭を撫でる鉄心。川神市にはびこる元素回路は未だ消える気配を見せず、被害者は増える一方であった。

「痕跡がないとなると、かなり厄介ですネ」

ルーも腕を組み、この現状を打破できる策はないかと頭を抱えている。

元素回路は使用された後に消滅し、欠片すら残らない。そもそも、それらしき物を見た人間すらいないのだ。せいぜいあるのは、一部の記憶喪失という症状のみである。

このままでは根絶するどころか、被害を食い止める事すらできない。もはや頼りになるのは、サーシャ達アトスの人間しかいなかった。

情けない話ではあるが、元素回路を知らぬ鉄心達にとって、サーシャ達の知識は必要不可欠なのだから。

「――――む？」

川神院まであと少し……の所で、ふと鉄心は足を止めた。

気の流れに、違和感を感じる。それはルーも同じように感じ取っていた。

――――川神院の修行僧の“気”が、ない。３０人近くの人数が鍛錬を行っていたにも関わらず、ただの１人も気配を感じなかった。

仮に休憩をとっていたとしても、多少の気配を感じるはずだ。それなのに、何も感じ取れないのはおかしい。あり得ない。

「学長」

「うむ」

鉄心とルーは急ぎ足で川神院へと向かう。一体何があったのだろうか……それに、ワン子の気配も感じ取れない。

様々な不安が脳裏をよぎるが、考えていても拉致があかない。まずは現状を確認するのが最優先である。

川神院の前まで来た鉄心達は、門を潜り抜けて野外道場へと辿り着く。

「――――なんと!?」

「――――これは!?」

声を揃える鉄心とルー。そこには、想像を絶するような光景が広がっていた。

――――鍛錬をしていた修行僧が全員、傷を負って倒れている。この惨状に、鉄心とルーは言葉を失う。

まるで大型のハリケーンにでも巻き込まれたかのように、場外に投

げ出された修行僧や、場内には修行僧達の身体が転がっていた。

「どうしたんじゃ！？一体何があった！？」

しっかりせい、と鉄心が近くに倒れている修行僧の頬を叩く。しかし反応はなく、起きる気配はないが、気絶しているだけで死んではいないようだった。

「なんて酷い……一体誰がこんな事を」

ルーは修行僧の一人を抱きかかえながら、苦悶の表情を浮かべる。

とにかく、一人ずつ中へ運ぼう……鉄心達が修行僧達を抱えたその時だった。

「あ、じーちゃん。ルー師範代、おかえり！」

二人の背後から聞き覚えのある声。振り返ると、薙刀を持ったワン子の姿があった。

ワン子はこの惨状をまるで何事もなかったかのように、いつもの元気な笑顔のまま鉄心とルーを出迎えている。

それは、あまりにも異質。この状況でワン子が笑っているその光景は、不釣り合い過ぎた。

鉄心とルーはある疑念を抱く。

――――“まさか、これは全てワン子がやったのではないか？”

それはあり得ない。あって欲しくない。ワン子がこんな酷い事を、平気な顔でできるはずがない。それは鉄心とルーが一番よく知っている。だから、鉄心はワン子に問いかけた。

「一子……一体、何があったのじゃ？」

恐る恐るワン子に話しかける鉄心。ワン子の仕業なのではないかという、信じたくないような返答がこない事を祈りながら。

そしてワン子は笑みを絶やさず、ゆっくりと口を開く。

「凄いでしょ。これ全部――――――アタシが倒したのよ」

ワン子から返ってきた言葉は、鉄心とルーが予想していた通りの“悪夢”である事を告げていた。

## １５話　歪み（後書き）

次回は黒ワン子ＶＳ鉄心です！
ちなみに大剣の少女とシスターの正体は、クェイサーファンならもうお分かりですよね（笑）

# 16話　浸食する力

荒れ果てた川神院に、修行僧を一人残らず全滅させたというワン子。

そして、信じ難い現実を突き付けられている鉄心とルー。

悪夢を見ているのだろうか……否、これは悪夢であると思いたい。
自分の家族のように修行僧達を慕っていたワン子が刃を向けるなど、あっていいはずがない。

しかし、この状況が真実を肯定している。故に、鉄心達が目の前にしている現実はあまりにも残酷過ぎていた。

「一子……本当にお前がやったのか？」

鉄心がもう一度真偽を問う。するとワン子が顔をしかめながら再度返答する。

「そうよ……あ、もしかして信じてない？ひどいなぁ、アタシだって日々成長してるのよ？」

ワン子の返ってきた言葉は同じだった。冗談だと言うのを期待した

が、やはりワン子がやった事は真実である事に変わりはない。

「一子、どうしてこんな事を…」

真意が知りたい……ルーはワン子に問いかける。

「だって、アタシが強くなった所を見せれば、じーちゃんが戦ってくれると思って……」

それは、純粋なるワン子の願望だった。善意もなければ悪意もない、ただ鉄心と戦いたいと言う理由のみ。

たったそれだけの理由で、ワン子は修行僧達に手を出したのだ。

あの時、少しでもいいからワン子と手合わせをしていれば……鉄心は自分のした選択を呪った。

「む……」

険しい表情をしながらワン子を見つめる鉄心。

ワン子がどういう心境の変化でこんな事をしたのかは定かではない。しかしこの事態を招いてしまったのは、少なくとも自分自身にある。

もう選択の余地はない……ワン子は鉄心との戦いを望んでいる。けじめをつけるため、鉄心はワン子のいる方へと進み、拳を構えた。

「学長！？」

鉄心の行動に、ルーは思わず叫ぶ。鉄心はワン子と戦う事を選んだのだ。自分のした過ちを正すために。そして、ワン子の真意を問う為に。

「こうなってしまったのもワシの責任じゃ。ワシのけじめは、ワシがかたをつけよう」

鉄心がルーに下がっておれと伝えると、ワン子と再び向き合った。

「一子……お前の気持ちはようわかった。じゃがお前のした行いは、いくら孫といえども許してはおけん――――今からお灸を据えてやるわい！」

瞬間、鉄心の闘気が爆発した。身体中から闘気が溢れ、周囲に風が巻き起こる。同時に鉄心の気の威圧が、ワン子の精神に重圧感を与

えた。しかしワン子は、

「――――――」

その闘気に怯む事なく、ただ笑っていた。鉄心との戦いを、心待ちにしていたかのように。そしてワン子も薙刀を構え、鉄心と対峙する。

「……では、ワタシが立ち会いましょう」

ルーが審判として両者の間に立つ。鉄心もワン子と戦う覚悟を決めている以上、自分もそれを見届けなければならない。

例えこれが、望まれぬ戦いであったとしても。

「西方――――川神鉄心！」

「うむ」

ルーの掛け声と同時に、鉄心が一歩前へと出る。

「東方――――川神一子！」

「はいっ！」

ワン子も一歩、前へ出た。

これから始まる二人の戦い……ルーは思わず息を呑む。空気が重い。何故だか分からないが、ワン子という存在が、まったく別の人間であるように思えた。

「では――――はじめっ！」

ルーの始まりの合図と共に、鉄心とワン子の戦いの火蓋が切って落とされた。鉄心とワン子は同時に走り出し、衝突する。

「川神流奥義――――無双正拳突き！」

先手は鉄心。拳を突き出し、強烈な正拳突きをワン子に放つ。しかし相手はワン子。強くなったとはいえ、本気は出せない。ある程度は力を加減する必要があった。

が、その考えは甘かったと思い知らされる事になる。

「川神流奥義――――無双正拳突き！！」

ワン子は薙刀を構えて突貫するかと思えば、薙刀をバトンのように空高く投げ、鉄心が使った技を、同じ動きと、同じタイミングで拳を突き出した。

「――――むっ！？」

拳と拳がぶつかり合い、二人の周囲に衝撃波が発生する。鉄心は加減をした分、力負けして全身が軋みを上げた。

「馬鹿な！？一子、その技をいつ体得した――――」

ワン子の攻撃に、動揺を隠せない鉄心。しかしその問いに対し返答を待つ暇もなく、ワン子の次の攻撃が襲ってきた。

ワン子は投げて落下してきた薙刀をタイミングよく掴み取り、鉄心を追撃する。

「我流奥義――――真空十七連撃！！」

豪雨のような薙刀の突き攻撃が、鉄心に襲いかかる。鉄心は連撃を千里眼を使い、見切り、それを躱す。

「何――――!?」

鉄心の頬や衣服に切り傷が入る。十七の連続攻撃を全て躱したはずだ……攻撃を当たるはずがない。

鉄心は一度後退し、ワン子から距離を取り体制を立て直した。

そして――――気づく。ワン子の薙刀の異変に。

（まさか……気の刃!?）

鉄心は全ての攻撃を躱してはいた。ただし、躱したのは薙刀の刃であって、纏っていた気の刃までは避けられなかったのである。

まさか、ワン子がここまで強くなっていたとは……鉄心は考えを改めなければならない。

その強さが一体どこから来るのかは分からないが、少なくとも加減

をしていては勝てないということだけは理解した。

「成る程のう……確かにお前は強くなった。一子よ、お前を一人の戦士として認めねばならんの」

ワン子の強さを体感し、ワン子を戦士として認識する鉄心。だがそれは同時に、鉄心が本領を発揮する予兆でもあった。

覚悟はいいな――――鉄心は再び構え、反撃を開始する。

「はあああああっ！！」

鉄心の怒号と共に、正拳突きと蹴りの雨をワン子に浴びせた。先程よりもスピードが上がり、今よりも本気で戦っている事が見受けられる。

ワン子も回避をするものの、全ての攻撃を避けきれず、身体中に打撃を受けた。衝撃で身体が吹き飛ばされて、地面を転がっていく。

「ぐっ……！？」

傷を負った身体を抑え、地面に蹲るワン子。立ち上がれず、咳き込

みながら藻掻いていた。

そして鉄心が一歩一歩、ワン子に歩み寄る。

「まだまだじゃな、一子。少しは腕を上げたようじゃが……それではワシには勝てんぞ」

思い上がるな、と言わんばかりに鉄心は現実をワン子に叩き付けた。孫と言えども戦士と認めた以上、情けは無用である。

今のワン子では鉄心には届かない……力の差を見せつけられた瞬間だった。ワン子は地面に爪を立てて、掴むように拳を握り締めながらゆっくりと立ち上がる。

しかし、もう立ってなどいられない状態だった。薙刀を杖代わりにしてようやく立っているくらい、体力を消耗している……鉄心にはそう見えた。

「もうやめるんだ、一子。勝負はついた。これ以上は身体が持たない……」

ルーがワン子を心配し、戦いを止めるよう促す。これ以上戦えば身が持たない……それだけ、鉄心は強い存在なのだ。

しかし、ワン子はルーの言葉に耳を傾ける事はなかった。ただ静かに、顔を地面に俯かせながら立ち尽くしている。そして、

「――――まだ、戦えるわ」

『――――マダ、タタカエル』

ワン子が言葉を発したその刹那、鉄心とルーはただならぬ殺気を感じ取った。

まるで、背中からずぶりと鋭利な刃物で串刺しにされたような感覚。それは間違いなく、ワン子から発せられていた。

ワン子は何事もなかったかのように体制を立て直し、薙刀の切っ先を鉄心に差し向ける。

「一子、お前は一体――――」

鉄心が声をかけた時には、もうワン子の姿はなかった。そして、同時に右肩が熱くなる。

次の瞬間、鉄心の右肩から血が勢いよく噴出した。鉄心は右肩を抑

えながら、苦痛に顔を歪ませる。

……ワン子は鉄心の背後にいた。鉄心の右肩を、背後を取る瞬間に斬りつけたのである。今までのワン子とはまるで違う、俊足の一撃だった。

「まだまだいくわよ！」

再び攻撃を仕掛けるワン子。薙刀を振り回しながら突貫し、鉄心に斬りかかる。

「ぐっ――――――！？」

鉄心は肩を抑えつつ、攻撃を躱す。ワン子は本気だ……仮にも親である鉄心に対し、刃を向けている。それも、何の躊躇いもなく。

「せやあああああ――――――！」

ワン子が薙刀を振るう度に、薙刀が纏う気の刃が炸裂し、鉄心の体力と身体を削っていく。スピードは次第に増していき、鉄心はもはや手を出せずにいた。

（一子、まさかこれ程まで……）

ワン子は戦えば戦う程強くなっていく……鉄心はそう感じていた。

一体ワン子の何がそうさせているのか、分からない。ワン子の真意が見えない。

もし、それが“純粋な強さ”を求めているものだとするなら、それはかつての百代と同じになる。このままでは、ワン子の精神が危険に晒されかねない。

それなら――――鉄心は止むを得ないと、ある決断を下した。攻撃を躱しつつ気を練り上げ、精神を集中させる。

「とどめぇ――――――！！！」

ワン子は渾身の薙刀の一撃を、鉄心に向けて放つ。

「甘いわっ！」

鉄心は瞬間、ワン子の背後に回り込んだ。ワン子の一撃が空振りに終わり、そのまま身体を回転させ、振り返りながら薙刀を振るった。

これで終わり――――ワン子は勝利を確信する。じーちゃんに勝てる……これでまた一歩百代に近づけると、期待に胸を膨らませながら。

しかし、それも夢想に終わる事になる。

なぜならそれは、

「――――顕現の参・毘沙門天」

決して避けることのできない最強の一撃が、ワン子に降り掛かったからである。

「――――!?」

ワン子が頭上を見上げた時には、既に身体は地面に伏せていた。

まるで何かに踏み潰されたような……否、実際に踏み潰されたのだ。

鉄心が具現化した、毘沙門天によって。

それは、０．００１という一瞬の出来事。ワン子が振り向いた直後、毘沙門天の巨大な足がワン子を踏み潰していた。

避けられる隙などありはしない、毘沙門天の一撃。それは、ワン子の戦いが“終わっている”事を意味していた。

やがて毘沙門天が消える。踏み潰されたワン子は、地面に食い込み倒れ伏せて気絶していた。薙刀は無残に折れ、身体中は傷だらけであり、闘気はもう感じられない。

「終わったか……」

鉄心は膝を突き、大きく溜息を着く。ワン子から受けたダメージと毘沙門天を具現化した事によって、体力を大幅に消耗していた。また鉄心の年のせいもあり、これ以上戦うには無理がある。

「が、学長！いくらなんでもあの技は……」

鉄心に駆け寄るルー。一般の人間に対して毘沙門天は危険であり、下手をすれば命の危険すらある。相手が百代でもない限りは、使うのはタブーである。

「今の一子は、昔の百代と同じじゃった。このままでは二の舞にな

る……止むを得んかったのじゃ」

鉄心も危険である事は重々承知していた。しかし、鉄心が追い込まれていたせいもあり、鉄心自身も危険であったのだ。

もし毘沙門天を使わなければ、今度は右肩を斬られただけでは済まされなかったかもしれない。

それだけ今のワン子を危険視していた。以前の百代のようにならない為には、あれが最善策だと鉄心は判断している。

「……とにかく、一子と修行僧達を運ぼう。話はそれからじゃ」

「……そうですネ」

戦いは終わった。鉄心は負傷した一子と修行僧達を院内へ運ぼうと動き出す。ルーも頷き、ひとまず鉄心に従うのだった。

傷が癒え、ワン子が目を覚ましたら話を聞かなければならない。一体、ワン子に何があったのかを。

――――と、動き出したその時、それは起こった。

「「――――!?」」

鉄心とルーに、再び殺気が襲いかかった。今度は先程感じた殺気よりも濃くなっている。

まるで、どす黒い何かが鉄心達の身体を、内側から浸食していくような感覚だった。鉄心達は殺気を感じた方角――――ワン子へと視線を向ける。

「――――」

ワン子の身体から、いくつもの黒い煙が立ち上っていた。その煙に操られるような形で、ワン子はゆっくりと、俯いたまま立ち上がる。

ワン子の身体は徐々に傷が回復していき、鉄心から受けたダメージを全てリセットする。

“瞬間回復”――――百代が使う奥義を、ワン子は使用していた。

「な……瞬間回復じゃと!?」

驚愕する鉄心。瞬間回復は、百代にしか使う事のできない奥義であるはずだ。

それをワン子は体得している……あり得るはずがない。だが百代とは違い、負の感情を増幅させたような歪んだ回復であった。

「……アタシは、ここで止まるわけにはいかない」

トーンの低い、ワン子の声がする。だが、もはやそれはワン子の声ではない。ワン子の声をした“何か”である。

「……アタシは、お姉さまを――――あいつを必ず倒す」

ワン子は俯いていた顔を上げ、鉄心達を睨みつけた。その瞳の奥は、完全に闇色に染まっている。目付きも鋭くなり、表情から笑顔が消えていた。

ワン子の全ては、“憎しみ”に塗りつぶされている。

そして――――ワン子の体操服の胸元が少し破れ、そこから“あるもの”が見えた。

鎖骨の下の辺りに着いた、黒い紋章。その紋章はワン子の肌に根を張り巡らせ、まるで身体の一部になっているかのように装着されていた。

「……一子、まさかそれは！？」

鉄心は確信する。ワン子が異常なまでに強くなった理由を。それは、ワン子の胸に装置されたものが、川神市を震撼させている、“元素回路”であることを。

「――――川神流奥義」

ワン子は気を集中させ、静かに瞑想を始めた。身体中からは黒く禍々しい闘気が溢れ出し、周囲に暴風が巻き起こる。鉄心達は身の危険を感じ取った。

このままではやられる……目の前のワン子という名の“敵”によって。

「――――星殺し！！！！！」

ワン子は両手を突き出し、黒い闘気と化した禍々しい極太のエネル

ギー砲を、鉄心達に向けて解き放った――――――。

## １６話　浸食する力（後書き）

補足説明

技名：『川神流我流奥義・真空十七連撃』

ワン子が編み出した我流奥義。クマちゃんに使用した『一瞬十七撃』の派生技で、気を纏った薙刀で連続突きをする技。この技を使用する度、ワン子自身のスピードが上昇する。

と、初めてオリ技を書いてみました。黒ワン子つえー（ぇ

## サブエピソード１３「空に轟く咆哮」

七浜中華街本通り。

百代は七浜スタジアムでの模擬戦闘を終え、中華街で買った（殆ど通りすがりの女性に奢ってもらった）お土産を片手に、中華まんを頬張りながら通りを歩いていた。

「もぐもぐ……戦った後の中華まんはうまいな」

中華まんを一つ食べ終えてはまた一つ頬張り、中華街の食べ歩きを満喫する百代。ご機嫌な足取りで中華街をしばらく歩いていると、ふとある店の宣伝看板に目が入った。

『今だけ！期間限定ボルシチまん　発売中！』

ボルシチまんと書かれた看板の横に、蒸し器に大量に盛られたボルシチまんが、ホカホカと湯気を立たせながら店頭に並んでいた。

ボルシチまんは組み合わせ的にどうかと思う百代だったが、人集りが少し出来ているだけあって、思いの外売れているらしい。

（そういや、サーシャがボルシチ好きだったな……）

島津寮で、サーシャがボルシチにがっついていた時の事を思い出す。

同じ川神院で暮らしている仲だ、まふゆ達に買っていってやるか…

…百代はボルシチまんを購入しようと、人集りの中へ足を進めた。

『“張り裂けそう　今でも　私を抱きしめ～て～……”』

百代の携帯の着うたが鳴り響く。ポケットから携帯を取り出し、画面を確認すると大和の名前が表示されていた。百代は早速携帯に出る。

『――もしもし、姉さん？』

受話器からは大和の声。

「大和か、どうした？」

『もう模擬戦は終わったの？』

「ああ、ついさっきな……もぐもぐ」

大和と会話しつつ、また中華まんを頬張る百代。食べるか喋るかどっちかにしてくれ……と大和がボソッと呟いていた。

「もぐ……ごくん、すまんすまん。いやぁ、中々に楽しめたぞ」

模擬戦闘の感想を、楽しそうに百代は語る。

百代の対戦相手は、大剣を使う少女だった。分子振動による高周波を発生させ、物質を両断する剣を振るい百代を圧倒したが、太刀筋を見切られ、最後は百代の一撃で幕を閉じたという。

戦闘時間は１０分程度。百代との戦いにしては、長い方である。

『そりゃよかった……ところで、姉さんはいつ戻るの？』

「もう少し中華街を歩き回ろうと思ってる。ああ、そうそう。ボルシチまんってのが売っててな、サーシャが好きそうだから買って――――」

――――瞬間、空が震えた気がした。

「――――!?」

黒い咆哮が、七浜の空に響き渡る。

そして百代の耳に聞こえてくる、嘆き、憎しみ、妬み、蔑み……様々な負の感情が、百代の身体を襲った。あまりの負の濃度に、吐き気さえ覚えるくらいに。

しかし、周囲の人間は何も感じてはおらず、平然と大通りを歩いている。感じたのは百代だけだった。

『うっ……ぐ……』

受話器の向こう側で聞こえる、大和の呻き声。大和もこの感覚を感じ取っていたのだろう。百代は大和に呼びかける。

「大和どうした。一体何があった!?」

『わ、分からない……急に吐き気が……』

「私も感じた。何なんだ、この禍々しい気は……けど、どこか懐かしさを感じる」

禍々しさの中に、まるで不純物のように入り混じった懐かしい感覚。何故だろう……それが思い出せない。

『この感覚……川神院の方角からだ……』

「川神院!?」

川神院……大和のその言葉に、百代は驚愕した。強大な気の強さに、大和も感じ取れたのだろう。

川神院に何があったのだろうか。あそこには鉄心やルー、修行僧。そして……ワン子もいる。不安が一気に押し寄せ、百代はいても立ってもいられなかった。

「待ってろ大和、すぐに戻る!」

『ま、待って姉さ――――』

百代は一方的に電話を切り、持っていたお土産を放り出し、最寄駅

へと駆け出した。

近くの駅に辿り着いた百代は、早速改札の入り口の中へ入る。しかし、中は大勢の人でごった返していた。

駅員が中にいる人達を誘導し、何かを説明している。

『只今人身事故の影響で、運転を見合わせております――――』

駅の中でアナウンスが入る。電話は人身事故により、運転を停止していた。

「くそっ――――――！」

こんな時に……百代は舌打ちをすると、踵を返して駅を後にする。

電車は使えない。タクシーを呼ぼうにも、持ち合わせが足りない。

それならば、走るしか手立てはないだろう。

道路沿いを走り、百代は川神院を目指す。少し時間はかかるかもし

れないが、体力は十分にある。

問題は川神院の安否だ。あの禍々しい気はただ事ではない。間違いなく何かが起こっていた。

しばらく走っていると、百代と並ぶように、バイクが道路を走っていた。するとバイクは急に加速し、角を曲がった所で百代の前に止まり、立ち塞がる。

バイクの乗り手はヘルメットを外し、その素顔を晒す。その正体は保険医の麗だった。

「乗って、百代ちゃん！」

麗はバイクの後ろに掛けられたヘルメットを百代に投げる。どうしてここに……と問う暇はない。百代は頷き、ヘルメットを被りバイクに跨る。

百代が麗の背中に捕まった事を確認すると、麗は再びバイクを発進させた。

――――その一方。サーシャ達も車を使い、川神院へと急いでいた。

「まずい事になりましたね」

ハンドルを握りながら、ユーリは目を細める。助手席にはサーシャ。後ろにはまふゆ、華。そしてカーチャ。

川神市から川神院で異変が起きているとの報告があり、連絡を受けたサーシャ達は途中で訪れていた七浜をすぐに出発した。

「俺のサーキットが異常な反応を示している……くそっ、目の前に手掛かりがあるというのに！」

サーシャは唇を噛んだ。サーシャの左耳に着いているイヤリングが、真っ赤に発光している。

サーシャ達も禍々しい気を感じ取っていた。イヤリングが反応している以上、元素回路が関っている事は明白である。

それも、現在地の七浜から反応しているという事は、それだけ強大な力があるという事だ。

川神市に近づくにつれ、サーシャのイヤリングが大きく揺れ動き、発光がさらに強くなっていく。

「でも、あの感覚……どこかで感じた気がする。それも最近」

う～ん、と腕を組んで考えるまふゆ。まふゆもあの気の中に、何かを感じている。だが、思い出せなかった。

『“簡単なんだ　前向いてよ　今度は～……”』

まふゆの携帯が鳴り出す。取り出して確認すると、画面には麗の名前があった。まふゆはすぐに電話を取る。

「もしもし、麗先生？」

『――その声、まふゆか？私だ、百代だ！』

電話の相手は麗ではなく、百代だった。

「モモ先輩！？どうして……」

『今麗先生のバイクで川神院に向かってる！聞いてくれ、川神院の様子がおかしいんだ！』

焦燥しきった百代の声が、電話を通して伝わってくる。どうやら百代も麗と共に向かっているらしい。

「私たちも今向かってます！鉄心さん達、無事だといいんだけど……」

『ああ……とにかく、川神院で落ち合おう。切るぞ！』

百代との通話が途絶える。まふゆは携帯を閉じると、ユーリとサーシャが座る席の間に顔を出した。

「麗先生とモモ先輩も向かってるみたいです。ユーリさん、急いで！」

「ちょ……お、押すなよ織部！」

「ちょっとまふゆ、ただでさえ狭いのに――――！」

とうとうまふゆは身を乗り出した。同席していた華とカーチャとも

みくちゃになり、車が揺れ動く。

「あまり揺らさないでくださいよ。それに……急いでいるのは私も同じです」

ユーリは車のアクセルを踏み、スピードをあげて走行する。ユーリもまふゆ達と同じ思いだった。

（鉄心さん……無事でいるといいのですが）

一抹の不安を抱え、ユーリは川神市へと車を走らせるのだった。

## サブエピソード１３「空に轟く咆哮」（後書き）

ありがとうございました。
ちなみに百代の携帯の着うたはクェイサー？のＯＰ「螺旋、或いは聖なる欲望。」
まふゆの携帯の着うたはアニメまじこいのＯＰ「Ｕ－ｎ－ｄ－ｅ－ｒ－－ＳＴＡＮＤＩＮＧ！」になります。
何となく、逆にしてみました。
また、中華街へ行ってもボルシチまんは売ってません（笑）

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2097w/

聖痕のクェイサー×真剣で私に恋しなさい！

2011年11月22日04時05分発行